令和６年度　研究紀要（web 版）

つながる保育

～ 園と園のつながりを広げ、深める～

上越教育大学附属幼稚園

もくじ

１－　１	研究概要、アウトカムプロセス
１－　２	研修ヒストリー
２－　１	３歳Ⅰ期エピソード
２－　２	３歳Ⅱ期エピソード
２－　３	３歳Ⅲ期エピソード
２－　４	３歳Ⅳ期エピソード
２－　５	４歳Ⅴ期エピソード
２－　６	４歳Ⅵ期エピソード
２－　７	４歳Ⅶ期エピソード
２－　８	４歳Ⅷ期エピソード
２－　９	５歳Ⅸ期エピソード
２－１０	５歳Ⅹ期エピソード
２－１１	５歳Ⅺ期エピソード
２－１２	５歳Ⅻ期エピソード
３	今年度の研究を振り返って

令和６年度　研究推進の概要

上越教育大学附属幼稚園

１　研究テーマ

つながる保育（２年次）　　～　園と園のつながりを広げ、深める　～

２　研究テーマについて

令和５年４月、「こどもまんなか社会」の実現を目的に、こども家庭庁が発足した。令和５年 12 月には「幼児期までの子どもの育ちにかかわる基本的なビジョン」が示され、子どもの豊かな育ちにかかわる社会全体の認識を共有していく必要性がより強調されている。

中央教育審議会「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について」では、「幼児教育施設においては、複数の施設類型が存在し、それぞれが特色ある幼児教育を展開していることから、小学校との接続の基盤となる幼児教育施設間の横の連携強化に取り組むこと」の重要性が示されている。園と園が施設類型を超えて連携することにより、幼児教育・保育の質にかかわる認識を共有していくことが大切であり、その認識の共有が架け橋期のカリキュラム作成の基盤にもなるということである。互いの園の文化に触れあいながら学び合うことにより、相互に保育の質を高めていく関係性を構築していくことで、保育の質にかかわる認識を共有し、地域全体として、より質の高い幼児教育・保育を目指していくことが大切である。

そのような幼児教育を取り巻く状況の中、本園では令和５年度より新たな研究テーマを「つながる保育」と設定した。今後さらなる保育の質の向上を目指していくためには、保育観を共有している職員との語り合いや保育の評価にとどまらず、園の垣根を越えて互いの保育について語り合うことによって、保育観を耕していくことが必要であると捉えた。そこで、「子どもの豊かな育ちを支えたいという思いの共有のもと、多様な考えにふれ合う中で保育を更新したり、交流するよさを実感したりする関係性」を「つながり」と定義し、「つながり」の中で更新していく保育を「つながる保育」と呼ぶことにした。本園が他園とつながりをつくることで、本園の保育の質をさらに向上させること、幼児教育・保育の質への理解を共に深めることを目指し、地域における国公立の園の果たす役割について検討していくこととした。

１年次の研究を終え、互いの園の思いを擦り合わせていく過程において、新たに「交流だより」「公開カンファレンス」「合同研修」「合同保育」の交流のかたちが生まれ、園と園のつながりをつくるためのしくみが見えてきた。これらの交流の取組を通して、新たな見方や考え方を得たり、当たり前だと考えていたことを問い直したりして、保育観が耕されていく実感を得た。交流を通して、園と園の「つながり」は互いの保育観への共感によって生まれるのではないかと捉えた。また、本園での交流が、他園の情報を得られる場として機能している実感もあり、本園がいわゆる幼児教育・保育の「ハブ」のような役割を担えるのではないかという展望も見えてきた。

一方で、継続的な「つながり」をつくることが課題となった。１年次の交流の中で、異なる文化や価値観をもった園と園の「つながり」は簡単にできるものではないと実感した。互いの文化への共感が生まれるためには、多様な見方や考え方を知り、絶えず保育を捉え直していくことが必要であると考えた。また、交流をする上で、交流時間の確保の難しさ、交流を行う職員のリソース不足、交流をする職員の変更があったとしても、「つながり」を持続可能にしていくようなしくみが必要であると考えた。

そのために、1 年次研究の中で実施してきた「交流だより」「公開カンファレンス」「合同研修」

「合同保育」が、どのように保育の捉え直しにつながっているのか、どのように交流するよさの実感につながっているか、どのような交流がハブのような役割を担うのか、どのように持続可能な交流をつくっていくかを検討していく必要性を感じている。継続して交流し、「つながり」を広げ、深めていく中で、そのしくみを整えていきたいと考える。

これらのことを踏まえ、２年次研究では、研究副題を「園と園のつながりを広げ、深める」と設定した。１年次研究のなかでつくってきた「つながり」を基盤として、継続的に交流をすることによって園と園の「つながり」を広げ、深めることを目指し、そのしくみを整えていくこととした。

３　研究計画と研究の内容

第１年次「園と園とのつながりをつくる」（令和５年度）

・園と園との「つながり」をつくることを試みる中で、本園の保育を捉え直す。

・園と園との「つながり」をつくるしくみを探る。

第２年次「園と園とのつながりを広げ、深める」（令和６年度）

・継続的な「つながり」の中で、より質の高い保育のあり方を考え、本園の保育を捉え直す。

・園と園との「つながり」をつくるためのしくみを整える。

第３年次（令和７年度）

・園と園とのつながるしくみを確かなものにしながら、他校種とのつながりを試みる。

・園と園との「つながり」をつくる役割を担う園の在り方について検討する。

４　研究方法（第２年次）

（１）交流の継続的な実践と検討

１年次研究でつくってきた「交流だより」「公開カンファレンス」「合同研修」「合同保育」の交流を継続的に行う。これらの交流を実施する中で、保育観の耕しにつながるような交流、つながるよさを実感できる交流、ハブのような役割を担う交流、持続可能な交流になっているかということを視点に検討し、必要に応じて交流のかたちを更新していく。検討していく際、交流にかかわる幼児のエピソード事例、カンファレンスの記録、交流の検討プロセスの記録、他園からの交流後の感想を基に行う。

（２）大学や研究協力園との連携

①研究協力園との連携

１年次研究における研究協力園（以下、Ｒ５協力園）とは、継続した交流を行う。２年次研究における研究協力園（以下、Ｒ６協力園）には、２年間の継続した交流の意味や価値について助言を依頼する。Ｒ５研究協力園と交流をする際には、Ｒ６協力園以外の園にも呼びかけを行い、交流に多くの園が携われるようにしていく。

②大学との連携

「つながり」をつくる過程で、大学との連携を行い、専門的な立場からの意見を依頼する。「交流だより」における保育実践や交流への価値づけ、交流のもちかたについての助言、他園の悩みや迷いに応じて大学教員からの指導を受ける機会の設定など、より質の高い保育の捉え直しや、「つながり」を広げ、深めるための示唆を得る。

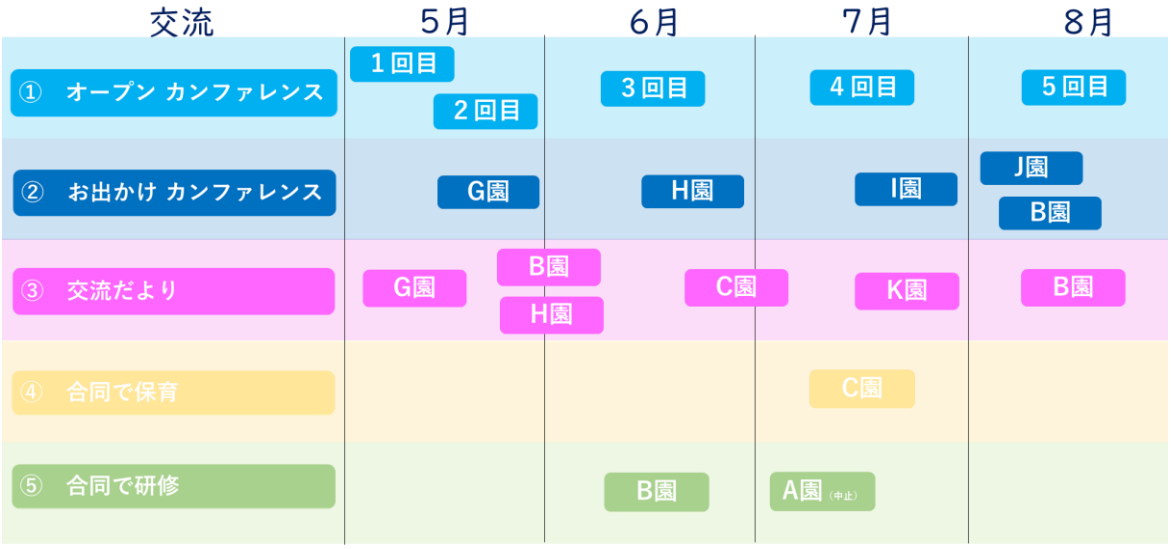
５　研究の実際

（１）交流の継続的な実践と検討

①　交流の実際

まずは、今年度の交流を実施していくにあたり、交流において大切にしたい心構えとして「園と園とで一緒に交流を考え、つくっていく」ことを、全職員で共有した。

２年次に実際に行った交流の全体像は、（図１）の通りである。以下、それぞれの交流の検討プロセス、交流の実際、交流が子どもの育ちを支えた事例、実践と検討を行った本園職員の実感について述べていく。



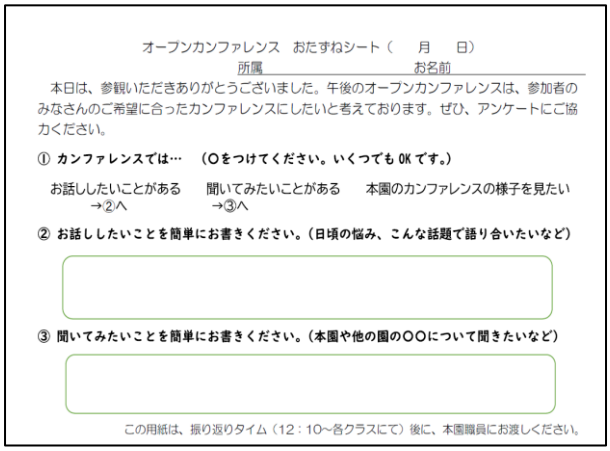
※Ｒ５協力園　Ａ園　Ｂ園　Ｃ園　　Ｒ６協力園　Ｂ園　Ｋ園　Ｌ園

（図１）２年次に実際に行った交流の全体像

②　オープンカンファレンス

Ⅰ　オープンカンファレンスの検討プロセス

１年次に実施した「公開カンファレンス」の参加者の事後アンケートの見直しを行い、「保育の悩みを本音で語れてよかった」「保育を語る仲間が増えた感じがした」「参加していた他の園の情報が聞けてよかった」「行事についてももっと話が聞きたい」「本園が身近に感じられた」という感想から、今年度のカンファレンスの場をどうつくっていくかを考えた。これらの参加者の声を受け、「公開カンファレンス」を「さらに話しやすい場」に、「さらに情報を得られる場」に更新していこうと考えた。


オープンカンファレンス　おたすねシート（　月　日）
所属　　お名前
本日は、参観いただきありがとうございました。午後のオープンカンファレンスは、参加者のみなさんのご希望に合ったカンファレンスにしたいと考えております。ぜひ、アンケートにご協力ください。
① カンファレンスでは…　（○をつけてください。いくつでも OK です。）
お話ししたいことがある →②へ　聞いてみたいことがある →③へ　本園のカンファレンスの様子を見たい
② お話ししたいことを簡単にお書きください。（日頃の悩み、こんな話題で語り合いたいなど）
③ 聞いてみたいことを簡単にお書きください。（本園や他の園の○○について聞きたいなど）
この用紙は、振り返りタイム（12：10～各クラスにて）後に、本園職員にお渡しください。

（図２）事前アンケート

「さらに話しやすい場」にしたいと考えた背景には、参加者と本音で語り合い、「つながり」を深めたいという願いがあった。本園の保育観や援助に対する考え方に共感してもらうだけではなく、時に批判的な意見や、迷いを赤裸々に語ってもらうことができたら、多様な見方や考え方に出会うことができ、本園の保育のさらなる捉え直しにつながるのではないかと考えた。そのために、参加者の思いや実態を知ることが大切であると考え、事前アンケート（図２）を行うことにした。このアンケートは、参加者が話したいこと、聞きたいことを簡単に記述する形式にな

っている。また、悩みや迷いを気軽に話してほしいという願いを込め、会場にお菓子を置く、話しやすい距離にいすを置く、カンファレンス終了後にフリートークの時間を設定するなど、環境の工夫も試みた（図３）。

（図３）環境の工夫

「さらに情報を得られる場」にしたいと考えた背景には、本園を「ハブ」のようにして、本園と他園、そして他園同士の「つながり」が広がってほしいという願いがあった。そこで、これまでの交流で蓄積してきた「交流だより」をいつでも閲覧できるように環境を設定した。また、他園の行事を更新した軌跡を綴った動画を提供していただいたので、それをいつでも見てもらえるようにした（図４）。

（図４）交流だより・動画が閲覧できる環境

カンファレンスの形式も更新していくことにした。１年次に実施した「公開カンファレンス」では、参加者に本園が評価の取組として行うカンファレンスを参観してもらい、聞いていた感想を語ってもらうという形式で行っていた。２年次は、全員が語り合う仲間として、一緒に参加できるようにしたいと考え、形式を更新した。具体的には、今自分が保育について語りたいことを、一人ずつ語っていき、その中で語られた悩みや共通に出てきた話題を全員で語り合うような形式である。

これらの検討プロセスを経て、より開かれた語り合いにしたいという思いを込めた名前に変更したいと考えた。「公開カンファレンス」を改め、「オープンカンファレンス」と呼ぶことにした。

Ⅱ　オープンカンファレンスの実際

オープンカンファレンスの実際は、（表１）の通りである。オープンカンファレンス（図５）では、最初から話題を設定していたわけではなく、参加者が語る保育の迷いや悩み、その日の公開保育での幼児の姿を語ったことが基になり、語り合いの中で話題がつくられていった。カンファレンスが終わった後に、１５分程度のフリートークの時間を設定すると、その時間に参加者同士の語り合いが始まり、自然とつながりが広がり、深まっていった印象を受けた。

（図５）カンファレンスの様子

（表１）　オープンカンファレンスの実際

実施日 参加者	・話題になったこと　〇感想
５月８日 本園７名 他園８名	・幼保小の接続について。小学校側からの要望にどう対応するとよいのか。 ・主体的な保育を大切にしたいが、一斉保育が間違っていたわけではなく、経験として大事な部分もある。 ・集中して遊び込むこと、話を聞くことが、学習に対する集中力にもつながるのではないか。設定する部分と、自由にする部分とのバランスが難しい。 ・子どもの「やりたい」という気持ちを広げられるような環境構成について知りたい。 ・教師発信であっても、それが子どもの資源や力になっているかどうかが大切だろう。 ・日々の振り返りの中で共通理解を図ることが大切である。 〇理想とする保育の土台として、よりよい保育を考えていけると思った。 〇職員同士で思ったことを出し合い、話合いをしていくことが大事だと思う。
５月 15 日	・「見守ること」は大切だが、言葉の表現の仕方など「人として大事なこと」は伝えたい。そのバランスが難しい。

本園７名 他園６名	・これまでは「こうさせなくては」という思いが強くあったが、子どもたちのことを受け止められるようになってきた。 ・対応に困ったときは、周りの子どもたちが代案を教えてくれることもある。 ・環境構成を整えてから、幼児が遊び始めるまでに時間がかかることもある。遊びに関係あるものを置いておくようにしている。片付けも遊びになる。 ・「ごめんね」とはどういうことなのか、どんな時に使うのかを、みんなで共有するとよいのではないか。 ・切り替えがスムーズにいかず「主体性」を引き出すのは難しい。 ○「附属だからできるのでは…」と思っていたが、実際に参観してみて、自分たちの園でもできるのではないかと思った。
6 月 12 日 本園７名 他園５名	・その日の保育でうれしかったことや、運動会に向けての「ダンス」や「玉入れ」の様子について。 ・片付けの時間がたっぷりとってあり、一人一人に声をかけている。子どもたちの気持ちを聞きながら、気持ちを向けている。そうすると、次の活動への切り替えができるのではないか。 ・職員がいなくても、子どもたち同士で遊べるようにするにはどうしたらよいか。 ・子どもの発想が大人の発想を超えている。子どもたちに聞いてみることも大切。 ・自分が思ったことを伝え、言ったことが叶うという経験を積むことが大切なのではないか。子どもたちの願いと、こちらの考えを擦り合わせていくこと（交渉）が大切だと感じる。 ・遊びが長く続くためにしていることについて。 ○自分ができること、取り入れられることを行い、子どもたちが楽しく過ごせるようにしたい。 ○自分でやってみることで分かることがある。あまり口を出さずに、見守ることの大切さが分かった。
7 月 10 日 本園６名 他園７名	・子どもたちが「泡風呂」をつくりたいと言った。砂場に石けんを入れるのは躊躇したが、どうするとよかったのか。 ・ホースの水を使って、高いところの虫を捕りたい子どもたち。楽しそうだが、人や靴にもかかるため、どう声をかけようか迷った。 ・生活で経験したことが遊びにつながっている実感。 ・高くまでブロックを積みたくて「先生やって」と言われた時、どこまで手伝うとよいのか。 ・なかなか保育室に戻れない幼児に対して、「（保育室に）もっと早く来てくれたらよかったのに」と言うこともあったが、「帰ってきてくれてうれしい」と受け止めるようにした。 ・コンサートを開きたいという子どもの思いを、みんなで支える職員のチームワーク、一人一人に対応する姿が素晴らしい。 ・全員で話題を共有する。みんなが同じ方向を向いていなくてはよい保育はできない。 ○保育士同士の環境は大事で、どうすればよいか悩みながら過ごしていた。附属の先生たちのように、話合いをする中で思いが伝わるとよいと思った。 ○どの場所を見ても、子どもたちがわくわくしている。慌ただしい時間に始まるコンサートをみんなが待っていてる姿を見た。子どもたちが達成感を味わえるように、明日からもっと「待とう」と思った。今何が大事なのかを考えたい。
8 月 6 日 本園３名 他園５名 小学校１名	・判断に困る時の対応について。 ・「この子はこうしたい」という思いに気付き、否定をしないことが大切。 ・大人が「こんなことを？」と思うようなことでも、子どもがやってみたいということを実現できるようにしたい。生活の中にも環境構成をすることが大切。 ・子どもの生活に近い遊びはわくわくする。子どもの気持ちを大切にする活動をしたい。 ・子どもたちが主役である。「なぜ座らない」を「なぜ立っているのか」と捉え、その子なりの理由をそれぞれ考えていきたい。 ・小学校と園とのつながりについて。小学校を見据えると「主体的」というのはなかなか難しい。

	○どんな内容について話すのかどきどきしていた。園長先生、１年目の先生、小学校の先生、小学校から幼稚園に来た先生、いろいろな立場の人たちがこんなに集まる機会はめったにない。お菓子があって心がほぐれた。「この子はどうしてあげるとよいのだろう」と、子どものことを考えながら話す時間は素晴らしい。 ○他の園とこのように話をする機会がなかなかなかった。みんな同じような悩みを抱えていることが分かった。自由保育・自由遊びを広げていこうと職員に話をしたばかりなので、全てまねできるわけではないが、方向性をもって援助していきたい。少しずつでも楽しい保育ができるようにしたい。 ○違った視点からの話をたくさん聞くことができた。子どもたちが興味関心をもつこと、気付きを保育の中でどう取り入れるか参考になった。機会があれば公開保育も参加したい。 ○いろいろな先生方から話が聞けてよい機会だった。子どもたちを否定してしまうと、気持ちを表すことができなくなってしまうため、したいことを保育者が受け止めることが大切だと感じた。 ○「語り合う」ことは大切。一人の考えは限界があるが、語り合うことでみんなが豊かになる。いろいろな方の視点を学んだ。今まで、大人が決めていることが多かったが、少しずつ子どもに任せていきたい。 ○自分の思い通りにさせたくなるのは、時間にゆとりがない時である。子どものありのままを受け止めたい。もう一度落ち着いて考えよう、自分の目や心をもう一度リセットしようと思った。

オープンカンファレンスは、５月から９月までに５回実施し、計３２名の参加があった。実施日や内容については、（図６）のようなチラシを作成し、市内外の園に広報を行った。

（図６）カンファレンスへの参加を呼びかけるチラシ

Ⅲ　オープンカンファレンスによる「つながり」が子どもを支えた事例

オープンカンファレンスを「より話しやすい場」「より情報を得られる場」へと更新していったことが、本園の保育にどうつながっているのかを、幼児の姿とそれを支える教師の姿から、エピソード事例として紡いでいくことで捉えていきたいと考えた。以下にそのエピソード事例を示す。

【３歳クラスの事例】

４月、３歳クラスでは、帰りの集まりの時には、幼児の机を保育室に並べ、いすに座って担任の話を聞けるように環境構成をしている。５月になると、例年、机といすを出さないようにし、床に座るようにしていた。３歳クラス担任は、５月になったので、例年通り、帰りの集まりの時には、机を出さないようにし、床に座って担任の話を聞けるようにしようとした。しかし、机やいすをなくすと、A児がなかなか落ち着かなくなり、どうすればよいか悩んでいた。３歳クラスの担任は、５月８日のオープンカンファレンスの際に他園の先生に、この悩みを打ち明けてみることにした。すると、「子どもが違うのだから、例年と違うかたちでもよいのでは」と意見をもらった。３歳クラス担任は、例年通りの子どもの育ちばかりを思い描いていた自分の姿を自覚し、目の前の子どもの今の育ちにもっと目を向けようと、捉え直した。

そこで、A児が落ち着いて過ごせる姿を思い描きながら、翌日の帰りの集まりから、４月と同じかたちに戻し、机を出してみることにした。すると、保育室を走っていたA児が、自分の席に座って担任の読み聞かせを待っている姿があった。A児にとって机があることは、今何をするのかが視覚的に分かりやすく、安心して過ごすことにつながっているのではないかと捉えた。A児だけではなく、他の幼児も落ち着いて過ごす姿にもつながった。

３歳クラス担任は、オープンカンファレンスがより他園の先生方と話しやすい場になったことが、さらなる保育の捉え直しにつながったのではないかと考えた。今後も、前例にはとらわれず、目の前の子どもの姿を大切にした保育をしていこうと捉え直した。

【５歳クラスの事例】

５歳クラス担任は、４月から、子どもたちの遊びや、今の楽しみに合わせて、毎週２０冊、図書館で借りた本を本棚に並べ、環境構成を行っていた。５月、「土の色ってどんな色」という本を手に取った５歳クラスの B 児は、「幼稚園の土を全種類集めたい」という思いをもった。B 児は、ふるいを使って目の細かい土をつくり、それをセクションケースの中に土の種類ごとに収めていった。B 児は１週間以上、毎日のように園庭を駆け巡り、土集めをしていた。

ある雨の日、新たな土を求めて園庭を歩いていると、粘土質の土がぬかるんでいることに気が付いた。B 児はそれを手に取り、「いいこと考えた、これで粘土がつくれるかもしれない」と言って、手でこね始めた。それがきっかけとなって、粘土質の土でお皿やマスコットをつくる遊びが始まった。B 児は、水と土のちょうどよい塩梅の配合を試行錯誤しながら、２週間くらいの時間をかけてお皿を完成させた。すると、B 児と一緒にお皿をつくっていた C 児が、「これ焼きたい」と話した。B 児は「それいいね！」と言って、今度は土でつくったお皿を焼く「かまどづくり」をはじめようとした。５歳クラス担任は、かまどをつくることなんて、想定もしていなかったので一瞬戸惑ったが、もしかしたら B 児は本当に焼き物を焼けるかまどをつくるのではないかと、B 児たちをわくわくする気持ちで見守ることにした。

B 児は１週間かけて友達と一緒に園庭の隅にあったレンガを積んでいき、バーベキュー遊びに使う金網を上に敷いて、かまどを完成させた。そして、安全にかまどに火をつけるまでに１週間かけて準備を行った。B 児はかまどでお皿を焼くことを、ついに実現した。焼いて真っ黒に焦げたお皿を嬉しそうに抱え、母親に笑顔で見せていた姿は、今でも鮮明に思い出せるほど輝いていた。

５歳クラス担任は、この B 児の姿をオープンカンファレンスで語った。他園の先生方に語ることによって、身近にある土という材の奥深さや可能性、そして、自分自身が「想定外」を楽しみながら遊びを一緒につくっていくことの大切さを自覚した。

後日、カンファレンスに参加した他園の先生方から感想が寄せられた。「早速、園庭の土を掘り始めました。私たち保育士も子どもも今土集めに夢中です」「環境が整った附属幼稚園だからできることだと思っていましたが、どの園にも土はあるから、近々私もやってみたいと思いました」と保育の中で実践したことや、明日の保育が楽しみになったことを聞くことができた。

オープンカンファレンスは、５歳クラス担任にとって、自分のしてきた保育の意味や価値を自覚することができるような場となった。また、他園の先生方にとっては、土の遊びに対する新たな見方や考え方を得る場として機能したのではないかと捉えた。５歳クラス担任は、自分のしてきた保育を、子どものストーリーから語り、「実感を伴う言葉」として発信していくことは、ハブのような役割を担う園にとって、大切なことではないかと捉えた。

Ⅳ　オープンカンファレンスの継続的な実践と検討を行った、本園職員の実感

３歳クラス担任は、エピソード事例を記録していく過程で、「オープンカンファレンスで他園の先生方に日頃の悩みを話すことができ、アドバイスをいただけたのはありがたかった」と振り返った。大切なのは、前例にはとらわれず、目の前の子どもの実態、思いや願いを読み取って支えていくことであると思いを新たにし、自分の保育に自信をもつことにもつながったのではないかと自覚した。また、「名刺交換している方もいて、先生方同士もつながっていくよい雰囲気を感じた」「参加された先生方が和やかにお話してくださっていてうれしかった」と、カンファレンスの雰囲気がよかったのではないかと振り返った。そのような雰囲気であったからこそ、自分の悩みや迷いを語れたのではないかと考えた。

５歳クラス担任は、事例を記録していく過程で、カンファレンスという場が、自分の保育を捉え直していく場として機能していることに改めて気付いた。保育者が悩み、迷った過程も含めて、子どもの姿を基に、実感の伴う言葉で語っていくことの大切さを実感した。また、保育は待ったなしの営みであり、迷いや悩みはつきものであると捉えている。同じように悩みや迷いを抱えている「仲間」が集まり、互いに学び合って明日の保育が楽しくなるような、安心感や期待感をもてる場になっているのではないかと考えた。

５回のオープンカンファレンスを終えた後、本園職員で８月までのカンファレンスについて改めて振り返ってみた。昨年度のカンファレンスと比較して、参加者が本音で語り合う姿が見られたのではないかと共有した。これまでに、「附属園だからできることなのではないか」という意見をもらうことがあり、本園と他園でどこか距離が遠い存在であると感じることが少なからずあった。しかし、オープンカンファレンスでは、悩みを赤裸々に語る姿、疑問に思ったことを本音で語る姿も見られるようになり、一緒に保育を考える「仲間」が増えたような実感があった。カンファレンスの最初の自己紹介の時に、「〇〇園の先生に勧められて参加しました」と、参加したきっかけを語る参加者の姿から、本園での語り合いが広まっているのではないかという実感もあった。

また、オープンカンファレンスの前日に「明日行ってもいいですか」という連絡をもらうことがあった。また、当日に「急ですが都合がついたので来ました」という参加者もいた。これは、オープンカンファレンスが誰もが気軽に参加できる場になってきている証ではないかと捉えている。カンファレンスの情報が共有できるようなツールを検討したり、気軽に来られるような園の体制を整えたりすることで、さらに継続的で持続可能な「つながり」をつくっていくことになるのではないかと考える。また、カンファレンスに来た参加者と気軽につながり続けられるような工夫がないか、さらに探っていきたい。

本園の職員が、自分がした援助は本当によかったのかという悩みをオープンカンファレンスで語ると、他園の職員がそれに対して意味付けや助言を行う場面も少なくなかった。これにより、自信をもって明日の保育に臨むことができたのではないかと実感した。そして、自分のしてきた保育を、子どものストーリーとして紡ぎ、実感を伴う言葉として語ることは、ハブのような役割を担う園にとって、大切なことではないかと捉えた。

③　お出かけカンファレンス

Ⅰ　お出かけカンファレンスの検討プロセス

１年次に実施した「公開カンファレンス」の感想の記述の中に、「次はうちの園の子どもたちを見に来てもらいたい」「カンファレンスに参加したいけど、なかなか園を空けられない」という要望や意見が多かった。そこで、本園の職員が他園に出向くことで、さらに多くの先生方と語り合うことができ、「つながり」が広がり、深まるのではないかと考えた。本園職員を気軽に呼んでカンファレンスをしてほしいという願いを込めて、他園に出向いて行うカンファレンスを「お出かけカ

ンファレンス」と呼ぶことにし、新たな取り組みとして実施することとした。

また、お出かけ先の園の保育や、その背景にある文化を少しでも理解したいという思いがあった。そのため、お出かけカンファレンスの当日は、午前中に保育を参観し、午後のカンファレンスの時に、午前中の保育や、そこで捉えた幼児の姿を話題の一つにしていくような形式を基本とし、日程調整や準備を行っていくこととした。

Ⅱ　お出かけカンファレンスの実際

「お出かけカンファレンス」の実際は、（表２）の通りである。また、お出かけカンファレンスは、（図６）のチラシを活用し、実施を市内外の園に知らせた。お出かけカンファレンスの申し込みがあった際には、お出かけ先の園にどのような願いがあり申し込みをしたのか、そのきっかけを聞くようにしてきた。その願いに合わせて、本園の保育実践を紹介する、カンファレンスの話題を設定するなど、カンファレンスの進め方を考えてきた。午前中に捉えた保育の様子を、撮影した写真を使って、カンファレンスの際に簡単なプレゼンテーションとして示し、お出かけ先の園の保育のよさや魅力について共有してきた。

（図７）リモートで行った
お出かけカンファレンス

また、お出かけ先が遠方の場合は、お出かけ先の園に行く職員と、本園に残ってリモート参加する職員とで分かれ、職員全員でカンファレンスに参加できるようにした（図７）。

（表２）お出かけカンファレンスの実際

実施日 参加人数	他園からの願いや依頼　／　本園が取り組んだこと／ カンファレンスの様子　／　その後の感想
5 月 29 日 本園６名 Ｇ園７名	〈他園からの願いや依頼〉 附属幼稚園のような保育の振り返りがしたい。 〈願いを受けて、本園が取り組んだこと〉 午前中、本園職員１名が保育の参観に出向き、参観した際の子どもの姿を写真で撮影した。その写真をもとに、子どもの姿や育ち、保育者の援助についての気付きをプレゼンテーション資料にまとめた。 〈カンファレンスの様子〉 本園職員が作成したプレゼンテーション資料を使いながら、カンファレンス参加者全体に共有した。それを皮切りに、Ｇ園の職員がその日の保育の様子や普段の保育での悩みや迷いについて一人ずつ語った。 ・環境構成をどうしていくかについて ・気になる子どもをどう支えていくかについて ・５月の初旬に送付した交流だよりについて 〈その後の感想〉 Ｇ園の４歳クラス担任は、「交流だよりを読んでから、幼児の発見や感動を共有していくことが楽しくなった」と語った。また、Ｇ園５歳クラス担任からは、６月のオープンカンファレンスに参加したときに次のような感想をいただいた。「お出かけカンファレンスの時に話題になった『遊びをくらし全体で捉えていく』という言葉が印象に残っている。遊びで盛り上がったものにかかわる絵本を読み聞かせたり、帰りに話題にしたりしたら、遊びがさらに盛り上がりました。」
6 月 26 日 本園８名 ※対面２名	〈他園からの願いや依頼〉 園の立ち上げに際して、子ども主体の保育について学びたい。附属幼稚園での遊びの様子を紹介してほしい。

オンライン 6名 H園10名	〈願いを受けて、本園が取り組んだこと〉 午前中、本園職員１名が保育の参観に出向き、参観した際の子どもの姿を写真で撮影した。その写真をもとに、子どもの姿や育ち、保育者の援助についての気付きを語れるように準備した。また、事前に本園の遊びの様子が分かるような写真を各クラスごとに準備し、遊びのエピソードを紹介できるようにした。後日、「交流だより」を作成し、H園に送付した。 〈カンファレンスの様子〉 本園での遊びの様子を各クラス担任が紹介した後、その日のH園の保育を参観した職員が、参観での気付きを写真を見ながら話をした。カンファレンスでは、日頃の先生方の悩みや迷いが語られ、それについて話し合った。 ・遊びの中で子どもの姿を見守るべきか、声をかけるべきか迷う場面がよくある。そのバランスについて。 ・製作活動の際、できない幼児への言葉かけや援助について ・水に濡れて、ペンが使えなくなる経験を今後にどうつなげていくかについて ・子ども主体と考えたときに、どんなところに気をつけて言葉をかけていくかについて 〈その後の感想〉 職員の子どもの見方が変わってきた。保育所保育指針を開いて、保育について考える職員が増えてきた。
7月17日 本園３名 Ｉ園４名	〈他園からの願いや依頼〉 保育の評価のしかたを学びたい。子ども主体の保育を一緒に考えてほしい。 〈願いを受けて、本園が取り組んだこと〉 本園職員３名が保育の参観に出向き、参観した際の子どもの姿を写真で撮影した。その写真をもとに、子どもの姿や育ち、保育者の援助についての気付きをその場でパワーポイント資料にまとめた。 〈カンファレンスの様子〉 本園職員が参観での気付きをプレゼンテーション資料を使いながら、語った。その後、Ｉ園の先生方から日頃悩んでいることや、困っていることなどが語られ、それについて話し合った。 ・担任と補助の先生との連携について ・一人で対応することが難しい場合について ・異年齢保育をする上での悩みについて ・年長児への憧れにどうもっていくかについて 〈その後の感想〉 Ｉ園からは、「それぞれの先生方の思いを聞く機会になってよかった。今日の話をきっかけに、園としての体制を見直していきたい」と感想をいただいた。また、その後も８月のカンファレンスにＩ園職員が３名参加してくださったり、２回目のお出かけカンファレンスの申し込みをいただいたり、継続的な交流が続いている。
8月1日 本園５名 Ｊ園10名	〈他園からの願いや依頼〉 園での遊びの環境を問い直したい。 〈願いを受けて、本園が取り組んだこと〉 本園職員５名が保育の参観に出向き、参観した際の子どもの姿を写真で撮影した。その写真をもとに、子どもの姿や育ち、保育者の援助についての気付きをプレゼンテーション資料にまとめた。

	〈カンファレンスの様子〉 その日の保育について、本園職員３名がそれぞれ参観での気付きをパワーポイント資料をもとに語った。その後、Ｊ園の先生方がその日の保育や普段考えていることについて一人ずつ話をした。 ・やっぱり「遊びが大事」ということに気付いた ・幼児のやりたい思いがちがっているとき、どのように援助していけばよいのか ・安全面が優先されすぎて、そのことばかりに目が向いてしまう ・生活が中心になっていることに気付いた ・「年長だから…」という思いが強く、子どもの声を聞いていなかったのかなと考えた 〈その後の感想〉 お出かけカンファレンス後、次のような内容のメールをいただいた。「この日のカンファレンスで、みんなで同じ方向を向けた気がする。みんなで保育を話し合うことも初めてで、語り合う中で、他の先生の悩みを聞いたり、課題が見えたりしたのもこのカンファレンスのおかげ。自分の保育に自信がもてずにいたが、この日のカンファレンスで肯定されたことで安心した職員がいた。子どもの遊びの捉え方、附属の職員の思いを聞くことができて、勉強になった。上越市全園がお出かけカンファレンスするべきです！」
8 月 2 日 本園５名 Ｂ園 13 名	〈他園からの願いや依頼〉 普段なかなか研修に行けない職員の学びの機会をつくりたい。 〈願いを受けて、本園が取り組んだこと〉 本園職員５名が保育の参観に出向き、参観した際の子どもの姿を写真で撮影した。その写真をもとに、子どもの姿や育ち、保育者の援助についての気付きをプレゼンテーション資料にまとめた。 〈カンファレンスの様子〉 その日の保育について、参観した本園職員５名が参観での気付きをプレゼンテーション資料をもとに語った。その後、２つのグループに分かれてカンファレンスを行った。 ・幼児が自分の思いを表現するためにどのように援助していくのがよいのかについて ・職員の連携について ・子どもと同じ目線で楽しむことを大事にしていることについて 〈その後の感想〉 お出かけカンファレンス後、次のような内容のメールをいただいた。「数時間の参観だったが、自分の園の遊びの一コマを見ることで『こんなことあるな』と共有できた。声を出し、はつらつと研修できた。『プール遊び』の中でもいろいろな気付きがあり、それを伝えてくれたのはとても勉強になった。研修の後、『楽しかった』『モチベーションが上がった』等、１時間ちょっとのカンファレンスとは思えないほど、職員の気持ちが揺り動かされた内容だった。」

Ⅲ　お出かけカンファレンスによる「つながり」が子どもを支えた事例

お出かけ先の幼児の姿を読み取り、それを基にして語り合うことが、本園の保育の捉え直しだけでなく、お出かけ先の園の保育の捉え直しにまでつなげることができれば、お出かけカンファレンスを実施する意味や価値をより感じられるのではないかと考えた。お出かけ先の園と本園の両方の園の保育の捉え直しにつながった事例を以下に示す。

【３歳クラスの事例】
お出かけカンファレンスでＨ園を参観した際、４歳クラスのＤ児はビニールテープでカップをくっつけたいという思いをもっていた。Ｄ児は、「これで、くっつけたいんだよ。先生、やって」と参観者である本園３歳クラス担任に頼みに来た。「私はどうやったらいいか、分からないんだ」と伝え、しばらくやりとりをしていると、Ｄ児の目の前で他の幼児がビニールテープを自分で切って使い始めた。そして、ビニールテープを使い終わると、それをテーブルに置いた。本園３歳クラス担任は、ビニールテープの先が芯から離れている状態でテーブルに置かれていることに気付き、Ｄ児に伝わるように、「あっ」と言ってそのビニールテープを指さした。Ｄ児はそれに気付き、そのビニールテープを手に取ると、うれしそうに自分でハサミを持ってきて、ビニールテープを切って、貼り付けた。次に、もう１枚貼り付けようとしたとき、テープの先が芯にぴったりと張り付いていた。しかし、Ｄ児は、自分でテープをじっくり見て、手で触り、テープの先を探しているようだった。ついさっきまで「先生、やって」と言っていたＤ児だったが、自分で切った経験が自信になったのか、今度は自分でテープの先を探し、自分で切って、貼り付けていた。その時のＤ児は「できた！」ととてもうれしそうだった。 このＤ児の姿を午後のカンファレンスでＨ園の先生方や本園職員と共有した。その中で、やはり「子どもは自分で育つ力をもつ存在」であり、その力を信じることが大切だということが話題になった。このような自分でがんばる姿は、Ｈ園の先生方の日々の積み重ねがあったからだと感じ、これまで保育者が、幼児の実態に合わせて見守りながら、「少しがんばれば自分の力でできる」という経験を積み重ねてきたからではないかと捉えた。 このお出かけカンファレンスでは、幼児が「自分でがんばる姿」を見ることができた。その姿は、「少しがんばったら自分でできた」という経験の積み重ねによるものだと捉えた本園３歳クラス担任は、自分も保育の中でそんな瞬間を見逃さないようにしていこうと気持ちを新たにした。そんなある日、３歳クラスのＥ児が「捕まえたバッタを紙コップに入れたい」という思いをもち、紙コップに入れた場面があった。バッタを紙コップに入れるが、バッタが跳ねて紙コップから飛び出していく。それを見ていたＦ児は「ふたをすればいいんだよ」と提案する。Ｆ児はさらに「テープがあれば、ふたができるよ」と言った。これまで３歳クラスでは、遊びの時間に紙コップやセロハンテープを提供したことはなかったが、この経験が「自分でがんばる姿」につながるのではないかと考え、提供することにした。二人は、これまであまりセロハンテープを使った経験がなかったためか、なかなかうまくいかない。３歳クラス担任はそれを見て、手を貸したくなりながらも、「自分でがんばる姿」を大切にしたいと考え、「すごいね。もうすこしだね」などとそのがんばりを称賛する声かけを続けた。すると、「こうしたらいいんじゃない？」などと自分たちでかかわりながら、ふたをつくる姿につながった。長い時間、黙々とつくり続けた二人は、「やった！できた！」とうれしそうに紙コップを見せてくれた。その日、Ｆ児は遊びの時間中、ずっとその紙コップを持ちながら遊んでいた。そして、帰りには迎えに来た母親にその紙コップを自慢げに見せ、「これ、自分でつくったんだよ」と伝えた。３歳クラスでは、例年虫かごを用意していない。今回のように、「自分で捕まえた大切な虫を逃げないように入れ物に入れたい」という思いから、工夫する姿につなげたいという意図があったのだと、この出来事から改めて感じた。そして教師がその瞬間を見逃さず、少しのきっかけをつくることで、「自分でがんばる姿」につながるのだと改めて実感することができた。

Ⅳ　お出かけカンファレンスの継続的な実践と検討を行った、本園職員の実感

今年度、本園での勤務１年目の４歳クラス担任は、お出かけカンファレンスの後、「自身の子どもたちの見方や捉え方はよいのか」と迷いを語った。これは、３歳クラス担任、５歳クラス担任も同じであった。違う文化をもつ他園の保育をどう見て、どう語るのか、迷いの中で取り組んできたことを振り返った。しかしながら、繰り返し「お出かけ」をしていく中で、３歳クラス担任は、「まだまだではあるが…子どものみる目、保育をみる目が耕されてきた感じがする」と、自身の変

容を自覚した。これは４・５歳クラス担任も同様である。お出かけカンファレンスを振り返ると、迷いながらも、多様な園の幼児を捉えてきたことによって、幼児を読み取る目が耕されているのではないかという実感があった。お出かけ先の園とは、交流が続いている。そのため、お出かけ先で捉えた子どもの、その後の育ちを聞くことも、本園職員の楽しみの一つになっていることを実感している。

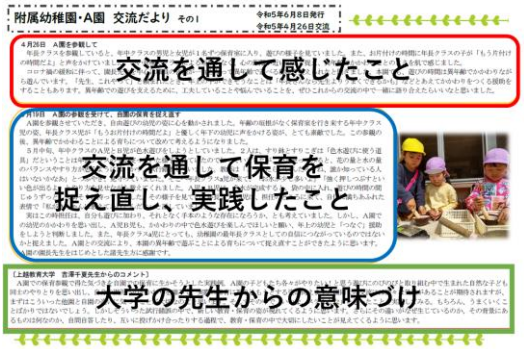
また、３歳クラス担任は、「カンファレンスの後半、他園の先生が『明日からまたがんばろう』と保育に前向きになる様子が見られてうれしかった」と振り返った。お出かけ先の先生方の前向きさにもつながっていることから、「つながり」の広がりや深まりを実感した。

今後、お出かけカンファレンスを行うことが、本園の保育の捉え直しにどのようにつながったのかについて、さらに検討していく必要性を感じている。また、お出かけカンファレンスを持続可能なものにしていくために、主に夏季休業日に設定するなど、本園の保育時間になるべく重ならないような時期を検討していきたいと考える。

④交流だより

Ⅰ　交流だよりの検討プロセス

交流だよりは、（図８）のように「交流を通して感じたこと」「交流を通して保育を捉え直し、本園で実践したこと」「大学の先生からの意味付け」を書いて、交流した園とやり取りをするツールとして活用してきた。また、交流だよりを送付した園には、コメントや感想を依頼し、次の交流につなげてきた。１年次には、14枚の交流だよりを書き、蓄積してきた。２年次では、園内外の誰もがすぐに手に取れる環境を整えるなど、交流の情報を共有、発信していくツールとしても活用していけるようにしようと検討した。



（図８）交流だより

Ⅱ　交流だよりの実際

オープンカンファレンスを行う会場に、交流だよりを並べておき、休憩時間や移動時間に誰もが手に取って見られるように環境を構成した。会場では多くの参加者が手に取り、閲覧している様子が見られた。２年次は、４月から９月までに計６枚の交流だよりを書き、やりとりを行った。また、本園職員も、交流だよりを閲覧可能なかたちに整えていく過程で、全ての交流だよりの読み直しを行い、どのように保育を捉え直してきたのか、大学の先生がどのように本園の保育を意味付けてきたのかを振り返った。

Ⅲ　交流だよりによる「つながり」が子どもを支えた事例

交流だよりを他園とやり取りするツール、情報を共有するツールとして活用してきたことが、本園の保育にどうつながっているのかを、幼児の姿とそれを支える教師の姿から、エピソード事例として紡いでいくことで捉えていきたいと考えた。以下にそのエピソード事例を示す。

【３歳クラスの事例】
６月のある日、３歳クラスＧ児は、遊びの時にかぶっていた自分の帽子を水の入ったバケツの中に入れていた。そして、その帽子をうれしそうに手に取り、アスファルトの地面にたたきつけるように投げた。Ｇ児は笑いながら、投げて拾うことを繰り返していた。 この姿を見た３歳クラスの担任は、昨年度Ｂ園と合同研修をした職員が、その時の気付きを書いた「交流だより」が頭に浮んだ。これまで遊びと捉えていなかった洗濯を遊びと捉えるように

なったこと、大人が止めたくなるようなことでもその子が本当にしたいことは何なのかを読み取ることの大切さが書かれていたことを思い出したのである。３歳クラス担任は、G児が帽子を投げているとき、一瞬止めようかということも頭をよぎった。しかし、水を含んだ帽子の重さやそれを投げた時のバシャっという音、そして、その感触が今のG児の楽しみなのではないかと読み取り、「おもしろいことやってるねー」と言いながら、一緒にその様子を楽しむことにした。

しばらく繰り返すうちに、帽子は土の上に落ち、たくさんの砂が付いた。G児は、その帽子をバケツの中に入れた。G児はすぐにバケツから帽子を持ち上げると、「きれいになった！」と嬉しそうに３歳クラス担任に伝えた。その後も、G児は、帽子に砂をつけてはバケツできれいにし、また土の上に投げて、繰り返し楽しんでいた。３歳クラス担任は、もし、G児が明日もこの遊びを続けたとき、さらに夢中になれるように、環境構成として汚れの分かりやすい白い布巾を水盤の近くに置いておくこと、必要に応じて物干しを出せるようにしておくことにした。翌日からG児は、洗濯物を物干しに干したり、自分の服を洗濯したりして遊びを存分に楽しんでいた。G児の洗濯遊びは２週間にわたって続いた。G児を見守り、支えてきた３歳クラス担任は、「何におもしろさを見出しているのかを読み取り続け、環境構成をし続けていくことの大切さ」「子どもと一緒に心を動かし、遊びを楽しむ存在であることの大切さ」を改めて実感した。

３歳クラス担任は、交流だよりによって、交流での気付きを園内でも共有できたからこそ、G児のことを肯定的に読み取れたのではないかと考えた。１年次からの継続した「つながり」の中で、自身の保育を捉え直していることを自覚した。

【５歳クラスの事例】

４月、５歳クラス担任は、片付けの時間の最後の見回り「うみ組パトロール」を通して、５歳クラス児が幼稚園のリーダーのようになってほしいと願っていた。しかし、どうしたらリーダーとしての自覚につながるのか、試行錯誤していた。

同じタイミングで、５歳クラス担任は、５月末にお出かけカンファレンスに行く予定のG園の参観に行った。G園の５歳クラス児は、友達と会話をしながら夢中になって料理づくりをしていた。G園の５歳クラス担当の職員は、料理を食べるお客になり、幼児の感動を共有していた。片付けの時間になると、料理づくりをしていた幼児は、料理が入ったボウルを４人で持ち、「わっしょいわっしょい」と言いながら、まるでおみこしを運ぶかのように、生き生きと片付けをしていた。その姿は、幼稚園のリーダーとしての自覚が芽生えている姿なのではないかと読み取った。

本園に戻った５歳クラス担任は、交流だよりを書きながら、幼稚園のリーダーのようになってほしいという思いが先行し過ぎて、焦っている自分の姿を自覚した。G園の５歳クラス児のように、遊びが充実することが、幼稚園のリーダーとしての頑張りにつながるのではないかと考え、その方向性を副担任と確認した。

５歳クラスH児は、片付けの時間になっても「うみ組パトロール」には目が向かない日が続いていた。５歳クラス担任は、G園での気付きを思い出し、H児の遊びは本当に充実しているのかを、まず読み取っていくことにした。ある日、H児は、テラスで料理づくりをしていた。H児は、肉に見立てた赤土をちょうどよい固さになるまで、何度も練り直し、肉ができると、今度は、バーベキューの網の上に油に見立てたボトルの水をかけた。肉を網の上に置き、しゃもじで優しく裏返し、水のボトルを「たれ」に見立て、肉にかけていた。その後、肉を葉っぱにくるみ、「ハンバーガー」を完成させた。５歳クラス担任は、H児が料理の工程にこれほどまでにこだわって料理をしていたことを初めて知り、心が動いた。H児は５歳クラス担任に輝くような表情で、このハンバーガーをくれた。５歳クラス担任は、H児に感動を伝えた後、H児の遊びの充実を願って、もらった「ハンバーガー」を手に持ちながら園庭を歩くことにした。

すると、４歳クラス副担任が、この「ハンバーガー」を見て同じように心を動かし、H児のところへ行った。そこには、他の幼児もたくさん集まってきた。このときのH児の表情は、自信に満ち溢れていた。５歳クラス副担任も同じように心を動かし、H児との会話の中でお店屋さんにしたいという思いを読み取り、お店の看板づくりを支えた。この時もやはり、H児は自信に満ちた表情だった。

H児の土を使った料理づくりは１週間続いた。５月、ある日の片付けの時間、H児は「Ｉちゃん、もう片付けてパトロール行こう。だって、うちら、うみ組なんだから」とH児に話していた。この言葉を聞

いたとき、５歳クラス担任は、H児の遊びが充実し、多くの先生や友達に認めてもらったことが、もしかしたら幼稚園のリーダーとして頑張りたいという思いを高めたのではないかと捉えました。その後、H児はつくった料理をふるまうレストランを開いた。年下の幼児がお客さんとして来たときにも、優しく接する姿からも、自信を高めている様子がうかがえた。G 園との交流だよりのやりとりを通して、多様な見方や考え方に出会い、保育を捉え直していくことにつながった。

Ⅳ　交流だよりの継続的な実践と検討を行った、本園職員の実感

３歳クラス担任は、エピソード事例から、「保育中に他園を参観した時のことや交流だよりの内容を思い出すことがある。その瞬間に、他園ではこんなふうに援助していたなと援助のレパートリーが増えたように感じる」と振り返った。事例のように、昨年度の交流だよりに書かれた学びが、今年度の保育に生きる場面があった。交流での学びを言語化し、蓄積していくことの大切さを実感した。５歳クラス担任も、３歳クラス担任と同様に、交流だよりを書きながら、保育において大切なことが自覚されていくような感覚があり、援助のレパートリーを増やしているように実感した。また、４歳クラス担任は、「大学の先生からのコメントは楽しみだった」と振り返った。「大学の先生からの意味付け」を読むことで、保育を捉える視点の広がりを感じている。

情報を共有するツールとして活用するため、２年分の交流だよりを整理した。その過程で、職員で交流だよりの読み直しを行うと、交流だよりの記述内容に変容があることに気付いた。１年次は、絵カードや幼児の作品の掲示の仕方など、目に見えやすい取組について記述されたものが多かったが、２年次は、幼児の今の楽しみを読み取り、意味付けるような記述が多くなっていた。ここから、子どもの姿から、遊びや学びのストーリーを紡いでいくことの大切さを実感した。

交流だよりを交流した園に届けるまでには、学んだことから自分の実践を行い、大学教員にコメントを依頼するといった手続きがあり、やや時間がかかってしまうところが、課題だと感じている。交流だよりの形式を工夫することで、可能な限り早めに交流した園に届くようにするとともに、持続可能なかたちにしていきたいと考える。また、交流だよりを交流した園以外の園の職員にどう読んでもらうか、その情報発信の仕方について、さらに検討の余地がある。HP や SNS 等を活用した発信も視野に入れていきたいと思っている。

⑤合同保育

Ⅰ　合同保育の検討プロセス

１年次は、「同じ幼児の姿を捉えることで保育について考えたい」という願いのもと、一緒に保育をする交流が生まれた。１年次、C 園とは、C 園の５歳クラス児が本園に遊びに来て、本園の園庭で一緒に遊ぶという環境の中で、合同保育を行った。２年次、C 園の職員と話し合う中で、C 園の５歳クラスの幼児の楽しみにつながっていたということを聞き、２年次も継続して合同保育を行うことにした。互いの園の実態に合わせて、可能な時期を選んで合同保育を行おうと共有し、打ち合わせを進めていくことにした。

Ⅱ　合同保育の実際

7 月 11 日、C 園の５歳クラス児 23 名と、職員４名が本園に来園した。本園の５歳クラスの保育室で、遊ぶ時の注意事項などを共有した後、１時間30分程度の遊びの時間を設定し、合同で保育を行った。１年次も同様の合同保育を行っていたため、職員の配置決めや打ち合わせなどは特に行わず、個々の職員が周りの状況を見ながら、遊びの援助を行った（図９）。保育の途中で、迷いが生じたときには、すぐに職員同士で話し合い、情報共有を行っ

（図９）合同保育の様子

た。合同保育を終えた後には、本園職員２名と C 園の職員１名で合同保育の振り返りを行った（表３）。

（表３）C 園職員との合同保育の振り返り

【本園の職員の語り】 ・初めて本園の園庭で遊ぶ C 園の幼児の様子を見ていたら、本園の幼児が掘ったことがないところに穴を掘るなど、本園の幼児が思いつかなかったような遊び方をしていた。本園の幼児の園庭への見方が広がるきっかけが生まれたように思う。 ・本園の幼児と、C 園の幼児が遊びの中で自然とかかわる姿が見られた。 ・土を使った唐揚げづくりは本園では生まれなかった発想だった。
【C 園の職員の語りから】 ・細かな説明や、打ち合わせがなくても、合同保育が実施できてよかった。 ・昨年度の５歳クラス児が経験しているので、その時の話を聞いて、今年度の５歳クラス児も行く前から楽しみにしていた。 ・昨年度、交流の中で廃材を使った遊びをしている姿を目にした。廃材での工作を保育の中に取り入れてみたら、遊びの幅が広がった。

Ⅲ　合同保育による「つながり」が子どもを支えた事例

園と園とで一緒に決めていくスタンスを大切に、合同保育を継続して行ってきたことが、本園の保育にどうつながっているのかを、幼児の姿とそれを支える教師の姿から、エピソード事例として紡いでいくことで捉えていきたいと考えた。以下にそのエピソード事例を示す。

【５歳クラスの事例】
７月の合同保育の時、C 園 J 児は粘土質の土で成形した泥団子の周りに砂をまぶしていた。その近くで、本園K児・L児が粘土質の土を使ってお皿を成形しようとしていた。C 園 J 児と本園K児とL児は言葉を交わすことはなかったが、互いの様子をじっと見ていた。 C 園の職員との振り返りでは、C 園 J 児の遊びが話題になった。５歳クラス担任は C 園の職員と語り合う中で、C 園 J 児は唐揚げをつくりたいという思いをもっていたことを初めて知った。粘土質の土の周りにつけていた砂は、唐揚げの衣であったこともC園職員から聞いた。本園の５歳クラス児は、粘土質の土で型抜き遊びをしたり、お皿をつくろうとしたりすることはあっても、唐揚げをつくるなど、料理に使うことはなかった。５歳クラス担任は、C 園 J 児の姿から、粘土質の土への新たな見方を知った。 ８月のある日、本園K児はお弁当づくりをして遊んでいた。K児は完成したお弁当を担任に見せに来た。中を見ると、粘土質の土に砂をまぶした泥団子が２つ、入っていた。「これは何？」とK児に聞くと、「これはね、唐揚げだよ」とK児が答えた。心が動いた５歳クラス担任は、「おいしそうだね。唐揚げをつくったのはKちゃんが初めてだと思うよ。すごいね」と称賛すると、K児は「いや、違うよ。私、これと同じのを前に誰かがつくっていたの見たよ」と答えた。 この時、５歳クラス担任は、合同保育の時のC園 J 児の姿が頭に浮かんだ。合同保育の時、K児はC園 J 児がしていたことを、きっとよく見ていたのではないかと捉えた。違う文化をもった子どもたち同士がかかわり合う機会があることによって、他園の幼児がしている遊びの魅力を、肌で感じ取ることにつながるのではないかと捉えた。５歳クラス担任は、子どもが直接他園の遊びのよさにふれられることに、合同保育のよさがあるのではないかと考えた。

Ⅳ　合同保育の継続的な実践と検討を行った、本園職員の実感

５歳クラス担任は、事例のように、合同保育をすることによって、本園に粘土質の土を使った新たな遊びの可能性が見えてきた。C 園にも、廃材を使った製作遊びなど、新たな遊びが生まれている。本園では、これを遊びの輸入、輸出と呼んでいる。この遊びの輸出入が子どもを介して行われることに、合同保育の意義を感じた。

また、C 園と主に連絡を取り合っていた３歳クラス担任は、「同じ園と同じ要領で繰り返してきたことで、互いに気兼ねなく合同保育をすることができた」と振り返った。C 園とは２年間合同保育

を継続して行ったことで、２年目である今年度は、細かな打ち合わせ等は一切行わなかった。園の文化は違っても、子どもが主体の保育をしたいと願う気持ちは一緒であることが共有できている証ではないかと実感している。細かな打ち合わせや手続きがなくても、一緒に保育ができることに喜びを感じた。あえて、打ち合わせや手続き等は最小限にするということに、持続可能な交流の在り方が見えてきたように思う。

⑥合同研修

Ⅰ　合同研修の検討プロセス

合同研修は、合同保育と同様に、同じ幼児の姿を捉えることで保育について考えたいという願いのもと、互いの園の実態を踏まえながら実施の方法を検討することにした。１年次に交流だよりをやりとりしていたＡ園とは、持続可能なかたちで「つながり」を深めたいという願いから、２年次には合同研修を２回実施することになった。また、１年次に合同研修を実施したＢ園とは、今年度もＢ園の園内研修に参加するというかたちで継続して合同研修を実施することになった。

Ⅱ　合同研修の実際

４歳クラス担任は、Ｂ園にて保育参観を行い、午後から研修会に参加した。研修会では指導者から、午前中の保育においての子どもの姿、主体性を育む保育のあり方、子どもの読み取りと援助、環境構成などについての指導があった。

この日、Ｂ園の５歳クラスは、生き物捕まえをするために園外へ散歩に出掛けたが、園庭での泥遊びがしたいとの思いをもっていた４名の幼児は園に残り、他クラスの先生が保育することになった。「残る子どもたちをお願いします！」「いいよ！」と互いに言い合えることは、職員がチームで動いているからこそである。この日、散歩に出掛けた５歳クラスが戻ってくると、園庭にいた職員も子どもたちも「お帰り！」「どうだった？何かいた？」と温かく迎えており、Ｂ園の先生方全員で、この園の子どもたちを保育しているように感じた。「先生たちが楽しいことは、子どもたちが楽しいことにつながる」「先生たちの仲がよいことは、子どもたちの仲がよいことにつながる」との言葉に、４歳クラス担任は「職員の方々と一緒に楽しみながら保育をしたい」と自身の保育を振り返る機会となった。

また、他の子と比べてできないところを見たり、苦手を責めたりするのではなく援助を丁寧に行うこと、子どもをまるごと受け止めることなど、保育に大切なことについての話を受け、４歳クラス担任は「これまで目先のことばかり気になってしまうことが多かったが、一人一人のことをしっかり読み取り、その子の育ちを捉えよう」と気持ちを新たにした。

Ⅲ　合同研修による「つながり」が子どもの育ちを支えた事例

「園と園とで一緒に決めていく」心構えを大切に、合同研修を継続して行ってきたことが、本園の保育にどうつながっているのかを、幼児の姿とそれを支える教師の姿から、エピソード事例として紡いでいくことで捉えていきたいと考えた。以下にそのエピソード事例を示す。

【４歳クラスの事例】
４歳クラス担任は、幼稚園での勤務は今年度が初めてである。子どもをどう支えるのがよいか、毎日のように迷い、悩みながら保育をしていた。６月、４歳クラス担任は、Ｂ園の合同研修に参加した。研修では、「全職員で一人の子どもを支える」ことの大切さが共有された。「先生たちの仲がよいことは、子どもたちの仲がよいことにつながる」という言葉に、大きく心が動き、自園の先生方と一緒にチームで保育をしたい、と思いを新たにした。 研修に参加したタイミングで、４歳クラス担任は「M児をどう支えるか」という悩みを抱えていた。遊びの後、保育室に入ることになかなか思いが向かないM児。M児の思いには寄り添いながらも、どう支えることがM児のくらしを豊かにしていくのか、毎日のように副担任と語り合っていた。４歳クラス担任は、全職員でM児のことを支えることができれば、M児の育ちにつなが

るのではないかと願い、この悩みを他クラスの職員にも話すことにした。４歳クラス担任は、職員での語り合いの中で、「M児が夢中になれる遊びが見つかることが、M児の友達とのかかわりや、自信につながるのではないか」と考えた。そして、M児が保育室に入るような環境構成や言葉がけだけではなく、遊びに夢中になる姿を思い描いて、遊びの援助にも力を注いでいこうと捉え直し、援助の方向性を全職員で共有した。

７月のある日、M児は、コンサートをするために、テラスにいすを並べ始めた。M児は、「満席になったら、コンサートを始めますよ」と話した。しかし、なかなか席が埋まらず、片付けの時間になってしまった。この後はおやつを食べたら、すぐに帰る時間であった。４歳クラスの担任は焦りを隠しながらも、M児の遊びが充実することを願い、その遊びを見守ることにした。

すると、通りがかりにその様子をみた５歳クラスの担任が、コンサートを見に来た。続いて、３歳クラスの担任・副担任と３歳クラスの子が、いすに座った。保育室にいた４歳クラスの副担任がいすに座ると、４歳クラスの子たちも、コンサートを見に来た。満員になると、コンサートが始まり、M児は大勢のお客さんが見守る中、ダンスを１曲踊り切った。４歳クラス担任の目には、M児の何にも代えがたい笑顔が焼き付いた。このとき、４歳クラス担任は、Ｂ園の研修で聞いた「全職員で一人の子どもを支える」という言葉の意味を改めて考えた。打ち合わせなどをしていなくても、全職員がM児の育ちを願い、今この瞬間こそがM児を支えるタイミングだと捉えたことを嬉しく思った。援助の方向性が揃っていることが、こんなにも子どもの育ちにつながるのかと、チームで保育をする喜びを感じ、それを交流だよりに書いてＢ園に送った。その翌日も、M児はコンサートの遊びを続けた。今度は同じクラスの幼児も仲間に入り、一緒にコンサートを楽しんでいた。

４歳クラス担任は、「全職員で一人の子を支えるって、こういうことだったんですね」と、その実感を７月のオープンカンファレンスの時に語った。Ｂ園での研修に参加し、４歳クラス担任は、新たな見方に出会い、研修で耳にした言葉が目の前の子どもの姿から実感を伴う言葉になったことを振り返った。

Ⅳ　合同研修の継続的な実践と検討を行った、本園職員の実感

Ｂ園での合同研修に参加した本園４歳クラス担任は、「Ｂ園４歳クラス担任とは、今年度同じ４歳クラスの担任として、また、互いに園での勤務１年目として、共感できることが多く、また話をしたいと感じた。これからも交流を続けるために、互いの園の様子やそれぞれの思いについて知ることは大切だと思うので、この合同研修がとてもよいきっかけになった」と振り返った。同じ年齢の幼児を担任している職員と、同じ幼児の姿を見ながら語り合うことは、貴重な機会となった。

また、合同研修において、同じ子どもの姿を見て語り合うことのよさを実感した。これまでに他園の職員と語り合うとき、「主体的」などの言葉の捉えも違うことを感じることが少なからずあった。合同研修を行うことによって、それぞれの園で使っている言葉の意味を理解し、共感することにつながったのではないかと実感した。

（２）研究協力園や大学との連携

２年次の初めの頃は、令和５年度研究協力園（３園）のほか、令和６年度研究協力園（３園）と交流をしていきたいと願っていた。しかし、６園とこのような交流をすることは、現実的に難しいのではないかと話し合った。交流するためには、普段の保育を他の職員と交代して行うことが必要だからである。また、令和５年度研究協力園とは、１年間かけてつくってきた「つながり」がある。それを大切にしたいという本園職員の強い思いもあった。２年次は、新たな研究協力園を依頼せずに交流を進めようという意見もあった。このような話合いを経て、令和５年度研究協力園との交流を継続して行っていくことを決めた。

一方で、令和６年度研究協力園とも可能な限り交流を行いたいという思いもあった。そこで、令

和６年度研究協力園には、令和５年度研究協力園との交流に一緒に参加してもらったり、交流についての助言をもらったりすることにより「つながり」をつくっていくことを決めた。２年次に、計６つの研究協力園と本園、研究協力園同士が交流することができれば、「つながり」を広げ、深めていけるのではないかと考えた。

５月、令和６年度研究協力園、大学教員と、本園で今後の交流についての語り合いを行った。「つながり」を広げ深めていく上で、担任を１週間交換留学のようなかたちで交代した交流など、本園の職員だけでは思いつかなかった方法があること、興味のある交流に参加できるような情報共有ができるとよいことなど、多様に意見が交わされた。

これらの意見を受けて、本園が交流を行う情報を、研究協力園と大学とで共有することによって、いつでも興味をもった交流に参加してもらえるようにしたいと考えた。そこで、（図10）のような一覧を作成し、大学や研究協力園にメールで送付し、交流の情報を共有した。

交流の予定

	日にち	曜日	時間	会場	備考
参観	6月11日	火曜日	9:30～11:00	C園	
オープン	6月12日	水曜日	9:00～15:00	附属幼稚園	
研修	6月25日	火曜日	10:00～14:00	B園	
お出かけ	6月26日	水曜日	9:00～15:00	H園	園の立ち上げに際し、子ども主体の保育について学びたい
参観	6月28日	金曜日	9:30～11:30	K園	
研修	7月2日	火曜日	9:15～16:00	A園	
その他	7月8日	月曜日	10:30～11:30	附属幼稚園	大学出前講座「どろだんごづくり」
オープン	7月10日	水曜日	9:00～15:00	附属幼稚園	
合同保育	7月11日（予定）	木曜日	9:50～11:00	附属幼稚園	C園年長クラス来園予定
お出かけ	7月17日	水曜日	13:00～16:30	I園	保育の評価、子ども主体の保育について一緒に考えたい
お出かけ	8月1日	木曜日	9:30～15:00	J園	
オープン	8月6日	火曜日	13:30～15:00	附属幼稚園（上越市）	

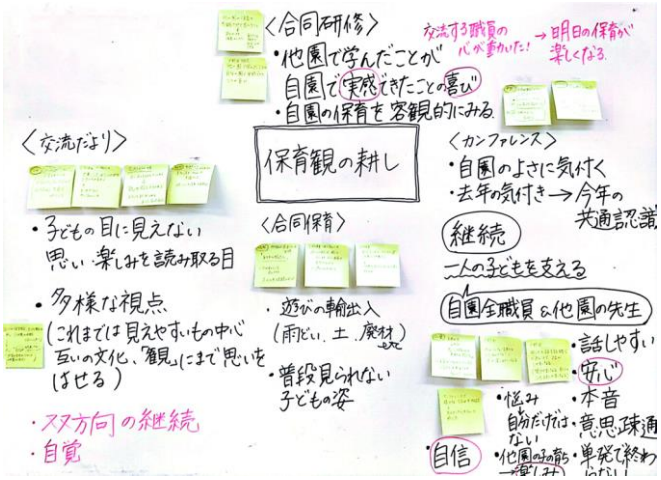
（図 10）研究協力園・大学に送付した交流の一覧

７月 11 日、Ｃ園との合同保育の際、研究協力園であるＬ園の職員と大学教員が、合同保育の様子を参観に本園に来園した。また、本園職員がＫ園と交流だよりをやりとりする際に参観に行くときには、大学教員も同行した。１年次は、本園と他園の１対１の交流が多かった。しかし、2 年次には、１つの交流の場に複数園の職員が集まるような交流が生まれてきた。情報を共有することによって、「つながり」を広げ、深めている実感があった。

６　研究の手応えと今後の展望

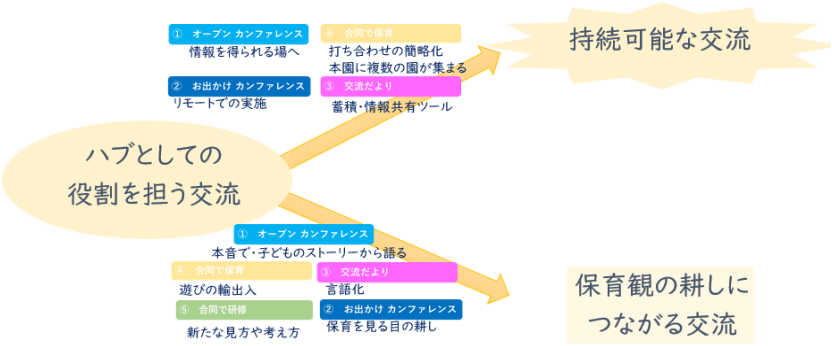
（１）　研究の手応え

「保育観の耕しにつながるような交流」、「つながるよさを実感できる交流」、「ハブのような役割を担う交流」、「持続可能な交流」の実現を思い描き、「オープンカンファレンス、お出かけカンファレンス、交流だより、合同研修、合同保育（以下、５つの交流）」を検討、実践してきた。８月までに行った交流において、本園の職員が感じた手応えを以下に示す（図 11）。



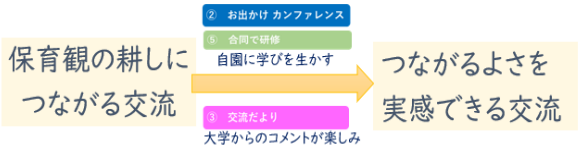
（図 11）本園職員が感じた手応え

まず、「ハブのような役割を担う交流」の実現に向けた取組では、オープンカンファレンスをより情報を得られる場に更新してきたこと、お出かけカンファレンスをリモートで実施したこと、合同保育の打ち合わせが簡略化したこと、交流だよりを情報共有ツールとして使ってきたこと、複数の園が１つの場に集まる交流が増えたことが、「持続可能な交流」につながっているのではないかということが見えてきた。また、オープンカンファレンスで子どもの学びのストーリーを語ることの大切さを自覚したこと、合同保育で遊びの輸出入をしてきたこと、交流だよりで実践を言語化してきたこと、合同研修で新たな見方や考え方に出会ったこと、お出かけカンファレンスで保育を見る目が耕されていることを自覚したことから、「ハブのような役割を担う交流」を目指すことは、「保育観の耕しにつながるような交流」を生み出していくきっかけになるのではないかと捉えた（図 12）。



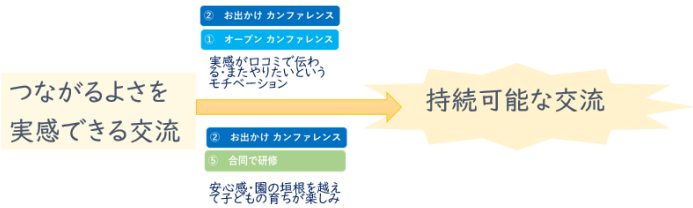
（図 12）ハブとしての役割を担う交流

次に、「保育観の耕しにつながるような交流」の実現に向けた取組では、お出かけカンファレンスや合同研修のように、他園の保育を参観した学びが自園の保育にいきていることを実感したこと、交流だよりにおいて、大学教員からの意味づけによって保育を見る目が耕されるとともに、そのコメントを読むことが楽しみになっていることを自覚したことから、保育観の耕しが、「つながるよさを実感する交流」につながっているのではないかということが見えてきた（図 13）。



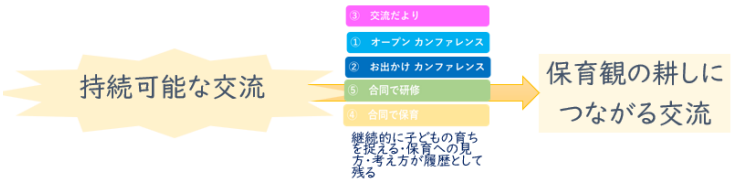
（図 13）保育観の耕しにつながる交流

「つながるよさを実感できる交流」の実現に向けた取組では、合同研修を通して実感した他園で学んだことが自園でいかせたことによる喜び、お出かけカンファレンスを通して感じた悩んでいるのは自分たちだけではないという安心感、そして、園の垣根を越えて幼児の育ちを共有し合う楽しみを、本園の職員も他園の職員も感じることができた。また、本園の交流に携わった他園の先生同士がつながっていったのではないかという実感があった。オープンカンファレンスの参加者からは「他園の先生の勧めで、オープンカンファレンスに参加しました」という声を聞くことができた。「お出かけカンファレンス」への申し込みがあった園からは、「（過去にお出かけカンファレンスを経験した園から）お出かけカンファレンスがとてもよかったと聞いて、申し込みました」といった声を聞くことができた。これらの声は、他園同士で「口コミ」のようにして、本園の情報が共有されているということではないかと捉えている。「つながるよさを実感できる交流」は、他園の先生方が参加してよかった、明日の保育が楽しみになったと実感できるような場を絶えずつくっていくことが大切である。それにより交流へのモチベーションが上がり「持続可能な交流」になっていくのではないかということが見えてきた（図 14）。



（図 14）つながるよさを実感する交流

「持続可能な交流」の実現に向けた取組では、オープンカンファレンスなど、気軽に参加できる交流が少しずつ実現している実感があった。「持続可能な交流」は、継続的に子どもの育ちを捉えてきたこと、そして、保育に対する見方や考え方を広げてきたことを学びの履歴として残していくことによって、より「保育観の耕しにつながるような交流」を実現させていくのではないかと考えた（図 15）。



（図 15）持続可能な交流

これらのことから、園と園の「つながり」を広げ、深めるためには、「継続的、双方向の交流になるように、その場をよりよくつくりかえていく」こと、「継続的に情報を共有していくこと」が大切なのではないかということが見えてきた。交流を継続していく中で、少しずつではあるが、園と園との「つながり」が広がり、深まっている実感があり、つながるしくみが整いつつあるのではないかと捉えている。

（２）今後の展望について

今後は、交流した園からの声にもっと耳を傾けていくことが大切であると考えた。そうすることが、継続的に、双方向に保育の質を高め合うような関係づくりにつながると考えるからである。また、HP・SNS の活用により、園内の共有や交流した園との共有だけにとどまらず、情報をより多くの園に届けていくことができるのではないかと考える。今後、情報の共有の仕方について検討していきたい。

「つながり」をさらに広げ、深めることができた先には、本園が幼児教育・保育のコミュニティのようになっていけるのではないかと思い描いている。継続的、双方向の交流の場をどのようにつくっていくか、交流の情報をどのように共有、発信していくかをさらに検討し、つながるしくみを確かなものにしていきたいと考える。また、園と園のつながりを広げ、深める過程において、さらに広い視野で保育の捉え直しをすることが大切であると考える。そこで、幼小接続を視野に入れた「つながり」もつくっていきたいと考えている。

【引用文献】

こども家庭庁　「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン（はじめの 100 か月の育ちビジョン）」こども家庭庁　幼児期までのこどもの育ち部会閣議決定　2023 年

文部科学省　「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」中央教育審議会初等中等教育分科会　幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会　2023 年

附属幼稚園・B園　交流だより　その4

令和6年6月24日発行
令和6年5月16日交流

5月16日　B園を参観して

B園を訪問し、園長先生から園舎を案内していただき、園庭での遊びの様子を参観させていただきました。園舎に入り、ぱっと目に入ったのは、幼児たちが制作したこいのぼりでした。大きなこいのぼりが４つ、上から吊るされていて、見た途端とても楽しい気持ちになりました。幼児たちは、その下で室内遊びをしていたのですが、登園した時からきっとわくわくした気持ちになるだろうと感じました。

また、ある保育室の前には新聞紙でつくった服がありました。ドレスでしょうか、一着ずつハンガーを使って、ラックに掛けられていました。素敵なブティックのようでした。遊びでつくったものを保育者が丁寧に扱うことによって、子どもたちも大切に扱い、「これを使いたい」という、次の遊びの意欲につながるのだと思いました。また、靴箱の近くに、ペットボトルとジップ付きの袋を組み合わせたものに紐が通してあるバッグが、きれいに並べて掛けてありました。外へ出掛ける時に持って行き、取って来たものをその中へ入れるのだそうです。一人ずつ名前が書いてあることで、バッグ自体が「自分のものである」という認識ができます。また、靴箱の近くに置いてあることで、忘れずに持って行くことができ、探検への意欲が高まります。そして、持ち帰ったものは、次の遊びに使うこともできます。年齢に応じて少しずつタイプは異なるようですが、丈夫な袋を使うことで、何度でも繰り返し使うことができるところがよいと思いました。園の中では、視覚に訴える工夫がたくさんありました。子どもたちの「やりたい」という気持ちを支える環境構成について、さらに学ばせていただきたいと感じました。

園庭における子どもたちとのやり取りから

園庭では、異年齢児が一緒に思い思いの遊びに夢中になっており、とても穏やかな雰囲気でした。A児が園庭で虫を捕まえ、バケツの中に入れて友達に見せていました。「僕が捕まえたんだ」と誇らしげで、私にもすぐに見せてくれました。B児も餌となるものを見付け、世話をしようとしていました。A児は「こういうの見付けた」と、先生に見せました。B児が触ろうとすると、それを「ひっくり返るからだめ」と言いました。その後、虫を見ながら、A児と先生とのやりとりがありました。しばらくすると、ひっくり返っていた虫がまた元に戻った様子を見て、先生は「あ、今ひっくり返ったけど戻ったよ。じゃあB児が触っても大丈夫だね」とお話されました。子どもたちの思いを汲み取り、すぐに助言をするのではなく、子どもたちが納得できるタイミングを見計らい、話をされたのだと感じました。

B児はその後、他の友達にも虫を見せに行きました。年下の園児が虫を怖がる様子を見せると、棒に虫を乗せて「ほら、これなら大丈夫？」と聞きました。異年齢で同じ空間で遊び、年下の子を思いやる様子が微笑ましかったです。

6月5日　B園の参観を受けて、自園の保育を捉え直す

今回の訪問では、タイミングのよい援助の方法について、捉え直すことができました。自演では、園庭から掘り起こした粘土に水を加えて捏ねて、好きな形をつくって遊ぶ「粘土遊び」がブームとなっています。朝一番に園庭へ向かって土を掘り、どうすればちょうどよい硬さの粘土ができるかを試行錯誤しています。年長児から、水の量を教えてもらっている姿もあります。つい「こうした方がよいのでは？」と口出ししたくなってしまいますが、子どもたちの様子を見守ることを第一にしようと思いました。次第に型抜きをしたり、草花で飾りつけをしてお菓子に見立てたりするようになりました。

そんな時、年少クラスE児が興味をもって寄ってきました。触ろうとするとO児は壊されると思ったのか「だめ」と拒否していました。しかし、E児はどうしても触ってみたいようで「これ、なに？」と何度も尋ねたのですが、O児の対応は変わりませんでした。私はE児に「どうしたの？」と尋ねました。するとE児は「これ何かなあと思ったの。こうやってやりたいの」と話しました。E児の興味や思いが高まっていると捉え、O児に対して「O君の粘土、とっても楽しそうだから触りたいみたい」と話しました。すると「ふうん、じゃあいいよ。これもいいよ」と、粘土を渡していました。いつ、どのタイミングで声をかけるか、常に迷うことですが、B園の先生方のように、子どもたちの様子をよく見て、タイミングよく援助をしていくことを心がけたいと思いました。

〔上越教育大学　山口美和先生のコメント〕

B園の環境構成や、保育者と子どもとのやり取りの中に、教育的意図に基づいた保育者のさりげない配慮や援助があることを感じ取られた様子が伝わってくるレポートです。自分の力で捕まえた虫や、頑張って作り上げた作品などは、子どもが心から大切に思う「宝物」です。だからこそ、他の子どもたちは羨望のまなざしでそれを見つめ、「触れてみたい」「自分でも作ってみたい」という思いを持って、その子の周りに集まってきます。保育者は、大切な「宝物」を壊されたくない子どもの気持ちと、「宝物」への憧れを持つ子どもの気持ちの双方を受け止め、子どもたちの橋渡しをしたいものです。粘土あそびで水をどれくらい加えればちょうどよい硬さになるかを考えながら遊ぶことは、「量」という数学的な知識につながる活動でもありますので、子どもの試行錯誤を通した学びを見守る先生の姿に共感しました。

附属幼稚園・B園　交流だより　その5

令和6年7月31日発行
令和6年6月25日交流

6月25日　B園を参観して　～虫探し～

参観に伺った10時頃は、ちょうど園児たちが外へ出かける時間帯で、お散歩へ出かける幼児、園庭で遊ぶ幼児、それぞれが準備を始めていました。４歳児は、どろんこ遊びの服装になって玄関から出てくるところでした。玄関前には、コンテナに入ったスコップやバケツなどが、みんなが選ぶだけに十分な数が用意されて種類別に置かれており、幼児はその中から自分が必要な物を選んでいました。コンテナの中に入っている物を見比べて「やっぱりこれかな」と、持ち替えている子もいました。きっとこれまでの遊びの経験から、自分がしたいことに合わせて選んでいるのだと思いました。

その中で、A児はコンテナを何度も見ながら、何かを探しているようでした。最終的に、片手に大きなしゃもじ、反対の手にはブルーのスコップを持っていました。何をするのかと思って追ってみると、バケツを持ったB児と一緒に砂場へ向かいました。「これでハサミムシを捕まえるんだ」と、A児とB児のしたい遊びは決まっていたようで、砂場に着くと、覆っていたシートを、しゃもじとスコップを使ってめくり始めました。シートは重さがあり、幼児が簡単に動かせるものではなかったのですが、A児は「この奥にいそう」と、シートの下にしゃもじを入れて持ち上げ、シートの下を探していました。B児も同じように、一緒になってスコップをシートの下に入れ、ぐっと持ち上げてシートの下を探しました。なるほど、このためにしゃもじとスコップを選んで持って行ったのかと感心しました。前日、シートの下にたくさんのハサミムシがいたことを担任の先生からお聞きしました。A児とB児は、今日もハサミムシを捕まえたいという思いがあり、長い棒があればシートの下を探すことができるという経験があったからこそコンテナの中からしゃもじとスコップを選んだのでしょう。たくさんある用具の中から「これならできるだろう」「これなら捕れるだろう」という自分なりの感覚でこの２つを選んでおり、まさに主体的な姿なのではないかと感じました。

「ハサミムシ出てこーい」「いそうだけど、いないんだよね」「いるかな？いる？」と、A児のハサミムシに対する思いは強く、シートの奥の方まで探していました。この日は、たらいの近くで色水遊びを楽しんでいた子が多かったのですが、A児は、B児とずっと一緒にハサミムシを探していました。しばらくすると、担任の先生が砂場へ来てA児に「ハサミムシいた？」と声をかけて、シートの下を見ました。見つからないことをA児が伝えると、「あんなにいっぱいいたのに、どこにいったんだろうね」と、A児に寄り添う声かけをされました。周りの子にも「どこにいったんだろうね」と声をかけると、近くで色水遊びをしていたC児が「ここにいるんじゃない？」とブロックを指しました。これまで、シートの下を一生懸命探していたA児とB児が、初めてブロックに着目しました。先生がブロックを持ち上げると、小さなハサミムシが一匹出てきて、見事に捕まえることができました。ずっとハサミムシを探しているA児の気持ちに共感し、周りの子にもさりげなく声をかける先生の姿がとても素敵だと感じました。C児の意見がなければ、きっとこのハサミムシを見つけることはできなかったと思います。A児がハサミムシを捕まえることができ、C児もうれしかったに違いありません。最後、A児は捕まえたハサミムシを逃がしてしまいます。先生から捕まえたハサミムシの数を尋ねられて「ゼロ」と答え、続けて「さっきのは、赤ちゃんだったから、数に入れないよ」と話していました。きっと、もっと大きなハサミムシをねらい、次の日もしゃもじとスコップを持って、ハサミムシ探しが続くのだろうなと思いました。

前日、たくさんのハサミムシを見つけたから、また今日も同じように見つけられるとは限りません。それでも根気よく探し続けるA児の姿がありました。子どもたちの様子をしっかり捉えてその思いに共感し、時には周りの幼児にも問いかけるなどして、援助していくことが大切だと感じました。

6月25日　B園を参観して　～色水遊び～

園庭では、たくさんの幼児が色水遊びに夢中になっていました。先生が蓋の裏に絵の具を付けて、幼児がそのペットボトルを振ると、透明の水に色が付き、幼児はその様子を楽しんでいました。

その中で、D児が「やったあ！やったあ！」と大きな声を上げました。何事かと思っていると、D児は私の所へ来て「見て！紫になったよ！赤に青を入れると、紫になるんだよ！」と興奮した様子で話してくれました。その後、園庭にいる全ての先生方にペットボトルを見せながら回っていました。後ほど担任の先生にお聞きしたことによると、前日までは一色だった絵の具を、この日は二色にしたのだそうです。紫をつくろうと思って色を混ぜたわけではなく、D児の中では偶然できたものだったのです。ある先生が「それ、どうやってつくったの？」と尋ねるとD児は「赤を力いっぱい入れると、紫になるんだよ」と答えました。先生はそれに対して「そうか、じゃあ私も力いっぱい入れるね！」と声をかけました。D児はこの日の外遊びの時間、自分がつくった紫色の色水が入ったペットボトルをずっと持ち歩いていました。途中で他の遊びをすることもありましたが、自分の横に置いてとても気に入っているようでした。大人にとって当たり前だと思うことでも、子どもたちにとって新たな発見であることがたくさんあります。今回のD児の興奮ぶりは、こちらも驚くほどでした。子どもたちの目線に立って物事を見ることを忘れず、一人一人の喜びや驚きに共感できる保育をしたいと思いました。

6月25日　B園での研修に参加して　～協議会～

当日の保育の様子とともに、主体性を育む保育のあり方、子どもの見取りと援助、環境構成などについてご指導いただきました。この日、５歳児クラスは、生き物捕まえをするために園外へ散歩に出掛けました。しかし、園庭での泥遊びがしたいとの思いをもっていたそのうち４名の幼児は園に残り、その子たちは他の先生に見てもらうことになりました。このように「残る子どもたちをお願いします！」「いいよ！」と互いに言い合えることは、職員がチームで動いているからこそだとお話されました。この日、散歩に出掛けた５歳児クラスが戻ってくると、園庭にいた職員も子どもたちが「お帰り！」「どうだった？何かいた？」と温かく迎えており、B園の先生方全員で、この園の子どもたちを保育しているのだと感じました。「先生たちが楽しいことは、子どもたちが楽しいことにつながる」「先生たちの仲がよいことは、子どもたちの仲がよいことにつながる」との言葉に、思わず納得しました。私も、職員の方々と一緒に楽しみながら保育をしたい、と自分を振り返るよい機会になりました。

また、他の子と比べてできない所を見たり、苦手を責めたりするのではなく援助を丁寧に行うこと、子どもをまるごと受け止めることなど、保育に大切なことを教えていただきました。つい、目先のことばかり気になってしまうのですが、一人一人のことをしっかり見取り、その子の育ちを捉えようと気持ちを新たにしました。

7月10日　B園の参観を受けて、自園の保育を捉え直す

今回の訪問で、職員がチームで保育することの大切さについて捉え直すことができました。７月のある日、遊びの時間が終わって片付けに入ろうとする頃、E児が出会いの広場に向かって椅子を運び「コンサートが始まるよ」と、呼びかけているところでした。私はE児に「みんな片付け始めるけど、どうする？」と尋ねると「１回だけ踊りたい」とのことだったので、私と数名の子どもたちはE児が並べた観客席に座りましたが、なかなか始まりません。すると、E児が「この席にみんな座ったら始めます」と言いました。この後の活動を考えると時間は限られていますが、たくさんの椅子を並べたE児が得意な踊りを披露する機会も大切にしたいと思い、私はE児と一緒に周りの子どもたちに声をかけに行きました。しかし、すぐには集まりません。他の子どもたちは片付けを始めています。私は、焦る気持ちをおさえながら椅子に座りました。

すると、５歳クラスの担任がE児に声をかけながらコンサート会場へ来てくれました。また、３歳クラスの担任と副担任も、子どもたちと一緒に来てくれて、席がお客さんでいっぱいになりました。会場では温かい手拍子の中、ダンスを披露したE児はとても満足そうな表情を浮かべていました。一番慌ただしい時間帯であるはずなのに、E児の思いを大切にして会場へ足を運んでくれた先生方、そして他の子どもたちの片付けを促して対応する先生方の連携が本当にありがたくまさにチームとして動いていると感じられる時間でした。

他の先生方が集まり、E児のことを支えられたのは、全職員がE児のことをよく理解していたからではないかと思います。もちろん、毎回同じように対応できるわけではなく、折り合いをつけなくてはいけない場面もあると思います。しかし、今回最後まで一人で踊りきったE児の気持ちは満たされ、これからの自信につながるだろうと思いました。職員がチームとして動くためには、子どもたちの情報共有が必要不可欠です。職員集団の一員として伝え合い、話し合いながら、子どもたちの保育に携わりたいと思いました。

〔上越教育大学　山口美和先生のコメント〕

B園での参観を通して、遊びの中での子どもたちの試行錯誤の様子や、色水の変化に驚き、感動する子どもの姿に触れ、刺激を受けたことが伝わってきます。キャップに絵の具を付けておき、水の入ったペットボトルに蓋をしてボトルを振るとその色が水に溶け出てくるという遊びは、ちょっとした実験のようで、大人が試してもわくわくしそうです。一人ひとりの子どもがしたいことをできるようにするために、職員同士が協力し助け合って、みんなで子どもを見ることのできるB園の先生方の関係は素敵ですね。附属幼稚園でも、普段から子どもの様子を共有し合っているからこそ、E児の思いを叶えるために、コンサート会場に多くの先生方が集まってくれたのだと思います。他園のチーム保育の状況を目にしたことは、カンファレンス等を通しての日ごろからの情報共有が、子どもの願いを実現するための教師同士のサポートに結びついているという、附属幼稚園のよさにも気づくきっかけになったのではないでしょうか。

附属幼稚園・G園　交流だより　その1

令和6年5月10日発行
令和6年5月 2日参観

5月2日　G園を参観して　～遊びの中で捉えた幼児の姿①～

【写真1】

A児がスコップで木を叩いていました。何が楽しかったのか、気になって近くに行ってみました。A児は、しばらくの間、ずっと木を叩き続けていました。近くにいた私に気づいたA児はキラキラした表情でこう言いました。「ねえ、僕が木を『パン』ってやったらさ、木がちょっと割れたんだよ！」　この言葉を聞いたとき、A児は、スコップで木を叩き、木が割れることが楽しみなのではないかと捉えました。

【写真2】

しばらくA児を見ていると、スコップの使い方が変わりました。これまでは思い切り木にスコップを叩き付けるような使い方だったのが、スコップの先端を木に挿し、押すようにしていました。「割れないなあ」とつぶやきながら、何度も試していました。

【写真3】

またしばらくすると、A児は高いところからスコップを振り下ろしていました。これは「薪割り」の動作ではないかと捉えました。この「薪割り」も、「割れないなあ」とつぶやきながら、何度も試していました。近くで様子を見ていた私と目が合ったとき、A児はまた目を輝かせながら、こう言いました。「木を『パン』ってやるとさ、上の葉っぱも動くんだよ！あとね、僕の手も『ピーン』ってなるよ！」

たまたま樹木の皮の隙間にスコップが当たり、割れたように見えたことから始まったA児の遊び。A児はどうやったら木が割れるんだろうと自ら疑問をもち、スコップの使い方を多様に試し、その中でまた木を叩いた時の反動についてまた気づいていく、そんな姿を見ていたら、A児の「自分で育とうとする力」に、心を動かされました。

5月2日　G園を参観して　～遊びの中で捉えた幼児の姿②～

【写真4】

B児は、砂場の端にいた私に「ねえねえ、早く来て！」と、意気揚々と話しかけてくれました。行ってみると、バケツの中に砂が山盛りに入っていました。B児は山の頂上に指で小さな穴を空けると、「これから爆発するよ！」と言って、その砂の山に水をかけました。水で砂が流され、本当に火山が「爆発」したかのように見えました。何より感動したのはB児の表情でした。「爆発」を考えついたB児は、言葉では表せないような光り輝く笑顔で、何度も試していました。

途中、近くにいたC児に、水がかかる場面がありました。C児はB児に水をかけられたのだと思ったのか、怒ったような表情でB児の靴に水をかけ返しました。B児はそれでも「ねえ、（Cくんも）一緒にやらない？」と「爆発」の遊びに誘っていました。C児はB児と一緒に笑顔で「爆発」を楽しみました。C児が「爆発」を試したのはほんの数回ではありましたが、自然とかかわりが生まれた瞬間であったと捉えました。「かかわりは、遊びに夢中になる中で自然に生まれてくるもの」であると捉えています。B児が「爆発」という夢中になれる遊びに出会えたからこそ、かかわりが自然と生まれたのだと思いました。

5月2日　G園を参観して　～遊びの中で捉えた先生方の姿～

G園の先生方の保育は、本園が目指すべき姿ではないかと思いました。まず、先生方が子どもを主体にする黒子のような存在でした。保育者の声のトーンや大きさ、姿勢、立ち位置、本園の理想とするものなのではないかと捉えました。そして、黒子に徹するだけではなく、くらしをともにつくる仲間のような存在でもありました。一緒に汗を流して砂場に穴を掘り続ける姿、かき氷屋さんのお客さんとして遊びの援助をする姿など、遊びが発展するきっかけを、子どもの思いに合わせてつくっていました。

そして、保育中に幼児の発見や感動を共有している姿が、本当に楽しそうでした。【写真5】【写真6】のように、1つのクラスだけではなく、どのクラスもそうでした。「（この子は）いろんなこと考えてるんだね」などと話す保育者の楽しさが、きっと子どもたちの楽しさにもつながっているのではないかと捉えました。

先生方が楽しそうに共有する姿を見ていたら、私も、自分が捉えた発見や感動を先生方に伝えたくなりました。そこで、先に書いたA児・B児の姿を、年中クラスの先生に伝えました。年中クラスの先生もA児・B児がしていたことを肯定的に捉え、A児がつくる意味に共感してくださりました。年中クラスの先生との対話を通して、先生方が同じ方向を向いて楽しく保育をしている、この素敵な保育園の仲間になれたような気がして、とても嬉しくなりました。

5月2日　G園の参観を受けて、本園の保育を捉え直す　～焦りすぎていたのかもしれない～

私も、G園の先生方のように、子どもたちの発見や感動、心の動きを保育者で分かち合い、喜び合いながら保育がしたいと願っています。頭では分かっているのですが、４月は新たな環境になり、不安や焦燥感のようなものがあり、保育をしている中であまり心の余裕がない自分の姿に気付きました。５歳クラスでは例年、片付けの際に「うみ組パトロール」と称して、園全体の片付けの役割を担います。５歳クラスとしての自覚をもってほしいという願いが先行し、その焦燥感が子どもにも伝わってしまっていたらどうしようか、という不安もよぎりました。以前、G園の先生が「今日の援助が子どもを支えているどうか分かるのは、今日ではないかもしれない。長期的に子どもの育ちをみることが大切だ」と語っていたことも、この時思い返しました。もう少し、長期的な育ちを願うことで、「今」の子どもの思いに寄り添い一緒に発見や感動を喜び合えるような保育をしていこうと捉え直しました。

この日、G園から本園に戻ると、片付けの時間でした。D児は、みんなが片付けをしている時、一人で畑に行って何かをしていました。「５歳クラスとしての自覚」ということが頭に浮かびましたが、あえて声はかけず、D児が何をしたいのか、しばらくその様子を見守ることにしました。D児が戻ってきたとき、D児の手には、畑の粘土質の土を使ってつくった、ちょうどよい固さの泥団子をもっていました。私は心が動き、「すごいのつくってきたね！」と、副担任と一緒に共有し、D児にもその感動を伝えました。D児がきっかけとなって、泥団子の遊びを他の子どもたちも楽しむように始まったのです。

D児が「うみ組パトロール」をするのは、まだまだ先かもしれません。しかし、それでよいのではないかと捉えました。D児の心の動きを副担任と一緒に捉えながら、少し長い目でD児の育ちを捉えていきたい、そして、D児の育ちが見られた時には、副担任と一緒にその感動を共有して喜び合いたいと思います。G園の先生方の保育を見て、また自分を捉え直し新たな気づきがありました。「つながる」ことは本当に大切だと思いました。

〔上越教育大学　髙田俊輔先生からのコメント〕

子どもたちの遊び込む姿が伝わる交流だよりを興味深く拝読いたしました。いきいきとした子どもたちの姿が映る素敵なお写真からは、G園の安心・安全な保育環境が目に浮かびます。今回の交流だよりの記録で興味深い点は、附属幼稚園の先生がG園の先生方の姿を「黒子」という演劇の比喩で形容されていることです。子どもたちが園という舞台の主役として伸び伸びとパフォーマンスできるように、保育者は最良な環境や必要な小道具を準備して舞台を整え、主役たちが困ったときには影で支えるようなイメージとして解釈しました。それはまさに、保育者の専門性の一つであると思います。とはいえ、大人の側が黒子になることは容易なことではありません。私も日々の大学生・大学院生への指導で議論が白熱すると、主役であるはずの彼らを置いてきぼりにしてしまい、あたかも自分が主役か著名な演出家であるかのようにふるまってしまうことに後から反省することがあります。主役が輝けるように彼らを「信頼して待つこと」が大切であることは分かっているのに、保育者・教育者側が黒子に徹しきることはとても難しいですね。今回の附属幼稚園－G園の交流だよりを読ませていただき、私自身も自らの教育実践を見直すきっかけになりました。今後の交流も楽しみにしております。

交流だよりを読んだ感想

A児がスコップで木を叩く遊びの考察に驚かされました。子どもを見る視点に気付かされ自分の保育を見直してみました。
すると、より子どもたちの心の動きが見えてきて小さなことでもキラキラと輝き、毎日が感動でいっぱいなのだと感じました。

附属幼稚園・C園　交流だより　その4

令和6年7月 8日発行
令和6年6月11日交流

6月11日　C園を参観して

昨年度に続き、今年度もC園と交流させていただけることに、大変ありがたく感じています。6月11日に、今年度初めての参観をさせていただきました。今年度は私が3歳クラス担任ということで、3歳クラスを参観させていただきました。この日、3歳クラスの保育室へ行くと、自由遊びの時間でした。A児は、「食べていいよ」と言って、私のところにお料理を持ってきてくれました。私が受け取ると、「ちょっと待ってて」と言って、スプーンを持ってきてくれました。相手のことを考え、行動する姿に感動しました。しばらく、お料理のやりとりをしたあと、今度はブロックで遊び始めました。「これは、恐竜なの」と言って恐竜を3つつくりました。そうしているうちに片付けの時間になりました。夢中になってブロックで遊んでいたA児が、どうするのかと見ていると、「見て見て！恐竜がおもちゃ片付けるの」と言って、2つの恐竜でおもちゃをはさみ、かごに運んでいました。楽しみながら片付けをしている様子を見て、きっとこれまでも先生方と一緒に楽しみながら片付けをしてきたのではないかと読み取りました。

しばらくして、全員がホールに集まり、体操をする時間になりました。B児は、みんなと一緒にホールに出たものの、なかなか落ち着かず、不安な様子が見られました。担任の先生は、B児に声をかけると、一緒に保育室に戻り、B児の落ち着く場を提案していました。B児のいる所からは、ホールにいる担任の先生の姿がよく見えました。B児は、ホールにいる担任の先生と視線を合わせながら、ホールから聞こえてくる音楽に合わせてその場で体操を始めました。この様子を見ていて、担任の先生のB児に対する深い幼児理解があり、B児との間にしっかりとした信頼関係があることを読み取りました。B児の様子を読み取った担任の先生は、B児が落ち着いて体操に参加できる場をつくり出していました。その距離感が絶妙で、他の幼児は目に入らないが、担任の先生とは視線の合う場所でした。B児は担任の先生と視線を合わせながら、安心して体操をすることができ、うれしかったのではないかと読み取りました。B児は終始、笑顔で体操をしていました。

今回の参観で、改めて幼児理解の大切さ、幼児のありのままを受け入れることの大切さを実感しました。入園したての3歳児だからこそ、幼児が安心して過ごせる空間を大切にしているのだなと感じました。これからも幼児一人一人のありのままを受け入れ、それぞれに合った時間や場を保障していきたいと考えました。そして、片付けも楽しんでいたA児のように、保育者も一緒に楽しみながら生活を共にしていきたいと捉え直しました。

6月21日　C園の参観を受けて、自園の保育を捉え直す

片付けの際、なかなか片付けに思いが向かず、遊び続ける幼児がいます。他の幼児の片付けが終わって、保育室へ戻るタイミングになっても、なかなか戻ってくることができない日もあります。担任は、どんな言葉をかけると気持ちが次の活動に向くのかを考え、試行錯誤しました。そんな時、C園の保育を参観させていただく機会がありました。C園では、その子のその時の様子をよく読み取り、その子に合った場と時間を保障していました。担任は、これまで保育室に戻らせなくてはという思いが強く、その子の思いに寄り添うことができていなかったのではないかと振り返りました。

ある日、C児は他の幼児が保育室へ入っても、外で遊び続けていました。担任は、どんな言葉をかけようかを考えながら、C児に近づきました。「何してるの？」と聞くと、「これ探ってるの」と話してくれました。C児は手に木の実がいっぱい入っている袋を持っていました。担任は、それだけ思いをもって遊んでいることをうれしく思いながら、きっとまだ木の実を探り続けたいのではないかと読み取りました。「先生、お部屋でCくんとみんなで楽しいことしたいんだけど、Cくんどうする？」「うーん。これ探りたい」「そうだよね。もっと探りたいよね」「うーん。じゃあ、あと3こ探ったらお部屋行く！」「わかった。そうしよう」担任はC児とやりとりをしながら、C児が自分で折り合いをつけて、保育室へ戻ることを決められるように言葉をかけました。誰にも邪魔されず、木の実を探る時間を保障されたC児は自分で保育室へ戻ることを決め、笑顔で担任と一緒に保育室へ戻りました。

別のある日、「みんなの時間」で製作をしていた時のことです。「終わった」「できた」とそれぞれのタイミングで活動の終わりを決めて、昼食の準備に取りかかっていました。他の幼児が昼食の準備が終わっても、D児はなかなか作業を終えることができずにいました。担任が「みんなごはんにするみたいだけど、Dちゃんどうする？」と声を掛けると、「まだできてないんだよ」と話しました。担任は、D児のやりたい思いを読み取り、D児が自分で納得できるまで作業を続けることができるように、「このテーブルはごはんの準備をしたいんだけど、あっちのテーブルならまだできるよ」と別の場を提案しました。するとD児は「じゃあ、あっちでする」と言って、道具を持って移動しました。しばらく作業を続けた後、「先生、できたよ」と製作物を担任に見せに来ました。「すごいね。素敵なのができたね」と話すと、D児は嬉しそうに自分で片付けを始めました。自分の納得するまで作業を続ける場と時間を保障したことで、自分で終わりを決め、次の活動に気持ちを向けられるようになってのではないかと捉えました。

いつもこのように折り合いが付けられる場面ばかりではないかもしれません。どんな言葉をかけても、どんなに時間や場を保障してもなかなかうまくいかないこともあります。しかし、保育者としてその子の思いを尊重し、その思いを実現するためにどうしたらよいのかを考え続けることはとても大切であると考えます。これからもその子の思いはどこにあるのかをよく読み取り、深い幼児理解のもと、援助していきたいと思いを新たにしました。

〔上越教育大学　白神敬介先生のコメント〕

大人でも、片付けが好きな人もいれば嫌いな人もいます、その違いを生み出す背景は何でしょうか。こんな疑問を感じたのは、なかなか片付けが進まない子どもへの関わりに悩む話をこれまでにも何度か聞いたからです。こうした悩みは保育者の多くが持つものではないかと思います。今回の交流では、片付けに思いが向かない子どもの姿と、保育者として子どもの思いを尊重する姿がありました。附属幼稚園の片付けは長い時間を設けて行われていることに以前から感銘を受けていました。それは、子どもが自分の遊びに「かたをつける」ための時間を、子どもの時間感覚に合わせて設けていることであり、その思いへの尊重が根底にあるのだと思います。しかし、時間が長ければそれで良いわけでもなく、だらだらと過ごしてしまうだけになるかもしれません。それを踏まえて、最初の問いへの答えも重ねて考えると、そこには「自分なりの達成や満足」があるのではと思い至りました。片付けは、子どもには基本的に嬉しい時間ではありません。それでも、片付けに向かうなかで、自分なりに上手にできたことや、気持ちに折り合いをつけられた誇らしさを感じることで、意欲的に片付けに取り組めるようになるかもしれません。保育者がどんな上手な働きかけをしても、すべての子どもに片付けを楽しんでもらうことは難しいですが、達成や満足を得ることは可能です。今回、描かれていた子どもの様子には「自分なりの達成や満足」がみられました。大切なことは、「自分なり」を見つけることです。それは、大人の基準で行われる片付けではなく、子どもなりに取り組んだことから得られるものです。大人でも子どもでも、好きな活動にはたいてい「自分なりの満足や達成」があるのではないでしょうか。片付けのなかで、子どもがそれを見つけるのは難しいかもしれません。そのために、保育者の助けが必要であり、それが、子どもの思いを尊重するということの意味だと思います。このことは、片付けに限らず、保育のあらゆる活動に共通するといえそうです。

交流だよりを読んだ感想

私自身も日々の保育に向き合って考える時間がなかったので、今回のように考察や子どもたちの姿をじっくりと観察していただき、すごく考えさせられることがありました。ありがとうございました！！

附属幼稚園・H園　交流だより

令和6年7月25日発行
令和6年6月26日交流

６月26日　H園を参観して

H園の園長先生から「お出かけカンファレンス」の依頼を受けたとき、現在の保育園の様子や園長先生の思いをお聞きしました。H園は、今年度民営化された保育園であり、スタッフも子ども主体の保育を一緒につくりたいという思いをもった新しいメンバーであることを教えていただきました。

私は、この日午前中の自由遊びの時間を参観させていただきました。４歳クラスの保育室では、４歳児と５歳児が一緒に遊んでいました。マジックを使って色水づくりをしたり、廃材を組み合わせて工作をしたりしている幼児がたくさんいました。少し離れたところで様子を見ていると、A児が話しかけてきました。「先生、これくっつけたいんだ」と私の手を引いて、作業をしていたテーブルに行きました。テーブルには、ビニールテープがいくつか置いてありました。A児は、１つのビニールテープを手に取ると、「これで、くっつけたいんだよ。先生、やって」と私に頼みました。私は、参観者であり、保育のじゃまにならないようにと思いながら、「私はどうやったらいいか、分からないんだ」と話しました。しかし、何度も「先生、やって」とお願いに来るA児は、３つのカップをつなぎ合わせて、スムージーの入れ物にしたいという強い思いをもっていることが分かりました。しばらく、やりとりをしていると、A児の目の前で他の幼児がビニールテープを自分で切って使い始めました。そして、ビニールテープを使い終わると、それをテーブルに置きました。私は、ビニールテープの先が芯から離れている状態でテーブルに置かれていることに気付き、A児に伝わるように、「あっ」と言ってそのビニールテープを指さしました。A児はそれに気付き、そのビニールテープを手に取ると、嬉しそうに自分でハサミを持ってきて、ビニールテープを切って、貼り付けました。次に、もう１枚貼り付けようとしたとき、テープの先が芯にぴったりと張り付いてしまいました。A児はどうするのだろうと思いながら、近くで見ていると、A児は、自分でテープをじっくり見て、手で触り、テープの先を探しているようでした。ついさっきまで「先生、やって」と言っていたA児でしたが、自分で切った経験が自信になったのか、今度は自分でテープの先を探し、自分で切って、貼り付けていました。その時のA児は「できた！」ととても嬉しそうでした。この様子を見ていて、やはり「子どもは自分で育つ力をもつ存在」であり、その力を信じることが大切だと捉えました。このような自分でがんばる姿は、H園の先生方の日々の積み重ねがあったからだと感じました。これまで保育者が、幼児の実態に合わせて見守りながら、「少しがんばれば自分の力でできる」という経験を積み重ねてきたからではないかと捉えました。

５歳クラスでは、ダンボールを使って漁船づくりをしていました。私は、先生と子どもたちが一緒に作業をしている様子を見て、とても楽しく、わくわくした気持ちになりました。それは、先生も子どもの目線に立ち、一緒に漁船づくりを楽しんでいたからではないかと捉えました。先生のわくわくした気持ちが子どもたちにも伝わり、その場がとても楽しい空気感に包まれていました。しかし、先生はただ一緒に楽しんでいるだけではなく、保育者としての声かけも絶妙でした。「すごいね」「いい考えだね」などと子どものがんばりを称賛する声かけや「どうやったら立てられるのかね？」と子どもの困っていることを焦点化する声かけがありました。それだけでなく、「〇〇くんが、何かお話したいんだって」と子どものつぶやきを拾って、全体に共有しようとする声かけもありました。保育者として、目の前の幼児の実態から、声かけの必要性を判断し、どんな声かけを、どんなタイミングで行うのかを考えることはとても大切なことだと感じました。見守る場面では見守り、必要に応じて保育者が前に出て行くことも必要であると捉えました。

６月28日　H園の参観を受けて、自園の保育を捉え直す

H園を参観する中で、幼児が「自分でがんばる姿」を見ることができました。その姿は、「少しがんばったら自分でできた」という経験の積み重ねによるものだと捉えました。私も保育の中でそんな瞬間を見逃さないようにしていこうと気持ちを新たにしました。そんなある日、３歳クラスのB児が「捕まえたバッタを紙コップに入れたい」という思いをもち、紙コップに入れた場面がありました。バッタを紙コップに入れますが、バッタがぴょんぴょんと跳ねて紙コップから飛び出していきます。それを見ていたC児は「ふたをすればいいんだよ」と提案します。C児は「テープがあれば、ふたができるよ」と言いました。私は、これまで遊びの時間に紙コップやセロハンテープを提供したことはありませんでしたが、この経験が「自分でがんばる姿」につながるのではないかと考え、提供することにしました。２人でセロハンテープで紙コップにふたをし始めます。これまであまりセロハンテープを使った経験がないために、なかなかうまくいきません。私はそれを見て、手を貸したくなりながらも、「自分でがんばる姿」を大切にしたいと考え、「すごいね。もうすこしだね」などとそのがんばりを称賛する声かけを続けました。すると、「こうしたらいいんじゃない？」などと自分たちでかかわりながら、ふたをつくる姿につながりました。「やった！できた！」長い時間、黙々とつくり続けた２人でした。その日、C児は遊びの時間中、ずっとその紙コップを持ちながら遊んでいました。そして、帰りには迎えに来た母親にその紙コップを自慢げに見せ、「これ、自分でつくったんだよ」と伝えました。

３歳クラスでは、例年虫かごを用意していません。今回のように、「自分で捕まえた大切な虫を逃げないように入れ物に入れたい」という思いから、工夫する姿につなげたいという意図があったのだと、この出来事から改めて感じました。そして教師がその瞬間を見逃さず、少しのきっかけをつくることで、「自分でがんばる姿」につながるのだと改めて実感することができました。

〔上越教育大学　高田俊輔先生のコメント〕

今回の交流は、子ども主体の保育を目指すH園へ附属幼稚園の先生が出向く「おでかけカンファレンス」であったとのこと。附属幼稚園から子ども主体の保育を学びたいというH園からのご要望で実現したとお伺いしました。交流だよりを読ませていただくと、附属幼稚園の先生もH園の保育から多くの気づきを得る有意義な交流であったと感じます。私は特に、保育者が「できる／できない」の間を揺れ動く幼児の姿を見守ることについて考えました。

保育者が幼児を「見守る」ことに関して、幼稚園教育要領解説には次のような記述があります。「教師は幼児と向き合い，幼児が時間を掛けてゆっくりとその幼児なりの速さで心を解きほぐし，自分で自分を変えていく姿を温かく見守るというカウンセリングマインドをもった接し方が大切である」（幼稚園教育要領解説, p. 172、傍線部筆者）。私はこの解説の中で、幼児を「自分で自分を変えていく」存在として捉えている点が重要であるように思います。一般的に教育という営みは、「教える者が学ぶ者に変化を促す」という構図のもとで行われることが多いです。その場合、教える者は、学ぶ者が良い変化をしたかどうか、言い換えれば学ぶ者が「できたかどうか」といった視点からの評価をすることが多くなるでしょう。一方で、今回の交流だよりにおけるH園・附属幼稚園の保育者の語りはいずれも、幼児が「できたかどうか」にこだわらず、彼らの行為や心情に対する共感で溢れていました。おそらく、子ども主体の保育を普段から考えられている両園の保育者だからこそ、幼児が「自分で自分を変えていく」ことを信じて、彼らを温かく見守ることができたのではないでしょうか。幼児なりの達成感を味わうことを重視する幼児教育・保育は、まさに教育の原点ではないかと考えさせられた交流だよりでした。

附属幼稚園・K園　交流だより　その1

令和6年7月22日発行
令和6年6月28日参観

６月28日　Ｋ園を参観して　～遊びの中で捉えた幼児の姿①～

５歳クラスに入ると、空き箱でつくったお手製のカバンを首からかけ、嬉しそうに保育室を歩いているＡ児の姿が目に留まりました。Ａ児は、カバンの中から、２つの穴が空いた画用紙を取り出し、顔の上に載せていました。何をしているのか気になり、少し離れたところで見ていると、「これはね、キュウリパックだよ」と、嬉しそうに教えてくれました。

その後、カバンの中身を全て出し、全部見せてくれました。入っていたのは、キュウリパック、画用紙でつくった手帳、折り紙の財布（中に折り紙の小銭も入っている）、スマホでした。全てＡ児のお手製です。これらを見せてくれた後には、大事そうにまたカバンの中にしまっていました。

その後、Ａ児は「そうだ！」と言って、容器とモールを使って牛乳をつくり、またカバンの中にしまいました。そして、近くにいたＢ児に、「はい、牛乳あげる」と言って、つくった牛乳をカバンから取り出しました。Ｂ児は「ありがとう」と言って、自分のしていた製作を続けていました。しばらくすると、Ｂ児は、Ａ児に「さっきはありがと」と言って、丸いものを渡しました。それは、「２００」と書いてある折り紙のお金でした。２人を見ていて、自然と生まれたかかわりに、感動しました。

このかかわりは、なぜ生まれたのか。そこには先生方の支えがあると確信しました。５歳クラスの保育室は、子どもの楽しそうな声がこだまし、先生の声はほとんど聞こえませんでした。先生は、製作で困ったことがある子の相談役のようになり、一緒にどうすればよいかを考えていました。まさに、私たちも理想とすべき、「子どもたちが主役の保育室」でした。教師は、子どもたちが自分でできる力を信じ、その思いを少しだけ支える存在でした。そして時には、子どもたちと感動を共有する仲間のような存在でした。そのさじ加減が絶妙で、心を動かされました。

子どもたちの遊びは、子どもたちがした経験の中から生まれてくると捉えています。一人一人の子どもたちの「今」の楽しみは何なのか、どのような経験をしているのか、遊びの時間の読み取りだけでなく、くらし全体で読み取っていきたいと思いを新たにしました。

６月28日　Ｋ園を参観して　～遊びの中で捉えた幼児の姿②～

４歳クラスは、雨の中で雨合羽を羽織り、外遊びに出かけていました。赤土のところがちょうどよくぬかるんでいました。Ｃ児が「泥団子をつくりたい」と言うと、周りの子どもたちも「いいね、やろう」と、泥団子づくりが始まりました。

Ｃ児は、手の中でずっと小さな団子を転がし続けていました。「固まるとね、『もにょもにょ』はもうできなくなる」と教えてくれました。Ｄ児は、「私は『でかでか』団子にしたいんだ」と教えてくれました。近くにいた４歳クラスの先生は「そのお団子『まるまる』だね！」と子どもたちを称賛していました。

この遊びを見ていたとき、２つ思ったことがあります。１つめは、子どもの言葉選びが絶妙であるということです。『もにょもにょ』を言い換えるとしたら、「泥が団子になるくらいのちょうどよい粘度にするために優しく丁寧に捏ねること」ではないかと思っています。Ｃ児は、これを絶妙に表現しているから、本当にすごいです。『でかでか』も、「普通の『でか』よりもさらに『でか』い団子」なのではないかと捉えました。

２つめは、保育者が子どもの言葉を大切にしていることです。先生が使った言葉『まるまる』は、きっと先生の「子ども語録」に刻まれた言葉なのではないかと思って聞いていました。

子どもの言葉の意味を知ろうとすることの大切さ、子どもの言葉に寄り添い、保育者も使ってみることの大切さ、そして、このような表現をすることができる子どもへの尊敬の思いを忘れてはいけないと、思いを新たにしています。

６月28日　Ｋ園を参観して　～遊びの中で捉えた先生方の姿～

５歳クラスの担任の先生の運動遊びの支え方から多くのことを学びました。高く積まれた巧技台を登ろうとする子に対して、腕の力でしっかりと押すことを、自分自身の手を使って伝えていました。園長先生と、このことを話題にしていると、先生方が体の使い方や、そうなるためのステップを、大学の周東先生から習っていると伺いました。集会後のハイハイをする運動遊びも、１つのステップであると教えていただきました。周東先生に学ぶことで、先生方が新たな見方で子どもたちの運動を支えている姿なのだと、感動しながら参観していました。

教師自身が新たな見方や考え方ができるような機会があることが、大切です。今の研究の中で行っている交流もそのような機会の１つであると捉えています。

６月28日　Ｋ園を参観して　～遊びの中で捉えた幼児の姿③～

４歳クラスのＥ児は、ドレッシングボトルの中に赤土と水を入れ、それを混ぜ合わせてチョコレートをつくっていました。しばらくすると、泥が沈殿し、泥、砂、水のきれいな３層ができあがっていました。これに心を動かしたＥ児は、このチョコレートを誰かに見せたくて、園庭で出会う人みんなに声を掛けていました。Ｅ児は、友達や先生を呼び止めては、「チョコレート分けてあげるね」と、ドレッシングボトルの先から水を少しだけ出して「お裾分け」をしていました。中には、「水がかかるから、いや」「先生、Ｅくんが水をかけてきた」という子もいました。それでもＥ児はまた違う友達や先生を呼び止めてはお裾分けを続けました。

Ｅ児が粘り強くチョコレートの魅力を伝えようとする姿には感動しました。Ｅ児の心の動きは、計り知れないほど大きかったのでしょう。Ｅ児を見ていて、感情が揺り動かされるような発見や感動が、こんなにも育ちにつながるのだと気付かされました。

６月28日　Ｋ園の参観を受けて、本園の保育を捉え直す

４歳クラスの参観をして以来、子どもが使う言葉に、より着目するようになりました。以前、高いところにある実を採るとき、子どもたちは畑の支柱２本を「く」の字に組み合わせ、その先端で枝をはさみ、回転させて枝を折って柿の実を採る方法を思いついたことがありました。そのとき、子どもは「わにわにばさみで、くるくるすると採れる」と言っていました。大人がこの状況を詳細に説明するより、よほど伝わる言葉ではないかと振り返りました。私の「こども語録」に確かに刻まれている言葉です。

７月のある日、園庭でカナヘビを捕まえたF児が、木切れを組み合わせてカナヘビの家をつくっていました。直方体になるように組み立てると、家の中に水を飲むところや、ベッドなどをどんどんつくり足していきました。楽しいところには人が集まるもので、５～６人の子どもがF児の遊びに加わりました。みんなで力を合わせてつくったので、カナヘビの家がどんどん大きくなり、カナヘビが、家じゅうを動き回っていました。それを見たF児が「カナヘビのわくわくランドだね」と輝くようなまなざしで言いました。５歳クラスは先週お泊り保育で「わくわくランド」に行って来ました。カナヘビが楽しそうな様子と、自分が楽しかった経験を結び付けて、このように表現したのだと思います。この遊びを近くで見守っていた担任と副担任は、F児の言葉の中にある、カナヘビを楽しませたいという思い、わくわくランドでの経験で大きく心が動いていたことを読み取り、共有しました。そして、言葉選びをする子どもの感性に感動したことを共有しました。

参観を通して、子どもの言葉に感動する心を、そして、子どもの言葉の意味をこれまで以上に考えるきっかけを、いただいたように思います。

〔上越教育大学　吉澤千夏先生からのコメント〕

今回、本学附属幼稚園の中山先生とともに私もお邪魔させていただきました。あいにくの雨でしたが、園舎に足を踏み入れるなり子どもたちの元気な声が聞こえてきて、巧技台や跳び箱で夢中になって遊ぶ子どもたちの姿が目に入りました。その動きの素早さと身体使いの巧みなこと！とてもてびっくりしました。しかし様子を拝見するうちに、子どもたちの年齢や個別的な発達に合わせて、巧技台の構成や活動などを適宜調整する先生方が子どもたちの活動を支えており、その基になるのは本学教員との研修にあることがわかりました。外部講師が子どもたちに直接かかわるだけでなく、保育者がそこから学び、自らが力をつけていくことで、日常の保育の中でまさに遊びを通して子どもたちの発達を支えていく姿を見せていただきました。

また今回、中山先生が子どもたちのステキな遊びの様子やつぶやきをたくさん見つけてきました。なかでも特に子どもたちの言葉に注目されたようです。幼児期の子どもたちの発する何気ない言葉にハッとさせられる私たちですが、子どもたちの言葉はなぜこんなにも興味深いのでしょうか？どうやって生まれてくるのでしょうか？子どもの言葉の豊かさを支えているのは何なのでしょうか？そんなことを考えてみるのも面白いのではないかと思います。

交流だよりを読んだ感想

子どもたちのつぶやきをたくさん言葉に表していただきありがとうございました。このようにつぶやきを具体的にしていくことも、子どもの遊びや行動を知る手立てになるとわかり、たいへん学びとなりました。

令和６年度「つながる保育（第２年次）～園と園のつながりを広げ、深める～」研修ヒストリー

ここでは、研修会議やカンファレンスでどのようなことが検討され、いろいろな園とどのように交流して、つながりがつくられていったのか、その経緯について示す。なお、交流をした園は以下の通りアルファベットにて表記している。

A	市外幼稚園	J	市内保育園
B	市内保育園	K	市外こども園
C	市内幼稚園	M	市内保育園
G	市内保育園	N	県外幼稚園
H	市外保育園	O	県外幼稚園
I	市外幼稚園	P	県外幼稚園

日、場面、参加者	内容	詳細
４月９日 研修 各クラス担任、養護教諭	今年度の研究推進の概要についての検討	○昨年度の研究を基にして、今年度はどのようにつながりを広げ、深めていくことができるかを検討した。 ○交流だよりを蓄積し、保育の質が向上したという事例があると、互いの園にとってよりよいものになると考えられる。そのための第一歩として、互いの園の参観を行うことから始めることを確認した。 ○研究協力園の確認、４月下旬に参観することへの依頼を行い、実践へつなげていくことを確認した。
４月 15 日 研修 各クラス担任・副担任、養護教諭、研究協力者	研究の概要、今後の計画についての検討	○Ｒ５年度の研究協力園とＲ６年度の研究協力園がつながると、さらにつながりが広がると考えられる。新たなつながりを広げるため、その方法や関わり方、参観の場面などについて検討した。 ○フィードバックを活用したり、オープンカンファレンスで互いの園のよさを取り入れたりすることは、保育の質の向上につながることを確認した。 ○交流することで互いの保育がよりよくなったというプロセスを紹介することができるとよい。また、自分の保育を振り返り、よさを取り入れたり高めたりすることができるとよいことを確認した。
４月 17 日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究協力園との交流計画の検討	○Ｒ５年度の研究協力園、Ｒ６年度の研究協力園との交流を行うために日程を確認して計画を立てた。 ○それぞれの担任が、どの協力園とつながって交流を深めていくかを検討し、決定した。
４月 24 日 水曜カンファレンス 各クラス担任、各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員	最近の保育についての語り合い	○新年度に入り、各クラスの様子について共有した。幼児の気持ちを高める声の掛け方や、帰りの時間までの過ごし方、環境の工夫などについて意見交流を行った。 ○スモールステップで活動を促すこと、３歳児が使いやすいようにプラスチックスコップを砂場の近くに設置すること等を確認した。
４月 30 日 研修 各クラス担任	カンファレンスの方法についての検討	○近隣の園へは職員が直接伺い、遠方の園は現地へ数名が伺い、他の職員はオンラインを繋いでお出かけカンファレンスを行うことを確認した。 ○オープンカンファレンスでは、参加者に予め話題にしたいことを提供してもらうため、オーダーシートを作成することとした。

５月２日 交流（参観） ５歳クラス担任	Ｇ園参観	○５歳クラス担任がＧ園を参観した。 ○長期的な育ちを願うことで、「今」の子どもの思いに寄り添い、一緒に発見や感動を喜び合えるような保育をしていこうと捉え直した。
５月７日 研修 各クラス担任、養護教諭	第１回研究保育の資料についての検討	○研究会でのプレゼン資料について検討した。 ○「しくみ」の定義について確認した。交流したいという思いから、保育が変わっていくことまでを、広い意味での「しくみ」と捉えることとした。 ○カンファレンスでのおたずねシート（オーダーシート）の内容について確認した。
５月８日 オープンカンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園職員 8 名	その日の保育を中心に語り合い	【話題になったこと】 ○小学校職員に幼児教育について理解を促すためにはどうするとよいか、小１プロブレムや幼小連携について。 ○幼児の「やりたい」という気持ちを広げられるような環境構成、設定保育と自由に遊ぶ部分のバランスについて。 ○職員の共通認識や連携について。
５月８日 研修 各クラス担任、養護教諭	第１回研究保育の資料についての検討	○「カンファレンス」の名称がどのような過程で更新されていったのかを確認し、表現の仕方について検討した。 ○Ｒ５年度、Ｒ６年度の協力園とどのように関わっていくのかを検討した。今年度は、本園がハブのような役割となり、他の園同士のつながりもつくっていくことを確認した。
５月９日 研修 各クラス担任、養護教諭、研究協力者	第１回研究保育の資料についての検討	○カンファレンスの方法について確認した。本園のカンファレンスが見たい参加者もいるし、ある話題について話したい参加者もいる。限られた時間の中で行うことは難しいが、本園のカンファレンスのかたちで、参加者が話合いに参加できるようにすることを共有した。 ○プレゼン資料の表や図、提示する順番などについて、より伝わりやすくなるように検討した。
５月 10 日 交流だより①発行 ５歳クラス担任	交流だより①の発行	○５歳クラス担任が５月２日にＧ園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより①」にまとめ、Ｇ園に送付した。
５月 15 日 オープンカンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園職員６名	その日の保育を中心に語り合い	【話題になったこと】 ○「見守ること」は大切だが、人として大事なことは伝えたい。そのバランスが難しい。 ○幼児の対応に困った時は、周りの幼児が代案を考え、教えてくれることもある。 ○「附属だからできる」と思っていたが、子どもたちは変わらない。自分たちの園でもできそうだ。
５月 15 日 研修 各クラス担任、養護教諭	これまでの保育の振り返り	○これまでの保育をクラスごとに振り返り、各クラスの実態とともに紹介した。他園とつながったことによって更新された保育観が、どのように現場で生かされているかを共有した。 ○第１回研究保育に向けての計画を再確認した。

５月 16 日 交流（参観） ４歳クラス担任	Ｂ園参観、合同研修	○４歳クラス担任がＢ園を参観した。 ○幼児が遊んでいる様子をよく見て、タイミングのよい声かけや援助をしていくことが大切だと捉え直した。 ○幼児の製作物や、外へ出掛ける時に持って行くための手づくりバッグの置き場の工夫など、環境構成について捉え直した。
５月 24 日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究保育を終えての情報共有 今後の研究の見通しの確認	○研究保育の際に研究協力者と協議した内容について共有した。 ○今後の交流のもち方について確認をした。互いの園の研修に参加できるように、協力園や大学の先生に案内することとした。
５月 29 日 お出かけカンファレンス 各クラス担任、副担任、教育補佐員、他園保育者７名	Ｇ園参観	○５歳クラス担任がＧ園を参観した。参観した際に撮影した写真をもとに、幼児の姿や育ち、保育者の援助についての気付きを資料にまとめた。 ○カンファレンスでは、環境構成について、気になる幼児をどう支えるかについて、交流だよりについて話題になった。
６月３日 研修 各クラス担任、養護教諭	今後の交流についての確認	○８月までの交流について、日時や内容、参加者について確認した。一覧表にまとめ、案内することとした。 ○研究会の案内はがきや園紹介のパンフレットの検討日程を確認した。
６月 11 日 交流（参観） ３歳クラス担任	Ｃ園参観	○３歳クラス担任が、Ｃ園を参観した。 ○幼児理解の大切さ、ありのままを受け入れることの大切さを実感した。幼児の思いを尊重し、実現するためにどうするべきかを考え、それぞれに合った時間や場所を保障し、保育者も楽しみながら生活を共にしたいと捉え直した。
６月 11 日 研修 各クラス担任、養護教諭	おうちえんの活用についての検討 研究会について	○自園の取組を情報発信する手段としての「おうちえん」の活用について検討した。関係者にＱＲコードを配付し、交流の様子やカンファレンスの話題などを発信していけそうだという「おうちえん」利用の可能性について確認した。 ○研究会の講話の演題、講師の先生との打合せ内容について確認した。
６月 12 日 オープンカンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園職員５名	その日の保育を中心に語り合い	【話題になったこと】 ○運動会に向けてのダンスや玉入れの様子について。 ○片付けの時間がたっぷりあり、子どもたちの気持ちを聞きながら気持ちを向けている。 ○思ったことを伝え、言ったことが叶う経験が大切である。 ○自分でやることで分かることがある。あまり口を出さず、見守ることの大切さが分かった。
６月 24 日 交流だより②発行 ４歳クラス担任	交流だより②の発行	○４歳クラス担任が５月 16 日にＢ園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより②」にまとめ、Ｂ園に送付した。
６月 25 日 交流（参観、研修） ４歳クラス担任	Ｂ園参観、研修に参加	○４歳クラス担任がＢ園を参観し、研修に参加した。 ○自分で道具を選び、根気よく虫探しをする幼児、赤と青の色水を混ぜたらできた紫色の色水に驚く幼児の姿から、同じ目線に立って幼児に共感する気持ちを大切

		にしようと捉え直した。 ○合同研修会では、主体的な保育のあり方、職員全体で保育をする大切さについて話題となった。
６月 26 日 お出かけカンファレンス（参観、リモート） 各クラス担任、副担任、教育補佐員、養護教諭、他園保育者 10 名	Ｈ園参観、語り合い	○３歳クラス担任が、Ｈ園を参観した。 ○本園の職員とオンラインでつないで語り合いを行った。保育者が見守る場面とかかわる場面のバランスや、子ども主体の保育では、どんなことに気を付けて声かけをしているか、環境構成等について話題になった。
６月 28 日 交流（参観） ５歳クラス担任	Ｋ園参観	○５歳クラス担任がＫ園を参観した。 ○子どもたちが使う言葉「子ども語録」を大切に使っている保育者の姿から、子どもの言葉に感動する心、子どもの言葉の意味をこれまで以上に考えるきっかけとなった。
７月８日 交流だより③発行 ３歳クラス担任	交流たより③の発行	○３歳クラス担任が６月 11 日にＣ園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより③」にまとめ、Ｃ園に送付した。
７月 10 日 オープンカンファレンス 各クラス担任・副担任、教育補佐員、他園職員７名	その日の保育を中心に語り合い	【話題になったこと】 ○砂場で、石けんを使った泡風呂をつくりたいという子どもや、蝉を捕るためにホースで水を出している子どもにどのように対応するとよいか。 ○子ども主体の保育、丁寧な保育を目指しているが、「先生やって」と言われた時、どこまで手伝うとよいのか、迷いがあることについて。 ○コンサートを開きたいという子どもの思いをみんなで支える職員のチームワークの大切さ、みんなが同じ方向を向いていてこそ、よい保育につながる。
７月 11 日 交流（合同保育） ５歳クラス、Ｃ園職員４名	Ｃ園との合同保育	○Ｃ園５歳クラス 23 名、保育者４名が本園に来園した。 ○Ｃ園保育者と合同で保育をした。
７月 17 日 お出かけカンファレンス 各クラス担任、他園保育者４名	Ｉ園訪問	○各クラス担任が、Ｉ園を訪問した。カンファレンスの前半は、本園職員が参観での気付きをクラスごとに語り、後半は全員で、その日の保育や普段考えていることについて語り合った。 ○担任と補助の先生との連携、一人で対応することの難しさ、異年齢が混ざったクラス運営での悩みなどが話題になった。
７月 22 日 交流だより④発行 ５歳クラス担任	交流だより④の発行	○５歳クラス担任が６月 28 日にＫ園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより④」にまとめ、Ｋ園に送付した。
７月 24 日 研修 各クラス担任、養護教諭	２学期以降の交流についての検討	○１学期のカンファレンスの成果と課題について振り返った。多くの声がかかり頼りにされていることが成果として挙げられるが、継続的なつながりを考えると、今後は市内の園との交流をメインに行っていきたい。園同士のつながりに、小学校にも入ってもらうための方法について検討した。２学期以降のカンファレンスの予定を確認した。

７月 25 日 研修 各クラス担任	交流についての気付き	○これまでの交流を振り返り、その成果について検討した。継続して行うことにより、職員の保育観が耕されており、多様な視点で幼児をみることができるようになってきた。また、保育についての自信や安心、喜びや楽しみ等にもつながっていることが見えてきた。
７月 25 日 交流だより⑤発行 ３歳クラス担任	交流だより⑤の発行	○３歳クラス担任が６月 26 日にH園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより⑤」にまとめ、H園に送付した。
７月 24 日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究の進捗状況の確認と、今後の取組の検討	○これまでの取組から、地域の園からのニーズがあることが分かった。同じ園との複数回のつながりを大切にしていくこと、地域の限定も視野に入れること、小学校とのつながりも意識すること等を確認した。 ○２学期のカンファレンスの日程調整を行った。
７月 25 日 研修 各クラス担任	研究の成果についてのまとめ	○継続した交流から見えてきたことについて検討した。それぞれの取組が自信や喜び、安心や実感につながっており、自身の「保育観の耕し」となっていることが共通認識として挙げられた。
７月 31 日 交流だより⑥発行 ４歳クラス担任	交流だより⑥の発行	○４歳クラス担任が６月 25 日にB園を参観した歳の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより⑥」にまとめ、B園に送付した。
８月１日 お出かけカンファレンス 各クラス担任、副担任、他園保育者 10 名	J 園参観、語り合い	○各クラス担任と副担任が、J 園を訪問した。カンファレンスの前半は、本園職員が参観での気付きをクラスごとに語り、後半は全員で、その日の保育や普段考えていることについて語り合った。 ○「遊びの充実」が大切であるという気付き、幼児の思いが異なる時の援助の仕方、安全面への配慮などについて話題になった。
８月２日 お出かけカンファレンス 各クラス担任、副担任、他園保育者 13 名	B 園参観、語り合い	○各クラス担任と副担任が、B園を訪問した。カンファレンスの前半は、参観での気付きをクラスごとに語り、後半は２つのグループに分かれて、語り合った。 ○自分の思いを表現することが苦手な幼児への対応、職員の連携、同じ目線で楽しむことを大切にすることなどが話題になった。
８月６日 オープンカンファレンス 各クラス担任、他園職員５名、小学校職員１名	日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○判断に困る時の対応について。 ○「この子はこうしたい」という思いに気付き、否定をしないことが大切である。 ○大人が「こんなことを？」と思うようなことでも、子どもがやってみたいということを実現できるようにしたい。生活の中にも環境構成をすることが大切。 ○子どもの生活に近い遊びはわくわくする。子どもの気持ちを大切にする活動をしたい。 ○子どもたちが主役である。「なぜ座らない」を「なぜ立っているのか」と捉え、その子なりの理由をそれぞれ考えていきたい。 ○小学校と園とのつながりについて。「主体的な保育」ということに迷子になっている。小学校を見据えると「主体的」というのはなかなか難しい。

８月 20 日 研修 各クラス担任、研究協力者	研究会のプレゼン検討	○今回のプレゼンの軸となる部分をよく検討すること、事例の入れ方についてご指導いただいた。 ○今年度の取組がどのように保育の中で還元されたかが大切となる。手応えについて、再度検討をすることを確認した。
８月 21 日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究会のプレゼン検討	○オープンカンファレンス、お出かけカンファレンスについて、参加人数やその内容などを分かりやすくまとめることにした。 ○担当箇所を決め、役割分担を行った。
８月 30 日 研修 各クラス担任、養護教諭、研究協力者	研究会のプレゼン検討	○概要についての検討を行った。取組を通して、誰がどのように感じたのかという職員の実感があるとよいこと、成果に当たる部分の整理をするとさらに分かりやすくなることをご指導いただいた。
9 月 12 日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究保育を終えての振り返りと今後の研究について	○第２回研究保育を終え、各クラスの保育トークや協議内容について話題の共有をした。 ○遊びの後の片付けや、室内遊びについて、全体で検討する時間を設けることとした。
9 月 13 日 研修 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員	片付けについて 遊びの場について	○片付けの時間や方法について、現在の様子をふまえ、これからどのようにするとよいか検討した。 ○片付けの時間を長くとることは、園の文化の一つであり、気持ちの折り合いを付ける点ではよいが、それを逆手にとって遊び続ける幼児がいるのが現状である。これまでクラスごとにずらしていた片付け時刻を、一斉で行うことを試みることにした。 ○遊びの場の一つとして、出会いの広場の有効的な活用方法について検討した。
9 月 18 日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員	日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○愛着について、家庭でアタッチメントできなくても、園や学校などでもでき、キーパーソンの存在が大切である。 ○幼児のトラブルについて、どのように声をかけると、本人の心に響くのか。
10 月 2 日 オープンカンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園職員２名	日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○友達とのかかわりが 1 学期よりもだんだん増えてきたことによって、遊びの幅が広がってきた。 ○子どものやりたいことを、どこまで叶えることができるのか。 ○職員同士でゆっくりと話をする時間をとることが難しいので、意図的に行うとよさそうだ。
10 月 8 日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員	日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○生き物を踏みつぶしている幼児がいたら、どのように声をかけるか。 ○園で拾った栗をみんなで分けることや、園の土を使った粘土遊びなど、よい文化を伝承していきたい。
10 月 16 日 お出かけカンファレンス（参観、リモート 各クラス担任・副担任	M園参観と語り合い	○５歳クラス担任が、M園を参観した。 ○本園の職員とオンラインでつなぎ語り合いを行った。 【話題になったこと】 ○子どもの思いを最大限に生かそうとする職員の連携について。 ○子どもの主体性を支える保育について

10月17日 交流（参観） ５歳クラス担任	N園参観	○５歳クラス担任が、N園を参観した。 ○園の垣根を越えた視点を大切にする、アンケートの工夫、進行役を回す、広く取組を公開するなど、本園で実施するカンファレンスを捉え直すきっかけとなった。
10月28日 交流（リモート） ３歳クラス担任、５歳クラス担任、養護教諭	O園と互いの研究内容についての語り合い	○O園と本園の職員をオンラインでつなぎ、語り合いを行った。 ○互いの研究内容について紹介し、進捗状況を語り合った。
10月28日 交流だより⑦発行 ５歳クラス担任	交流だより⑦の発行	○５歳クラス担任が10月17日にN園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより⑦」にまとめ、N園に送付した。
11月６日 お出かけカンファレンス（リモート） クラス担任、他園保育者４名	I園と日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○発表会に向けての取り組み方について情報交換を行った。気持ちが高まらなかったり、切り替えが難しかったりする幼児への対応について。 ○廃材を使った工作遊びについて、どのような廃材を集めるとよいか、またつくったものを紹介するための方法についての情報交換を行った。
11月６日 交流（参観） ５歳クラス担任	A園参観	○５歳クラス担任がA園を参観した。 ○製作の時間も、ただ作品が完成することだけを目的にするのではなく、一人一人の育ちを願い、支えていくことが大切であることを捉え直した。
11月13日 オープンカンファレンス 各クラス担任、副担任、養護教諭、他園保育者２名	日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○担任、副担任だけではなく、全ての職員が子どもたちのために保育に携わっている。「自分らしさ」を大切にして、保育することができればよいのではないか。 ○全員同じことができなくても、心配することはない。今、その子にどのように関わっていくかが大切なのではないか。
11月15日 交流（参観） ５歳クラス担任	O園参観	○５歳クラス担任がO園を参観した。 ○言葉を交わすことだけが「かかわり」ではなく、一人一人が遊びに夢中になることで自然とかかわりがうまれるのではないかと捉えた。
11月25日 交流だより⑧発行 ５歳クラス担任	交流だより⑧の発行	○５歳クラス担任が11月15日にO園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより⑧」にまとめ、O園に送付した。
12月６日 研修 各クラス担任	研究冊子の検討	○今年度の研究冊子作成について、ページ割と分担を決めた。 ○今年度の成果として、いくつかの事例を写真と共に紹介することを確認した。
12月９日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究冊子の検討	○冊子に載せる事例の候補をいくつか挙げて検討をした。
12月11日 オープンカンファレンス 各クラス担任、副担	日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○他のクラスからガムテープを持ってきたのだと、嘘をついてしまった子へどのように声を掛けるとよいか。 ○戦い遊びをしている子どもたちについて。危ないから

任、養護教諭、教育補佐員、他園保育者２名		禁止をするのではなく、場を決めること、ルールを決めるとよいのではないか。
12 月 11 日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究冊子の検討	○今年度の研究の成果と課題について、交流の４つの視点（ハブとしての役割、つながるよさの実感、保育の捉え直し、持続可能）を中心に検討した。 ○冊子作成までの日程について確認した。
12 月 12 日 交流（参観） ４歳クラス担任	Ｂ園訪問	○４歳クラス担任がＢ園で合同保育、カンファレンスを行った。 ○遊びの中で喜びや悔しさなど、多様に心を動かすような経験をするとが大切だと感じた。また、その心の動きを支えるための職員の役割分担は欠かせないと感じた。
12 月 12 日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究冊子の検討	○冊子に掲載する６つの事例について、内容を検討した。
12 月 13 日 交流だより⑨発行 ５歳クラス担任	交流だより⑨の発行	○５歳クラス担任が11月６日にA園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより⑨」にまとめ、A園に送付した。
12 月 13 日 交流（参観） ３歳クラス担任	Ｐ園参観	○３歳クラス担任がＰ園を参観した。 ○幼児と共に生活をつくる仲間となり、うれしさや悔しさなどの共有する仲間であるからこそ、信頼関係がうまれ、幼児が安心して過ごせるのだろうと捉えた。
12 月 16 日 研修 各クラス担任、養護教諭	今後の研究の方向性について	○１年次、２年次の研究の成果と、今後どのように研究を進めていくかを検討した。「つながるしくみ」については整ったので、交流したことが子どもたちのためにどう生きたかを検証する必要があることを共有した。
12 月 17 日 研修 各クラス担任、養護教諭	今後の研究の方向性について	○Ｒ７年度の研究の方向性について検討した。 ・他園から学ぶことは今後も大切にしていきたい。 ・保育の質が向上したことを伝えたいが、検証することが難しい。
12 月 18 日 オープンカンファレンス 各クラス担任、副担任、養護教諭、教育補佐員、他園保育者２名	日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○登園後、支度が終わった子どもたちが鬼ごっこをして走る姿があった。そこで、遊戯室で音楽をかけて、みんなで走ることを楽しむとよいのではないか。 ○環境構成について、それぞれのクラスで何をどのように提供しているかを確認した。来年度以降の参考にするため、保育室の様子を写真に撮っておくとよい。
12 月 18 日 研修 各クラス担任、養護教諭、	研究冊子の検討	○それぞれのページの内容やページ割り、「広がる」「深まる」をどのように示すかを検討した。
12 月 19 日 交流（リモート） 各クラス担任、養護教諭	Ｏ園と互いの研究内容についての語り合い	○O園と本園の職員とをオンラインでつなぎ、語り合いを行った。 ○それぞれの研究について、進捗状況や現在抱えている課題について語り合いを行った。

12 月 19 日 研修 各クラス担任、養護教諭	研究冊子の検討	○これまでの交流が保育に生きていることが伝わるような内容にすることを共有した。 ○今後の冊子作成計画について確認をした。
12 月 20 日 交流だより⑩発行 ３歳クラス担任	交流だより⑩の発行	○５歳クラス担任が 12 月 13 日にＰ園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより⑩」にまとめ、Ｐ園に送付した。
12 月 23 日 研修 各クラス担任、養護教諭、研究協力者	研究冊子の検討 次年度の研究に向けて	○今年度の研究の目的や成果を分かりやすく、受け取る側へのメッセージ性のあるものにするとよいこと、他園の方への思いがもっと入るとよいこと等をご指導いただいた。 ○今年度の研究の成果を、来年度どのように生かすとよいかについて検討した。
１月７日 交流だより⑪発行 ４歳クラス担任	交流だより⑪の発行	○４歳クラス担任が 12 月 12 日にＢ園を参観した際の気付きやその気付きから自分の保育に取り入れた実践を「交流だより⑪」にまとめ、Ｂ園に送付した。
２月５日 オープンカンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園職員１名	日頃の保育についての語り合い（子ども主体の行事について）	【話題になったこと】 ○お楽しみ発表会を次の週に控え、それぞれのクラスの子どもたちの遊びの様子、発表会での姿について話をした。 ○子どもたちが本当にしたいことを読み取り、見せたいという気持ちを高めていくことが大切なのだろう。
２月 12 日 オープンカンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭、教育補佐員、他園職員４名	お楽しみ発表会後の語り合い	【話題になったこと】 ○本園の発表会（３歳クラス、４歳クラス）を参観した感想、それぞれの園の発表会の様子、子どもたちが主体の行事のつくり方。 ○観客がいることで緊張してしまったり、興奮してしまったりする子への対応について。
２月 14 日 カンファレンス ５歳クラス担任、他園職員９名	お楽しみ発表会後の語り合い	【話題になったこと】 ○本園の発表会（５歳クラス）を参観した感想、当日までの環境構成や子どもたちへの援助、全員にスポットライトが当たるような進め方などについて。
２月 19 日 オープンカンファレンス 各クラス担任、副担任、養護教諭、教育補佐員、他園保育者１名	日頃の保育についての語り合い	【話題になったこと】 ○一つの行為が、Ａには優しいがＢには優しくないということについて ○発表会は終わったが「今日も発表会をしたい」という子どもたちの姿、発表会後にこれまでしていなかった遊びに挑戦する姿、新たな友達とかかわる姿が見られた。友達のしていることに興味をもつ様子からも、発表会が生活にうるおいを与えている。 ○音楽の力について。音楽とは距離感が大切である。 ○職員の声の掛け方や、タイミングについて。 ○大切なことを上の学年が教える有効性。
３月 17 日 研修 各クラス担任、養護教諭	次年度の研究に向けての検討	○今年度は、つながる保育のしくみを整えてきた。来年度は「心を動かす子ども」「幸せをつくる子ども」などの視点で研究を進め、これまで整えてきたつながりの中で、話題として取り上げていくことを確認した。

＜３歳クラス　Ⅰ期　４月＞　全職員で安心感を支える

これまでの保育の様子

３歳クラスの幼児は、家族と離れて遊んだり、集団で生活したりするのは初めての経験である。入園してすぐの頃、砂場で穴を掘ったり、花を摘んだりして、園での遊びに気持ちが向く幼児がいる一方で、家族と離れる不安から、泣きながら１日の遊びの時間を終える幼児もいた。

自分の好きな遊びを見付けたり、してみたいことに挑戦したりするには、その子にとって園が安心できる場所でなくてはならない。幼児一人一人の様子をよく読み取り、幼児が安心感をもって園生活を送ることを第一に考えていこうと、副担任と思いを共有していた。幼児のありのままを受け入れ、幼児との信頼関係を築くことで、幼児の気持ちが安定し、気持ちが遊びに向くのではないかと考えた。そのうえで、遊ぶ楽しさから、園生活に慣れていけるように、３歳保育室の目の前にある砂場には、プラスチック製のスコップなどを置いたり、小さめの砂山をつくっておいたりした。また、なべや皿などの料理道具を近くのテーブルに置き、すぐに遊び出せる状態にすることで、外遊びに興味をもてるような環境構成を行っていた。

４月 10 日

登園後、母親を追いかけ、入り口フェンスまで行く。
A児：「ママがいい。ママがいい」
教育補佐員：「そうだよね。ママがいいよね」
A児：「ママの所に行く。開けて」
教育補佐員：「ママの所行きたいよね」
A児：「開けて。開けて」
教育補佐員：「ママの車、見てくる？」
A児：「やだやだ。開けて」
教育補佐員：「そうだよね」
教育補佐員は担任にA児の様子を伝えに来る。
A児：「開けて、開けて」しばらく、その場で泣いている。
うみ組ａ児：「どうしたの？」
A児：「開けて」
うみ組副担任：「開けたいよね。どうやったら開くんだろう」
うみ組ａ児：「うーん」カギを動かしてみる。
A児は、じっとその様子を見ている。
うみ組ａ児：「何か、道具があったらいいのかな」ままごと道具の入っているかごを見に行く。
A児もうみ組ａ児についていく。かごの中に小さなスコップを見付け、それを持って砂場に行き、遊び始める。

入園して２日目のこの日、A児は母親と離れる不安から、母親を追いかけて入り口フェンスまで行った。担任は、他の幼児の受け入れをしていたため、A児に付き添えずにいたが、前日のA児の様子を副担任や教育補佐員など他の職員と共有していたため、教育補佐員がA児の後ろをついていく様子を見て、見守りを任せることにした。受け入れが終わった担任は、他の幼児と支度を済ませ、外に出た。教育補佐員は、A児の思いに共感し、駐車場を見てくることを提案したが、まだA児の気持ちが落ち着かないことを担任に伝えた。担任がA児の様子が見えるところまで行くと、うみ組ａ児とうみ組副担任がA児とやりとりしているところが見えたため、少し離れたところからA児の様子を見守った。しばらくすると、A児はうみ組ａ児と一緒に砂場で砂を掘り始めた。

入園式の次の日、幼稚園で遊ぶことに期待感をもち、楽しみに来ている幼児がいる一方で、家族と離れることに不安を抱き、泣いて過ごす幼児も数名いた。そこで担任は、この日の幼児の様子から、どの幼児も安心して過ごせるように、担任、副担任だけでなく、他の職員にも声をかけ、特に登園直後の時間帯は３歳クラス児の様子を見守ってほしいとお願いしていた。前日のうちに、担任の思いを他の職員と共有していたことで、担任が幼児の受け入れで手が離せない状況でも、他の職員がA児の様子に気付き、寄り添い、思いに共感してくれることにつながったと考える。また、初めにかかわった教育補佐員だけでなく、その後近くで様子を見守り、援助に入ったうみ組副担任も同様に、A児の思いを受け止め、一緒に考える言葉がけをした。A児とかかわった全ての職員が同じ方向性で援助していることが、A児の心の安定につながり、うみ組ａ児

と砂場に行くきっかけになったのではないかと考える。担任は、今後も副担任だけでなく、他の職員と情報共有しながら、A児の安心感を支えつつ、A児の好きな遊びは何かを読み取り、幼児理解を深めようと援助の方向性を確認した。

４月 11 日

登園後、A児は母親と離れるのが寂しく、泣きじゃくる。泣きながら、入り口フェンスまで行く。
A児：「ママに電話して」
うみ組副担任：「ママに電話してほしいの？」
A児：「ママに電話して」
うみ組副担任：「じゃあ、ママに電話してくれる先生の所に行こう」
A児：「うん」うみ組副担任と手をつなぎ、そら組テラスまで来る。
うみ組副担任：「あっ、電話してくれる先生いたよ」
A児：「うん」
うみ組副担任：「Aちゃん、ママに電話してほしいんですって」
担任：「あら、そうなの？」
A児：「ママに電話して」
担任：「うん。そっか。電話してほしいんだね」
A児：「ママに電話して」
担任：「Aちゃん、電話してママになんてお話するの？」
A児：「ママ、きて」
担任：「そっか。お迎えにきてほしいんだね」
A児：「電話して」
担任：「わかったよ。お部屋に電話あるから、電話してこよう」
A児：「うん」保育室へ戻る。
担任：「ママに来てってお話すればいいの？」
A児：「うん」
担任：「わかったよ。じゃあ、電話してみるね」保育室の電話機で、電話するふりをする。
担任：「Aちゃんのママですか？Aちゃんがママに来てってお話ししてほしいって言ってるんで、電話しました。はい。Aちゃん、遊んで待っていていいんですか？はい、分かりました。では、待っていますね」受話器を戻す。
担任：「Aちゃん、ママがもうすぐ来るから遊んで待っててていいんだって。やったね」
A児：「じゃあ、お山つくる」
担任：「うん。お山つくろう！ママ、びっくりしちゃうね」
A児：「うん！」自分で靴を履き替え、砂場へ向かう。

この日も登園後、A児は泣きながら入り口フェンスに向かった。入り口フェンス近くにいたうみ組副担任がA児に声をかけた。すると、A児は「ママに電話してほしい」と伝えたため、うみ組副担任は、担任とつなぐ援助をした。担任は、うみ組副担任と一緒に保育室へ戻ってきたA児が電話をしてほしいことを知り、一瞬迷った。緊急な内容ではないために、実際に母親に電話することはできない。しかし、A児の思いを受け入れることが、A児の安心につながるのではないか。そうすることが、担任との信頼関係を結ぶことにもつながるのではないかと考え、電話するふりをすることにした。うその電話でごまかすことへの後ろめたさもあったが、今はA児にとって母親とつながっている、いつでも母親が迎えに来てくれるという安心感が必要だと考えた。さらに、事務室へ行き、電話することも考えたが、今はA児の前で電話し、A児が実際に母親と話をしている内容（相手にはつながっていないが）を聞くことで、安心感につながるだろうと考え、保育室にある内線用の電話で電話をするふりをした。その時、A児の気持ちが遊びに向くように、遊んで待っていると母親が来てくれることを話した。

振り返りタイムでは、このやりとりを副担任と共有した。電話するふりをしたことで、A児は安心して遊び始めたのではないかと振り返った。電話しているふりをしたことで幼児にうそをついているようで、後ろめたい気持ちもあったが、今はA児が安心して園で過ごせることが第一と考え、今後もA児が電話してほしいと要求したときには、状況に応じて、それを受け入れていこうと方向性を確認した。また、保護者にもこの日の電話の様子やその後の遊びの様子を伝え、電話するふりをすることで幼児が安心して遊んでいること

に理解を得た。

４月 24 日

A児：「先生、葉っぱ採りに行くよ」担任の手を引く。
担任：「うん。行こう、行こう。今日もいっぱいと採れるかな？」
　担任の手を引き、桜の木の下へ行く。
A児：「あった。はい」担任のエプロンのポケットに採った葉っぱを入れる。
担任：「ありがとう」
　繰り返し葉っぱを採り、担任のポケットに入れる。
C児：「先生、こっち来て」
担任：「はーい。Aちゃん、ちょっと見てくるね。Cくん、どうしたの？」
　A児も担任に付いてくる。
C児：「これ、なに？」畑のジャガイモの葉っぱを指さして聞く。
担任：「なんだろうね」
C児：「葉っぱだね」
担任：「そうだね。」担任は幼児の目の前にカエルがいるのを見付け、立ち位置を変え、カエルに目線を送る。
A児：「あっ！」カエルに気付く。
D児：「何？」
A児：「カエル！」
D児：「えっ！どこどこ？」
A児：「ここ！」指をさす。
D児：「ホントだ！捕まえて！」手を出してみるが、触れない。
A児：「そうだ！」うみ組テラスの方に向かって走っていく。
D児：「どうしたのかな？いいこと、考えたのかな？」
担任：「どうしたんだろうね」
　A児が手にシリコンカップを持って、走って戻ってくる。
A児：「どこ行った？」
D児：「ここ、ここ！」
　A児がカエルの上にシリコンカップをかぶせ、手で捕まえる。
担任：「わぁー！Aちゃん、すごーい！捕まえられたね」
D児：「すごーい！」拍手する。
担任：「やったね！」
　シリコンカップに入ったカエルを手に持ち、近くを通りかかったやま組担任に見せる。
やま組担任：「これ、なあに？」
A児：「これ、カエル」
D児：「カエルだよ。Aちゃんがつかまえたの」
やま組担任：「すごいね。やったね！」

　この頃になると、A児は登園後すぐに遊びに向かうようになっていた。毎朝、桜の木の葉っぱを採ることから遊びがスタートした。朝の支度が終わると、担任の手を引き、桜の木の下へ行くと、葉っぱが採れそうな位置に自分でベンチを動かし、葉っぱを採り始めた。採った葉っぱは担任のエプロンのポケットに入れ、たまっていくことを喜んでいた。この日、葉っぱ採りが一段落したところで、担任が別の幼児に呼ばれ、その場を離れ、畑の方に向かうと、A児もD児と一緒に畑にやってきた。すると、担任はそこに一匹のカエルがいることに気付いた。ここで、担任がカエルの存在を伝えることもできたが、自分で見付けることが幼児の喜びにつながると考え、担任はカエルが幼児の目に入るように立ち位置を変え、カエルに目線を送った。すると、A児がカエルに気付いた。A児とD児でカエルを捕まえようとするが、手で触ることに抵抗があったのか、なかなか捕まえられない。しばらくして、A児が何かを思い付いたのか１人でうみ組テラスの方に向かっていった。担任は、この経験がA児にとって遊びのきっかけになるかもしれないと考え、A児がその場を離れている間、カエルを見失わないように目で追っていた。すぐに、A児はシリコンのカップを手に持って、走って戻ってきた。担任は、A児がカエルを捕まえるために柔らかく、自由に形を変えられるシリコンカップを持ってきたことに驚き、その様子を見守った。すると、A児はカエルの上にシリコンカップをか

ぶせ、シリコンカップの中にカエルを入れると、カエルを優しく包むようにして、手のひらにのせた。担任は、そのうれしそうなA児の表情を見て、「やったね！」とA児と一緒に喜んだ。その後、A児は、そのシリコンカップの中に入れたカエルを大切そうに手で包み、園庭を歩き、出会ったやま組担任、そら組副担任など、多くの職員や幼児に自慢げに見せて回った。

振り返りタイムでは、A児がカエルを捕まえた経験が大きな自信につながったのではないかと振り返った。A児はこの日の遊びの多くの時間、捕まえたカエルを手に持ちながら園庭を歩き回っていた。自分で考え、工夫して捕まえた経験が、このカエルを大切にする姿につながったと考える。また、園庭で出会った職員や他の幼児に自分から声をかけ、カエルを自慢げに見せていた。A児が自分から他者にかかわろうとする姿が見られたことをうれしく思い、副担任と共有した。この日を境に、朝の支度が終わると、担任がいなくても自分でやりたいことを見付け、遊び始めるようになった。カエルを捕まえた経験が自信になり、安心して遊べるようになったのではないかと捉えた。

考察

Ｉ期は「教師とかかわりながら自分の安定できる場を見付けていく時期」である。幼児にとって幼稚園での生活は、初めての集団生活であり、初めて経験する環境である。教師と信頼関係を築き、安心して園生活が送れるようになることが第一だと考え、無理に幼稚園の流れにのせようとするのではなく、幼児の思いに寄り添っていこうと副担任と共有していた。しかし、一人一人の幼児の思いに寄り添うためには、担任・副担任だけでは難しい面もある。特に、入園直後のこの時期は、担任・副担任だけでなく、教育補佐員、他クラスの職員、養護教諭、園長など全職員で、新入園児を見守り、支えることで幼児の安心感につながるのではないかと考え、協力をお願いしていた。A児にとっては、かかわる職員が全て同じ方向性で援助していたことが、早い段階で安心感をもち、気持ちが安定することにつながったのではないかと考える。

また、遊びの中で喜びを見付け、自分の力でカエルを捕まえたことが、A児にとって大きな自信になったと考える。気持ちが安定すると、遊びを楽しむことができるようになる。遊びを楽しむことがさらに気持ちの安定につながる。気持ちの安定と遊びの楽しみがよい循環になっているのではないかと捉えた。今後も、幼児一人一人の思いを読み取り、遊びを通して、安心して過ごせるように援助していきたい。

＜３歳クラス　Ⅱ期　６月＞　子どもの言葉にならない思いを読み取ることを大切に、遊びを支える

これまでの保育の様子

入園から３か月が経ち、幼児一人一人が自分のやりたいことを見付け、遊ぶ姿が見られるようになってきた。同じクラスの幼児と「〇〇しよう」と誘い合って遊んだり、「貸して」「いいよ」などと言って、道具のやりとりをしながら、一緒に遊んだりしていた。園庭や園舎裏での生き物探しでは、年上の幼児と一緒に生き物を探したり、捕まえた生き物を見せてもらったりする姿が見られた。「捕まえた虫を入れ物に入れたい」、「集めた木の実を入れ物に入れたい」という思いをもつ幼児も出てきたため、幼児の思いを聞きながら、プラスチック容器やビニール袋を提供できるように準備し、環境構成を更新してきた。

６月になると暑い日が続き、水を使った遊びを楽しむ幼児が増えてきた。水盤の近くに雨どいやバケツを置き、自分たちで扱えるように環境を更新した。Ｅ児は、出会いの広場の前の水盤に、雨どいを置いて水やおもちゃを流したり、バケツに水を溜めたりして遊んでいた。

６月 12 日

自分のかぶっていた帽子をバケツの中に入れ、濡れた帽子をアスファルトの地面にたたきつけるように投げる。その帽子を拾って、またバケツの中に入れることを繰り返す。
担任：「おもしろいね」
Ｅ児：「うん」
濡れた帽子を振り回す。
Ｅ児：「びちょびちょ！」
担任：「本当だ。びちょびちょ！」
濡れた帽子を土の地面に投げつける。
Ｅ児：「砂！」
担任：「本当だ。砂がついたね」
汚れた帽子をバケツに入れ、くるくる混ぜる仕草をする。
Ｅ児：「きれいになった！」
帽子を担任に見せる。
担任：「本当だ。すごいね。お水に入れるときれいになるんだね」
帽子に砂を付けては、バケツで洗うことを繰り返す。

Ｅ児はこの日、朝から水盤で水を使った遊びを楽しんでいた。担任は、園庭に出て他の幼児が遊び始めたのを確認し、水盤の近くに戻ってくると、Ｅ児は自分の帽子を水の入ったバケツの中に入れて遊んでいた。バケツから濡れた帽子を取り出し、嬉しそうに見つめたＥ児は、その帽子をアスファルトの地面にたたきつけるように投げた。Ｅ児は、ケラケラと笑い声をあげながら、投げては拾ってバケツに入れ、また投げては拾ってを繰り返していた。担任は、Ｅ児が帽子を投げているのを見て、一瞬止めようかとも迷ったが、Ｅ児は水を含んだ帽子の重さやそれを投げた時のバシャっという音、その感触を楽しんでいるのではないかと読み取り、「おもしろいね」と言いながら、一緒にその様子を楽しむことにした。Ｅ児がこんなにケラケラと笑い声をあげているのが初めてだったため、担任はうれしくなり、わくわくしながらＥ児の楽しみを見守った。しばらくすると、Ｅ児はその帽子を土の方へ向けて投げ、砂で汚れた帽子を担任に見せた。担任が「砂がついたね」と言葉をかけると、Ｅ児はその汚れた帽子をバケツに入れ、バケツの中の水をくるくると手でかき混ぜる仕草をした。このとき、担任は昨年度の交流で「洗濯」を遊びとして捉え直した事例を思い出し、もしかしたらＥ児は洗うことを楽しんでいるのではないかと捉えた。

この日の帰りに、Ｅ児が砂で汚れた帽子を洗っていたことを母親に伝えると、家でも一緒に靴を洗った経験があることを教えてもらった。担任は家での経験が幼稚園での遊びにつながっているのだと捉え、Ｅ児が家で経験してきたことを園でも試せるように環境を整えていこうと考えた。そして、この日の振り返りタイムでは、Ｅ児が「洗濯」をイメージして遊んでいるのではないかということを副担任と共有した。また、担任がＥ児がかぶっていた帽子をバケツに入れて遊んでいる姿を見て、その行動を止めるのではなく、その行動からＥ児のやりたいことや楽しみを読み取り、見守ったことで、Ｅ児の輝くような笑顔につながったと振り返った。そこで、次の日もＥ児がこの遊びを楽しめるように、汚れの分かりやすい白い布巾を水盤の近くに置いておくこと、いつもは足を洗うために使っているたらいを手の届くところに置いておくことを確認した。そして、この日の片付けの時間にＥ児が濡れた帽子の扱いに困っていたことを共有

し、E児の思いに合わせて、保育室にかけてある物干しを出せるように準備しておくことを副担任と共有し、環境構成を考えた。

6月13日

E児：「お洗濯！」近くに置いてあったたらいに気付き、水盤の近くまで持って行く。
担任：「いいの見付けたね」
E児：「うん」
　たらいに水を溜め、かぶっていた帽子や近くにあった布巾を入れ、
しばらく洗濯遊びを続ける。
E児：「これ、どうしよう」濡れた帽子を見せる。
担任：「びちょびちょだね」
E児：「びちょびちょで、お部屋に持って行けない」
担任：「どうしたらいいかね」立ち位置を変える。
E児：「あっ」物干しまで走って行き、帽子を洗濯ばさみではさむ。
E児：「これも」布巾を持って来て干す。

　この日、E児は登園後すぐに水盤に向かうと、通り道でたらいを見付け、水盤の水が届く位置まで運んで行った。その様子を近くで見ていた担任は、E児はこれまでの家庭での経験から、たらいに目が向き、遊びに使いたいという思いをもったのではないかと読み取った。E児は、水盤の近くに置いておいた布巾にもすぐに気付き、布巾を水でぬらしたり、土の汚れをつけては、洗ったりして遊んでいた。担任は、E児がたらいや布巾を使い、多様に試す姿から、E児がこの洗濯遊びに夢中になっていることを読み取り、この楽しみが続くことを願った。そして、前日の片付けの際に濡れた帽子の扱いに困っていたE児の様子を思い出し、この日も同じように困るのではないかと考え、これまで濡れた帽子や布巾を干すために、保育室にかけてあった物干しをE児の手の届く所にかけておくことで、洗った後に自分で干すこともE児の楽しみにつながればと願い、E児に気付かれないように、そっと手の届くところに物干しをかけておくことにした。しばらく遊んだ後、E児は濡れた帽子を持って、担任の所へ来ると、「これ、どうしよう」と濡れた帽子の扱いに困っていることを伝えた。担任は、E児の思いに共感し、「どうしたらいいかね」と一緒に考えながら、E児に物干しが見えるように立ち位置を変えることにした。E児は、「あっ」と物干しに気付き、物干しの方に駆け寄って行くと、帽子を洗濯ばさみではさみ、とても満足そうな表情を浮かべた。

　この日の振り返りタイムでは、E児にとってこの洗濯遊びが今の楽しみになっていることを副担任と共有した。たらいに水を溜め、帽子や布巾を洗う遊びを楽しんだ後、物干しが自分の手の届くところにあったことが、E児の楽しみの広がりにつながったのではないかと振り返った。教師から物干しを提示するのではなく、さりげなくE児の目線に入るような所にかけておいたことで、E児が自分で見付け、自分で洗濯した物を干すことにつながり、それがE児にとって自信になっているのではないかと考えた。さらにE児の楽しみが続くように、次の日の朝、乾いた布巾を物干しに干したままにしておくこと、たらい、物干し、布巾などはしばらく水盤の近くで使えるようにすることを副担任と確認した。

　次の日の朝、E児は「先生、乾いてる！」と乾いた布巾を手に持って、受け入れの保育室テラスまでやって来た。E児にとって、帰るときにはまだ濡れていた布巾が、次の日には乾いているという大発見につながり、心が動いた瞬間だったのではないかと捉えた。この後もE児がこの遊びに夢中になれるように、たらいや物干しをいつでも使えるようにしておこうと、環境を整えた。

6月20日

E児：「あれ？ない」
担任：「何がほしいの？」
E児：「お洗濯するやつ」
担任：「お洗濯するやつって？」
E児：「お水いれるやつ」
担任：「たらいのこと？」
E児：「そうそう！」
担任：「どこにあるんだろうね」
E児：「うみさん（5歳クラス）のところ」
担任：「そうだったね。行ってみる？」

Ｅ児：「うん」５歳クラスのテラスに向かう。
Ｅ児：「あった！」
担任：「これ、使いたいの？」
Ｅ児：「うん！」
担任：「持って行っていいのかな？」
　Ｅ児は周りを見渡し、５歳クラス幼児を見付け、じっと見つめる。
担任：「お話してみる？」
Ｅ児：「うん」
担任：「Ｅちゃんが、お話があるみたい」
５歳クラスａ児：「何？」
Ｅ児：「貸して」
５歳クラスａ児：「これ、使いたいの？」
Ｅ児：「うん」
５歳クラスａ児：「いいよ。終わったらまたここに戻してね」
　Ｅ児はうなずく。
担任：「Ｅちゃん、よかったね。ａちゃん、ありがとう」
　Ｅ児はうなずき、たらいを持って、３歳クラスの方へ運ぶ。水盤近くにたらいを置き、蛇口をひねって水を出す。水がたらいに入るように、たらいの位置を動かす。近くにいたＦ児が蛇口をさらにひねると、Ｅ児の頭に水がかかる。
Ｅ児：「びちょびちょになっちゃった」
担任：「大丈夫？」
　Ｅ児は濡れた帽子をとり、たらいに入れる。
Ｅ児：「お洗濯！」
　Ｆ児もかぶっていた帽子をとり、たらいに入れる。
Ｆ児：「お洗濯！」
　Ｅ児とＦ児は、たらいの中の水の流れをみつめる。
Ｆ児：「汚れがついてたから、これ、お洗濯しないと」
　Ｅ児は、たらいの中で浮かんでいる帽子を水の中に押す。
　しばらくして、Ｇ児が園舎裏のバーベキューごっこに担任を誘いに来る。
Ｇ児：「先生、バーベキューやってるから来て！」
担任：「わあ、楽しそう。どこどこ？」Ｇ児と一緒に園舎裏に行く。Ｅ児らも一緒に付いてくる。
　Ｅ児は、他の幼児と一緒に園舎裏でバーベキュー遊びを楽しむ。
Ｅ児：「お洋服、汚れちゃった」
担任：「本当だね。どうする？」
Ｅ児：「お洗濯！お洗濯すれば、きれいになる」
担任：「いい考えだね」
　Ｅ児は、走って水盤に向かう。
Ｅ児：「お洗濯！お洗濯！」
　蛇口をひねり、たらいに水を溜めて、着ていた服を脱ぎ、たらいの水の中に入れる。
担任：「きれいになるかな？」
　Ｅ児は、服をたらいの中でぐるぐるとかき回す。
Ｅ児：「きれいになった！」服をたらいから持ち上げる。
Ｆ児：「わたしも！」着ている洋服を脱ぎ、たらいに入れてかき混ぜる。

　この日、Ｅ児は登園すると洗濯をするためのたらいを探していた。いつも使っていたたらいは、他の幼児が遊びに使っていたために使える状態ではなかった。Ｅ児は以前、５歳クラスから借りたことを思い出し、担任と一緒に５歳クラスに貸してもらいに行った。Ｅ児はたらいを見付けたが、なかなか自分から５歳クラス児に声をかけられずにいた。その様子を近くで見ていた担任は、Ｅ児の洗濯に対する強い思いを読み取っていたので、自分から「貸して」と言えるような環境を整えることにした。これまでなかなか自分の思いを伝えようとすることのなかったＥ児が自分で「貸して」と５歳クラス児にお願いする様子から、Ｅ児の洗濯遊びに対する思いの強さを改めて感じた。担任は、遊びに夢中になることが、Ｅ児のかかわりにもつながったのではないかと、嬉しく思った。Ｅ児はたらいを貸してもらうと、自分で３歳クラス近くの水盤まで運び、

たらいに水を入れ、しばらく布巾や帽子を洗う洗濯遊びを楽しんでいた。担任はＥ児が、蛇口から出る水をたらいの中に溜めようと、たらいの位置を調整したり、たらいに溜まった水が渦を巻くように流れていくことを発見し、その水流にのせ、布巾を流したりしている様子を近くで見守っていた。

しばらくして、Ｇ児が園舎裏のバーベキューごっこに一緒に行こうと担任を誘いに来たタイミングで、Ｇ児と一緒にバーベキューごっこを見に行くことにした。その様子を見ていたＥ児も他の幼児と一緒に園舎裏のバーベキューごっこに仲間入りした。しばらくバーベキューごっこを楽しんでいると、Ｅ児が洋服の汚れに気付き、担任にそれを伝えに来た。担任が、「どうする？」と言葉をかけると、Ｅ児は「お洗濯！」と勢いよく答えた。担任は、そのときのＥ児の表情から「自分の服も自分で洗いたい」と洗濯に対する思いが高まっているのではないかと読み取り、一緒に走って水盤まで行った。水盤に着くと、Ｅ児はたらいに水を溜め、自分の着ていたＴシャツを脱ごうとした。担任は、屋外でＴシャツを脱ごうとするＥ児の様子を見て、「ここで脱いでも大丈夫か」「脱いだ後、Ｅ児の洗濯をどう支えようか」と瞬時に考え、Ｅ児の思いが高まっている今、存分に洗濯遊びを楽しんでほしいと願い、保育室から代わりのＥ児のＴシャツを持ってくることにした。Ｅ児のＴシャツを持って戻ってくると、Ｅ児はたらいに自分の服を入れ、洗濯をしていた。いつもなら自分で服を着るように促すところだが、このときはＥ児が洗濯に夢中になっている様子が読み取れたため、担任がＴシャツを着せることにした。Ｅ児は、Ｔシャツの入ったたらいの水をぐるぐるとかき混ぜるような仕草をした。それを見ていた他の幼児も自分の着ていたＴシャツを脱ぎ、たらいに入れると、ぐるぐるとかき混ぜる様子が見られた。

この日の振り返りタイムで、担任がＥ児の楽しみを把握し、アンテナを張っていたからこそ、Ｅ児の洗濯遊びが広がっていったのではないかと振り返った。教師が、幼児一人一人のそのときの楽しみを把握し、アンテナを張っておくことで、ちょっとしたきっかけを見逃さず、幼児の遊びを支えることにつながるのではないかと捉えた。これまで着替えの際には、教師に手伝いを求めていたＥ児だったが、このときには自分だけで汚れたＴシャツを脱いでいた。その様子からも、この洗濯遊びがいかにＥ児の楽しみになっていたのかが分かる。そんな瞬間を見ることができ、とても幸せな気持ちになった。

考察

Ｅ児の洗濯遊びは、２週間以上続く遊びになった。Ｅ児がこんなにもこの遊びに夢中になったのはなぜかと振り返ると、教師が子どもの表情や行動からその背景にある子どもの思いをどう読み取るかがとても大切だったのではないかと考えた。Ｅ児が自分の帽子をバケツに入れたり、投げたりしているとき、もし教師が制止していたとしたら、Ｅ児のこの姿は見られなかったかもしれない。教師が子どもの目線に立ち、子どもと同じ思いで子どもの遊びを捉えることが子どもの楽しみを支えることにつながるのではないかと考えた。特に３歳クラス児は、自分の思いを言葉で表現するのは難しい面もある。だからこそ、教師が幼児の表情やしぐさ、視線などちょっとした変化を見逃さないように、アンテナを張っておくことが大切である。さらに、担任だけでなく、他の職員や保護者等と連携を図り、幼児理解を深めることも大切なのではないかと考える。

また、子どもの思いを読み取った上で、その遊びの展開を想定し、環境を整えておくことも大切になってくる。今、目の前の子どもの楽しみは何なのか、何に興味をもっているのかをよく読み取りながら、次に子どもがやってみたいと思うことを想定し、場をつくったり、道具を準備したりするようにしてきた。そのことで、Ｅ児の「やってみたい」を支えることができたのではないかと考える。

また、このＥ児の洗濯遊びを肯定的に捉え、援助することができたのは、昨年度の他園との交流で他の職員がまとめた「交流だより」が頭に浮かんだからである。昨年度、他園との研修の中で、これまで遊びと捉えていなかった「洗濯」を遊びと捉えるようになったこと、どの子も好きなことに夢中になっているかという視点で子どもをみることの大切さが、「交流だより」を通して、園内で共有されていたことを思い出した。これからも、子どもの思いをよく読み取り、そのときの思いに寄り添った援助ができるように心がけていきたい。

＜３歳クラス　Ⅲ期　10 月＞　遊びを充実させることでかかわりを支える

これまでの保育の様子

夏休みを終えてまだ暑さが残る中、テントを設置したり、タープを張ったりして日陰をつくり、外遊びを楽しめるように環境を整えてきた。３歳クラス児は、水を使った遊びやバーベキューごっこなど思い思いの遊びを楽しむ様子が見られた。10 月になると少し暑さも落ち着き、気持ちよい秋晴れの中、外遊びを楽しむ幼児が多かった。生き物探しをして園庭を走り回る幼児、砂場で穴を掘って遊ぶ幼児など、自分のやりたいことを見付けて楽しんでいた。

この頃、担任は幼児同士で誘い合って、集まって遊ぶ姿が増えてきたことを感じていた。Ⅲ期は「好きな遊びをしながら、友達のいる場で遊ぶことを楽しむ時期」であり、「教師を介さなくても幼児同士で遊ぶ姿が見られるようになってくる」時期である。一人一人の遊びが充実してくると、自然と幼児同士のかかわりがうまれてくるのではないかと考え、まずは一人一人がやりたいことに夢中になって遊べるように幼児の様子をよく読み取っていこうと副担任と保育の方向性を確認していた。

10 月７日

Ｈ児：「魚釣りするよー！」長い木の枝を持って、テラス付近に担任を呼びに来る。
担任：「何、何？面白そうだね。どこでするの？」
Ｈ児：「池だよ。早く行こう」
担任：「うん。行こう、行こう」
　走って池まで行くと、持っていた木の枝の先に落ち葉を付け、池の中に入れる。
Ｈ児：「ほら、釣れたよ！」木の枝を池から持ち上げる。
担任：「本当だ。私も釣りたい！」
Ｈ児：「いいよ。じゃあ、これで釣って」近くに落ちていた木の枝を担任に渡す。
Ｈ児：「スイスイスイスイ…」
　自分が池の中に入り、葉っぱを手に持って水中に入れ、担任の持つ木の枝付近まで来る。
担任：「釣れないかな」
Ｈ児：「ペタッ！釣れたよ」担任の持つ木の枝を持ち上げる。
担任：「本当だ、本当だ。やったー！」
Ｈ児：「もう１回やってもいいよ」
担任：「うん、ありがとう」
Ｉ児：「ぼくもやりたい」
Ｈ児：「いいよ。じゃあ、これ持って」
Ｉ児：「うん」木の枝を手に持ち、先を池に付ける。
Ｈ児：「スイスイスイスイ…。ペタッ！」
Ｉ児：「やったー！」
担任：「Ｉちゃん、やったね」
Ｊ児：「ピチャピチャピチャ…」
担任：「あれ？お魚の音が聞こえてきたよ」
Ｉ児：「本当だ！」
Ｊ児：「ピタッ！」担任の木の枝の先に葉っぱを付ける。
担任：「やった！」
　４人で繰り返す。
Ｈ児：「先生、釣った魚は焼いて食べれるんだよ」
担任：「へぇ、いいね。私も食べたいな」
Ｈ児：「今日は焼けないな」
担任：「そっか。残念。また今度お願いね」

Ｈ児は、朝の支度を終えると園庭に出かけて行った。担任が朝の受け入れを終え、外に出る支度をしていると、Ｈ児が木の枝を手に持って、保育室前のテラスに戻ってきた。「魚釣りするよ！」の声に、担任もわくわくした気持ちになり、Ｈ児と一緒に池まで走って行った。すると、近くにいた他の幼児も一緒に池に向かって走っている様子が見られた。担任は、以前他園との交流の中で聞いた「こどものせかいをみることの大切さ」を思い出し、Ｈ児がどんなイメージで魚釣りをしようとしているのかをよく読み取ろう

と、H児の様子を見守った。H児は、手に持っていた木の枝の先に近くに落ちていた葉っぱを差し込んで取り付けると、池の中に枝の先を付け、じっとしていた。しばらくすると、「釣れたよ！」と木の枝を持ち上げ、担任に見せた。担任は木の枝を釣竿に、葉っぱを魚に見立てているのだと捉えた。近くにいた他の幼児もH児の様子を見て、そのイメージを捉えようとしていた。担任は、自分がH児の遊びの仲間になることでH児の遊びを支えたいと考え、「私も釣りたい」とつぶやいた。すると、H児は近くにあった木の枝を担任に持たせ、自分は池の中に入った。担任は、どのような魚釣りになるのかとH児の動きを見ながら、池に木の枝を付けた状態で、じっと待つことにした。するとH児は「スイスイスイスイ…」と言いながら、池の中を手に持った葉っぱを泳がせるように担任のもとへやってきた。担任の近くまで来ると、手に持った葉っぱを担任の持つ木の枝の先に「ペタッ！」と言いながらくっつけ、木の枝を持ち上げた。担任は、H児が魚役になり、魚に見立てた葉っぱを池の中で泳がせ、釣竿に見立てた木の枝にくっつけることで魚釣りを表現しているのだと捉えた。近くでその様子をじっと見ていたＩ児もそのイメージを共有したのか、「ぼくもやりたい」と仲間に入った。また、Ｊ児はH児がやっていた魚役になりきり、遊びの仲間に入った。

この日の振り返りタイムでは、H児がこれまでの経験から「幼稚園でも釣りをやってみたい」という思いをもったのではないかと振り返った。そして、担任がH児の思いを読み取り、遊びの仲間になって一緒に楽しんだことで、H児の楽しい雰囲気が他の幼児にも伝わり、自然とかかわりがうまれたのではないかと考えた。また、H児が「釣った魚は焼いて食べれるんだよ」と言っていたことから、今後釣った魚を料理する遊びに発展する可能性も視野に入れながら、援助していこうと副担任と共有した。そして、池の周りに釣竿になるような木の枝やサツマイモのつるなどを置いたり、魚になるような葉っぱを集めておいたりすることにした。

10 月 15 日

Ｉ児、K児、Ｌ児が池で釣りの遊びを始める。しばらくして、H児が池の近くを通りかかる。
H児：「いーれーて」
Ｉ児、K児、Ｌ児：「いいよ」
H児：「スイスイスイスイ…ペタッ！」
K児：「やったー！」木の枝を持ち上げる。
K児：「はい、次はＬちゃんね」
Ｌ児：「うん、ありがとう」
しばらく魚釣りを続ける。
H児：「そうだ！あっちのロケットでも、釣りができるよ」
担任：「何？ロケット？」
Ｉ児：「ロケット？」
H児：「うん。あっちにロケットあるよ。ロケットでも釣りができるんだー」園庭の築山を指さす。
担任：「えっ？楽しそう」
K児：「私もやりたーい」
H児：「じゃあ、みんなで行こう」築山に向かって走る。
H児：「ここ、ここ！ここに座って釣りできるよ」
H児は築山のトンネルの上を指さす。
Ｉ児、K児、Ｌ児はトンネルの上に移動する。
H児：「これを持って」長いつるをＩ児に渡す。
Ｉ児：「ぼくやる」つるをトンネルの下に垂らす。
H児：「スイスイスイスイ…ペタッ！釣れたよ！」
Ｉ児：「やったー！」
担任：「へぇ、ロケットでも釣りができるの、楽しいね」
４人は順番に築山での釣り遊びを続ける。
M児：「何やってるの？」
H児：「釣りだよ。ロケットから釣りができるの」
N児：「やりたーい」トンネルの上に上る。
H児：「じゃあ、これ持って」つるをN児に渡す。
N児：「釣れないかな？」つるを下に垂らして待つ。

H児：「スイスイスイスイ…ペタッ！」
N児：「やったー！もう１回やる」つるを下に垂らして待つ。
M児：「釣れてるよ」近くに落ちていた葉っぱを拾ってきて、N児の持つつるに付ける。
N児：「本当だ」
H児：「こんなのも、釣れるよ」近くに落ちていたどんぐりや花を見せる。
担任：「へぇ、いろいろなものが釣れるんだね。おもしろいね」
M児：「いいね。ぼくも探してくる」

釣りの遊びが始まって１週間。池では、多くの３歳クラス児が釣りの遊びを楽しんでいた。時には、年上の幼児が遊びに加わったり、５歳クラス児が釣竿をつくって持ってきてくれたりすることもあった。この日、H児は他の幼児と園庭の築山付近で遊んでいた。Ｉ児やK児、Ｌ児が池で釣りの遊びを始めると、たまたま通りかかったH児も釣りの遊びに加わった。Ｉ児、K児、Ｌ児の３人は、１つしかない先の曲がった木の枝を順番に使い、池に浮かぶ魚に見立てた落ち葉をひっかけるようにして釣って遊んでいた。H児が遊びに加わってしばらくすると、H児が「ロケットでも釣りができるよ」と話した。担任は、魚釣りが魚の料理づくりに発展するのではないかと考えていたが、H児の「ロケットでも釣りができる」という発想に驚き、この思いを大切にしていくことが「こどものせかいをみること」なのではないかと考えた。担任は、H児が池で釣りの遊びに加わるまで、築山をロケットに見立てて遊んでいたのではないかと読み取り、そのイメージが他の幼児にも伝わるように、問い返した。すると、他の幼児もそのイメージを共有し、一緒にやりたいという思いをもった。築山まで走って行くと、H児がそのイメージを他の幼児に伝えた。担任はその様子を見て、自分たちでイメージを共有し、遊び始められるのではないかと考え、近くで様子を見守ることにした。４人が順番にロケットでの釣りの遊びを続けていると、生き物探しをしていたM児とN児が通りかかった。M児とN児が釣りの遊びに興味をもつと、H児がそのイメージを伝え、２人が遊びに加わることになった。

この日の振り返りでは、H児の発想から釣りの場を変えたことで、普段釣りの遊びに加わることのなかったM児やN児が釣りの遊びを知り、その楽しさを共有することにつながったのではないかと振り返った。そして、楽しい遊びをしているところには自然と子どもたちが集まってくることを再確認し、幼児の発想や思いを大切にし、遊びを充実させていこうと考えた。引き続き、池の周りに釣りの遊びができそうな木の枝やつる、葉っぱを集め、必要に応じて料理道具がすぐに使えるように環境を整えた。

10 月 22 日

H児、Ｊ児、K児、Ｌ児、O児、Ｐ児は池で釣りの遊びをする。
H児：「じゃあ、ここにみんなが釣った魚を入れて」池の脇にバケツを置く。
H児：「ここに入れたら、焼いて食べれるんだよ」
担任：「いいね。前にHちゃん、焼いて食べれるって言ってたもんね」
H児：「うん。今日は食べれるよ」
担任：「やったー！楽しみ」
Ｐ児：「えー、焼くの？」
Ｊ児：「いいね。これも入れるね」
K児：「これも入れていい？」
H児：「いいよ。いっぱい入れて」
O児：「いっぱい釣れたね」
担任：「わあ、本当だ。いっぱいになってきた」
H児：「じゃあ、次はお料理しますね」
Ｐ児：「お料理？」
担任：「わぁ、何が食べられるか、楽しみ」
H児：「じゃあ、あっちでお料理しますね」
３歳クラステラス付近の砂場まで移動する。Ｐ児もついていく。
H児：「ここで、お料理しまーす」
Ｐ児：「私もする」
担任：「お魚で何のお料理になるのかな」
H児：「今日は、お魚オムライスですよ」
Ｐ児：「えー、おいしそう。おなべ持ってきたよ」
H児：「ありがとう。じゃあ、ここにお魚を入れて」

　皿を取りに行く。
H児：「できた！完成！」
　皿に料理をうつし、担任の所に持ってくる。
H児：「できました。お魚オムライスでーす」
Ｐ児：「私も食べたーい」
担任：「一緒に食べる？」
Ｐ児：「うん」
担任：「おいしい！」
Ｐ児：「本当だ。おいしいね」

H児とＰ児が料理をしている間、他の幼児も砂場に移動してくる。
Ｊ児：「ここで、魚釣りできないかな？そしたら、すぐにHちゃんにお料理してもらえるのに」
O児：「そうだね…」
Ｊ児：「あっ！いいこと思い付いた！ここを池にしたらいいんじゃない？」
O児：「いいね」スコップを取りに行く。
O児：「はい、先生も掘って」
担任：「どこを掘ったらいいの？」
Ｊ児：「ここだよ。ここを池にするの」
担任：「へぇ、ここが池になるの？楽しみ」
K児：「私も掘る」
L児：「私も」
Ｊ児：「やめて！みんなでやったら壊れちゃうよ」
K児：「私もやりたい！」
Ｊ児：「でも壊れちゃったじゃん」
K児：「私もやりたかったの」
H児：「じゃあ、順番にやったら？」
Ｊ児：「うーん。じゃあ、ここならいいよ」
K児：「うん」
Ｊ児：「私、水持ってくるね」
L児：「私も持ってくる」
Ｊ児：「水、入れるよ」
O児：「ＯＫ！」
　Ｊ児とM児が掘った穴に水を入れる。
L児：「わぁ、池になった」
Ｊ児：「お魚釣ろう！」
O児：「お魚入れないと」葉っぱを持ってきて、砂場の穴に入れる。
L児：「私、釣りたい」
Ｊ児：「いいよ」木の枝を渡す。
L児：「やった！釣れた！」
Ｊ児：「Hちゃん、釣れたよ！お料理つくって」
H児：「うん。分かった。お料理するね」

　この日、H児は多くの３歳クラス児と一緒に池で釣りの遊びをしていた。しばらくすると、何かを思い付いたのか、バケツを持ってきて、他の幼児に声をかけた。担任は、H児がみんなの釣った魚を集めて、その魚で料理をしたいという思いをもっていると読み取った。以前H児が「釣った魚は焼いて食べれるんだよ」と語っていたことを思い出し、今釣った魚で料理をしたいという思いが高まったのだと捉えた。そして、担任はH児の思いが実現するように願い、必要に応じて声かけをしたり、遊びの仲間に入れるようにしたり、いくつか援助の方法を考えながら、近くでその様子を見守った。H児の料理づくりに興味をもったＰ児がH児と一緒に砂場に移動し、一緒に料理をする様子から、担任は２人のかかわりを見守りながら、近くで料理ができあがるのを待つことにした。しばらくすると、池で釣りの遊びを続けていた他の幼児も砂場に集まってきた。H児とＰ児が砂場脇のテーブルで魚の料理をしていることを知ると、料理をしている場の近くで魚釣りをしたいという思いをもった。Ｊ児が砂場に穴を掘って池をつくることを提案すると、他の幼児も賛同

し、一緒に穴を掘ったり、水を入れたりして、池をつくろうと動き出した。担任は、以前雨が降った日に砂場に水がたまっている様子を見た３歳クラス児が「池みたいだね」と言っていたことを思い出し、きっとＪ児はこれまでの経験から、砂場に水をためると池のようになることを思い付いたのではないかと捉えた。Ｊ児の発想に驚くと共に、幼児がそれぞれやりたいことを見付け、自然と役割分担して、遊びを展開していく姿に大きな成長を感じた。そして、少しのいざこざがあっても自分たちで話し合い、なんとかしようとしている姿に感動した。

この日の振り返りでは、H児が釣りの遊びを始めた頃「釣った魚は焼いて食べれる」と言っていたことを共有し、いつかH児の気持ちが料理に向いたときにそれが遊びにつながり、料理づくりを楽しむ他の幼児とのかかわりにもつながるのではないかと捉えていたことを振り返った。この日、H児の発想から魚の料理づくりだけでなく、砂場に池をつくる遊びにつながったことを副担任と共有した。焦らずに待つことの大切さを感じると共に、幼児の思いが高まったとき、幼児は自分たちで様々なことを考え、工夫しながら遊びをつくることができるのだと改めて再確認する出来事になった。

考察

H児の釣りの遊びは１か月以上も続いた。その間、全ての３歳クラス児がこの釣り遊びを楽しんだ。多くの幼児がイメージしやすい「釣り」という遊びだったことや、釣りの場である池が園庭と保育室をつなぐ位置にあり、通りすがりの幼児が遊びに加わることができたということで多くの幼児の楽しみになったのではないかと考えた。さらにこの釣りの遊びを通して考えたことは、やはり楽しいことをやっているところには多くの幼児が自然と集まるということである。多くの幼児が集まることで、自然とかかわりがうまれる。そのかかわりの中で幼児は多くのことを学ぶ。そのことを実感した遊びであった。かかわりが増えてくれば必ずトラブルが起こる。それは、遊びに夢中になっている証なのである。それをどのような学びの場にしていくかは、保育者にかかっているのではないかと考える。幼児同士で何とかしようと考えている様子があれば見守りに徹し、自分たちで何とかしようとする姿を称賛してきた。

遊びが充実すれば、何か困ったことがあっても、自然と自分たちで考え、工夫する姿につながることが見てとれた。遊びを充実させることがかかわりにつながることを実感した。今後も幼児一人一人の楽しみは何かをよく読み取りながら、それぞれの遊びが充実するように援助していきたい。

＜３歳クラス　Ⅳ期　１・２月＞　やりたい思いを高める環境構成

これまでの保育の様子

天気によって、屋内で遊ぶことが多い季節になった。屋内でも自分でやりたいことを見付け、存分に楽しめるように環境を整えていこうと考えた。幼児は、遊戯室や保育室などを行き来しながら、自分の楽しみを見付けていった。遊戯室では、積み木を並べたり、積んだりして、家や乗り物に見立て、ごっこ遊びを楽しんでいた。また、保育室では廃材を使って製作遊びを楽しむ幼児が多くいた。

Ⅳ期は、「周囲とかかわりながら、自分の遊びを広げていく時期」である。また、２月にはお楽しみ発表会が行われる。普段の遊びを充実させることが、発表会で「やってみたい」という思いにつながるのではないかと考え、幼児がやりたいと思えるような環境を整えることで、自然ながれで発表会を迎えたいと考えた。２学期後半には、４歳クラス児からポリ袋を使った衣装づくりを教えてもらい、数名の３歳クラス児が自分でつくれるようになっていた。つくった衣装を毎日着てから遊び始める様子を見て、幼児がいつでも手の届く所に衣装を置いておく場があることで、自分たちの好きなときに衣装を脱ぎ着できるのではないかと考え、ロッカーとロッカーの間にハンガーで衣装をかけておく場をつくった。また、幼児の遊びの様子からヒーローごっこの武器等をつくりやすいような空き箱を多く準備し、いつでも好きなように使えるように環境を整えた。

この日の登園前、保育室にホワイトボードを用意しておいた。担任は、発表会では発表会のために事前に決めたことを発表するのではなく、夢中になれる遊びがあって、「見せたい」という思いから発表につながるようにしたいと願って、ホワイトボードを置くことにした。ホワイトボードには、幼児が発表会で家の人に見せたいと言ったものを写真やイラストで示し、幼児がわかりやすいようにした。また、写真の脇には、幼児一人一人の名札を用意し、誰が何をやりたいのかを示せるように準備した。朝登園した幼児は、ホワイトボードの前に集まり、「私は、〇〇やる！」「ぼくは、△△！」と自分の名札を動かしていた。中には、「私、◇◇やりたいから、つくって」とイラストをお願いに来る幼児もいた。

１月 31 日

【みんなの時間】
担任：「今日は、お部屋で見せられるみたいだよ」
３歳クラス：「やった！」「ぼく、〇〇やりたい！」
担任：「何見せたいか、教えて」
　やりたいことが貼られているホワイトボードに名札を貼っていく。
担任：「Ｒちゃん、どうする？」
Ｒ児：「やらない」
担任：「そっか。分かったよ。ここに貼っておくから、
　　やりたくなったら、教えてね」

【午後の遊びの時間】
Ｒ児：「もうＲちゃん、やること決まってるんだ」
担任：「そうなんだ。何見せたいの？」
　Ｒ児は、側転をやって見せた。
担任：「すごいね。Ｒちゃん」
Ｒ児：「うん。Ｒちゃんは運動神経がいいから、できるんだ！」
担任：「へえ、みんなびっくりするんじゃない？」
Ｒ児：「うん！」
担任：「そうだ！Ｒちゃんの今のやつ、紙つくってこようか？」
Ｒ児：「うん」
　担任は、副担任に状況を説明し、事務室で側転のイラストを準備する。
担任：「できたよ！これでいい？」
Ｒ児：「うん」
担任：「ここに貼る？」イラストを貼る。
Ｒ児：「うん」自分の名札を紙の下に隠すように貼る。
担任：「これ、みんなに内緒ってこと？」

Ｒ児：「そうだよ。Ｒちゃん、見せないもん」
担任：「へえ、そうなの？みんなびっくりするんじゃないかな」

午前の遊びが終わり、「みんなの時間」に初めての発表会ごっこを行った。この日は、自分のやりたいことを決め、保育室で互いに見せ合うスタイルで行った。担任が、一人ずつ「何見せたい？」と問うと、それぞれやりたいことを口にした。担任は、幼児の思いを聞き、その子の名札をイラストの脇に貼っていった。Ｒ児は、不安そうな表情でその様子を見ていた。担任がＲ児にどうしたいかと聞くと、「やらない」と答えた。担任は、いつかＲ児がやりたいという思いになることを願って、Ｒ児の名札をホワイトボードの端に貼り、「やりたくなったら、教えてね」とだけ伝えた。その後、行った発表会ごっこでは、自分の椅子からは立ち上がったものの、みんなの前に立つことはなかった。しかし、その表情はにこやかで、その状況を楽しんでいるかのように見えた。担任は、そのＲ児の表情を見て、何か小さなきっかけがあれば、いつかみんなの前に立てるのではないか、そしてそれがＲ児の自信につながるのではないかと捉え、Ｒ児がやってみたいと思えるように環境を整えていこうと考えていた。

午後の遊びの時間になると、Ｒ児がそっと担任に近づいてきて「Ｒちゃん、もうやること決まってるんだ」とつぶやいた。担任は、Ｒ児が自分でやりたいことを決め、担任に知らせに来たことをうれしく思い、Ｒ児の話を聞いた。すると、Ｒ児は他の幼児から見えないような所に移動すると、側転をして見せた。担任は、Ｒ児の今の思いを大切にしたいと思い、遊戯室にいた副担任のところに行き、Ｒ児が側転をやりたいと見せてくれたこと、今Ｒ児のためにホワイトボードに貼るイラストを作成してきたいことを伝え、Ｒ児と一緒に事務室へ急いだ。担任は側転の様子が分かるようなイラストを探し、Ｒ児に確認すると、Ｒ児と一緒にホワイトボードに貼った。すると、Ｒ児は自分の名札をイラストの用紙の下に隠すように貼った。担任が「これ、みんなに内緒ってこと？」と言うと、満面の笑みを浮かべながら「見せないもん」とつぶやいた。言葉では、「見せない」と言っていたものの、そのＲ児の表情は自信に満ちあふれていた。このホワイトボードがあったことで、Ｒ児のやってみようという思いが、かたちになり、Ｒ児の自信につながったのではないかと捉えた。

振り返りでは、ほとんどの幼児がホワイトボードに興味を示し、名札を貼ることによって、自分の意思を示すことにつながっているのではないかと振り返った。また、名札の裏にはマグネットを貼り付けてあり、自由に動かせることで幼児がいつでも自分のやりたいことを変えることができ、幼児のそのときのやりたい思いに寄り添える環境になっているのではないかと共有した。次の日からも、このホワイトボードは保育室に置いておくことにし、遊びの時間でも自由に名札を動かしてよい環境にしておくことを確認した。そして、保育者が遊びの援助をする際にも、この名札の位置を参考にしながら、今それぞれの幼児の楽しみは何かをよく読み取っていこうと共有した。

２月 12 日　発表会当日

担任：「今日は、おうちの人が見てくれる日だね」
３歳クラス：「うん！」「楽しみ！」
担任：「じゃあ、今日は何見せたい？」
　自分の見せたい物のところに名札を貼っていく。
担任：「Ｓくんはどうする？」
Ｓ児：「Ｓは、これ！」ホワイトボードを指さす。
担任：「何か、おいしいもの見せたいの？」
Ｓ児：「うん！」
担任：「いいね。何見せるの？」
Ｓ児：「お弁当！」
担任：「いいね！おいしそうなのつくってたもんね。みんなびっくりするね」

保育室での発表会ごっこの後、遊戯室でも数回発表会ごっこを行った。その際、遊戯室へ出る前にはいつもホワイトボードで、それぞれの幼児がその日見せたいものは何かを確認してから、発表会ごっこに臨んでいた。毎回違うことを選び、楽しんでいる幼児もいれば、友達と一緒に「今日は一緒に〇〇しよう」と相談している幼児もいた。

発表会当日、担任はホワイトボードを前に、「今日は何見せたい？」と聞こうかどうしようか迷っていた。このまま「今日はこの順番でやろうね」と伝えることもできる。発表会が始まる数分前の今、今までやったことのないものを見せたいと言われたらどうしようと思っていたからである。しかし、発表会の主人公は子

ども。それぞれの幼児がそのときやりたいこと、見せたいことを保育者が制限すべきでないと考え直し、いつも通り「今日は何見せたい？」と尋ねることにした。すると、それぞれ自分のやりたいことに名札を貼る幼児がいる一方、Ｓ児は最後まで名札を貼らなかった。担任は、ドキドキしながら「Ｓくん、どうする？」と尋ねると、これまで見せたことのなかった食べ物のイラストを指さした。Ｓ児は廃材の箱や折り紙、毛糸などでつくったお弁当を見せたいとのことだった。担任は、インタビューの時どんなことを聞いたらよいのだろうかと一瞬迷ったが、これまで遊びの中でＳ児が工夫しながらお弁当をつくっていたこと、それぞれの具材にはＳ児の思いが詰まっていることを読み取っていたので、それを家の人に知ってもらえたらと考え、発表会の会場である遊戯室へ向かった。発表会では、Ｓ児をはじめどの子も自分のやりたいことを存分に表現していたのではないかと振り返った。発表会が終わってすぐ、幼児から「もう１回やりたい」「明日は、〇〇やりたい」という声があがった。担任はもっとやりたいという幼児の思いを大切にしたいと考え、その日の発表会で使った衣装やつくったものは持ち帰らずに、そのまま保育室に置いておくこと、これまで使っていたホワイトボードを幼児の目の届くところに置いておくことにした。

２月 13 日

Ｔ児：「今日は、ヒーローやる！」
担任：「いいね！今日も発表会やるってこと？」
Ｔ児：「うん。やるよ」
担任：「いいね。やろうやろう！」
Ｔ児：「ぼく、みんなみたいな服が欲しいんだよ」
担任：「どういうこと？」
Ｔ児：「Ｕくんが着てるやつ」
担任：「あれ、かっこいいもんね」
Ｕ児：「これ？」
Ｔ児：「ぼくも欲しい」
Ｕ児：「いいよ。つくってあげるよ」
Ｔ児：「やった！」
担任：「よかったね」
Ｔ児：「うん！」
Ｕ児：「じゃあさー、袋ちょうだい」
担任：「袋？袋が必要ってこと？」
Ｕ児：「そうだよ。袋でつくるから」
Ｔ児：「袋、くーだーさい」
担任：「分かったよ。何色がいいのかな？」いろいろな色の袋を見せる。
Ｔ児：「ぼくは、黒にする」
担任：「はい、どうぞ」
Ｕ児：「ありがとう。Ｒくん、これどうすればいいの？」
Ｔ児：「はさみで切るんだよ。先生、はさみ貸して」
担任：「うん。分かったよ」
Ｕ児：「ここが頭だから、ここを切って」
Ｔ児：「できない」
Ｕ児：「ぼくがやろうか？」
Ｔ児：「うん。つくって」
　Ｕ児がつくり方を説明しながらつくり、Ｔ児はその様子を近くで見ている。
Ｕ児：「できたよ」
Ｔ児：「ありがとう」
Ｕ児：「ここに手を入れて」Ｔ児に着せてあげる。

　この日、多くの幼児が「昨日、発表会楽しかったね」「今日も発表会やりたい」と言いながら登園した。Ｔ児は朝から「今日はヒーローをやる！」と言っていた。朝の支度が終わると、ヒーローの曲に合わせて、ポーズをとって遊ぶことを繰り返した後、「みんなみたいな服が欲しい」という思いをもった。きっとこれまでの発表会ごっこや発表会での他の幼児の発表を見て、自分もやってみたいという思いにつながったのではないかと捉え、Ｔ児が自分で楽しみを見付け、遊びを広げていることにうれしくなった。担任

は、以前の自分なら「発表会前につくればよかったのに」と考えていたかもしれないと振り返り、このときＴ児の遊びが広がったことを心からうれしく思えたのは、副担任との振り返りやカンファレンスを通して、発表会を日常の遊びの一環と心から思えるようになっていたからではないかと捉えた。さらに、Ｔ児はすでに衣装をつくって着て遊んでいたU児に自分の思いを伝え、衣装をつくってほしいとお願いしていた。Ｔ児とU児が自分たちでやりとりをしながら、衣装をつくりあげていく姿に大きな成長を感じた。

そして、「今日も発表会をしたい」と願う３歳クラス児の思いを大切にしたいと考え、遊びの時間の間に３歳クラス児の思いを５歳クラス、４歳クラスの職員に伝え、「みんなの時間」にもう１度発表会をやらせてほしいとお願いした。すると、「いいじゃないですか」「やりましょう、やりましょう」と快く受け入れていただき、実際に発表会ごっこをやらせてもらえることになった。５歳クラス児、４歳クラス児にも観客として参加してもらい、３歳クラス児はどの幼児も満足そうに発表会ごっこを終えた。Ｔ児も遊びの時間にU児と一緒につくった衣装を身に着け、ヒーローショーの発表を楽しんでいた。

この日の振り返りでは、発表会後であるからこそ、幼児の遊びが充実していたのではないかと振り返った。発表会での他の幼児の発表をきっかけに、「自分もやってみたい」という思いが高まり、遊びの幅が広がったのではないかと捉えた。発表会までアイドルのダンスを楽しんでいた女児が、この日の発表会ごっこでは１人でヒーローになりきって、みんなの前で発表をやりきった姿からも、そのことがうかがえた。幼児の思いを大切に、他のクラスの職員とも連携し、幼児の思いを叶える場をつくったことが幼児のさらなる楽しみにつながったのではないかと振り返った。

考察

発表会に向けて、繰り返しカンファレンスを行う中で、「発表会がゴールではない」「発表会は遊びの延長線上にある」ということを確認し、大事にしていこうと考えていた。発表会に向けての教師の役割は、幼児の思いをいかに高められるかだと捉えていた。そこで、教師は幼児が自信をもって「やりたい」という思いをもつことができるように、環境を整えていこうと考えた。

幼児が自分で好きなように道具を使えるように保育室の環境を整えたことで、幼児の遊びの幅が広がり、幼児同士がやりとりの中で一緒に遊びをつくりあげる姿が見られた。また、その時幼児が発表したいことを発表できるように、ホワイトボードで視覚的に示し、名札を貼ることで幼児の意思を示せるようにしたことで、幼児のやりたい思いに寄り添うことができたのではないかと考える。そうすることで、発表することに不安をもっていた幼児も安心して発表の場に立つことができたのではないかと考える。今年度の研究会講師の先生が「行事は幼児の日常に潤いを与えるもの」とお話しされていた。まさにお楽しみ発表会が幼児の日常に潤いを与えるものであったのではないかと改めてその言葉の意味を実感した。幼児にとって、発表会がゴールではなく、通過点になっていたのであればうれしく思う。

＜４歳クラス　Ｖ期　４・５月＞　遊び出しを支える環境構成

これまでの保育の様子

４歳クラスのこの時期は、進級したことに喜びを感じており、張り切って遊んでいる。しかし、保育室の場所や、担任・副担任が変わる経験は初めてであり、戸惑いを感じたり不安な様子を見せたりする幼児もいた。また、新入園児や年下の園児に対して、自分から声をかける姿から「優しくしたい」「一緒に遊びたい」という気持ちをもっているのではないかと読み取った。これまでとは違った新しい環境になじめるように、一人一人の遊びの様子をしっかり読み取り、思いや願いに寄り添いながら、安心して遊べる場をつくっていこうと、副担任と思いを共有した。そのために、これまでに経験した遊びを思い起こし、好きな遊びに夢中になれるような環境構成を工夫することが大切であると考えた。また、春になって植物がすくすくと育ち、園庭のいたるところで生き物が見られるようになる季節なので、天気のよい日はできるだけ自然環境に目を向けて遊べるようにしたいと願い、テラスに机やいすを配置したり、生き物に関する本や飼育ケースを目の届く場所に配置したりして環境構成を行った。

Ａ児は４月後半から、登園の際に表情が曇り、気持ちが沈むような様子が見られた。朝、登園後に母親と離れる時に「ママと一緒がいい」と泣いていることが多くなった。しばらくの間、登園後は母親と一緒に、荷物の片付けや手洗い、うがいなどの朝の支度を行い、遊び始めるまでの時間を母親と一緒に過ごした。Ａ児は、母親と一緒にいる間は落ち着いているが、母親が離れると顔が曇って泣く日が続いていた。

しかし、少し落ち着くと「Ｂちゃんと一緒に遊びたい」と、気の合う友達を探したり、自分のしたいことや思いを担任に伝えたりしていた。もし、好きな遊びを見付けて遊び出すことができれば、新しい環境に慣れ、安心して園生活を送れるのではないかと考えた。そこで、Ａ児が好きな遊びや、興味をもつ遊びを探り、すぐに好きな遊びができるような環境をつくっていこうと援助の方向性を確認した。

ある日、手遊びをしていると、Ａ児が担任の真似をして、楽しそうに手遊びをする姿があった。また、帰りの支度をする時に音楽をかけて担任が歌い始めると、他の幼児と一緒に身振り手振りをしながら、Ａ児が楽しそうに歌っていた。Ａ児にとって、歌って表現することは好きなことの一つなのかもしれないと捉えた。そこで、これまで担任が操作をしていたＣＤデッキを、幼児が操作しやすいようにラベルを貼って室内の窓際に置き、遊びの時間に自由に使えるようにした。

４月 24 日

Ａ児：「これって、どうやって音出すの？」
担任：「ここを押したらいいのかなあ？」
Ｃ児：「ちょっと貸して。これは、ここを最初に押して、これを押すの」
担任：「なるほどね」
Ａ児：「すごい、ありがとう」
Ｄ児：「じゃあ、どれにする？」
Ａ児：「あの曲あるかなあ。どうやって次のやつにするの？」
Ｃ児：「ここだよ、ここ」
　ボタンを押しながら、曲を選ぶ。
Ａ児：「これがいいんじゃない？」
Ｄ児：「いいね。踊ろう！」
Ｅ児：「ここに、いす並べて、お客さんが座れるようにしたらいいんじゃない？」
Ｅ児：「それ、いいね。そうしよう」
担任：「すごい、楽しそうだね」
Ａ児：「うん、踊ってるの！」
Ｄ児：「今、発表するから、こっち側で見てて」
担任：「ここに座っていいの？楽しみだなあ」
Ａ児：「じゃあ、どれで踊る？」

窓際に置いたＣＤデッキを操作しようとするＡ児が、どのボタンを押すと好きな曲を流せるのかがよく分からず、困っていた。そこへ操作が得意なＣ児が来て、曲を流すことができるようになった。Ａ児は、自分が好きな曲があるようで、曲の前奏部分を聴きながら、どれにするかをＤ児やＥ児と一緒に選んでいた。自分たちが選んだ音楽が流れると、それに合わせて楽しそうに歌ったり踊ったりする幼児の姿があった。Ａ児も笑顔で跳んだり歌ったりして、思い切り体を動かしながら表現を楽しんでいる様子から、音楽に合わせて歌ったり踊ったりすることは、Ａ児の楽しみの一つなのだと改めて感じた。また、Ｅ児は保育室にある椅子を並べ、初めてお客さんが座れるような場所をつくり始めた。担任は、観客としてその椅子に座った。Ａ児は他の幼児たちと一緒になって、張り切って踊っていた。

ＣＤデッキを操作する際に必要なボタンにラベルを貼って分かりやすくしたが、最初は操作に戸惑う様子

が見られた。しかし、機械操作が得意なＣ児が、好きな曲の選び方や音楽の流し方を覚えて、率先して使い方を周りの子に伝えており、Ａ児も他の幼児たちと一緒に曲選びをしていた様子から、これから好きな時に好きな曲で踊ったり歌ったりする場ができると感じたのではないかと捉えた。また、Ｅ児を中心として保育室にあった椅子を並べ、観客席をつくり始めた。他の人にこの姿を披露したいという気持ちがあると読み取った担任はその場に座って、幼児たちが音楽に合わせて踊ったり歌ったりする姿を見ながら、手拍子をした。Ａ児と目が合った時は、とてもうれしそうな笑顔を浮かべて友達と一緒に踊っており、表現することを楽しんでいたのではないかと捉えた。ＣＤデッキを幼児が操作しやすい場所に置いて、音楽を自由に流せるようにしたことにより、踊ったり歌ったりすることが好きなＡ児の遊び出しがスムーズになると感じた。そこでしばらくＣＤデッキを室内の窓際に置いておくと、自分たちで音楽を流し、それに合わせて歌ったり踊ったりする幼児がいた。また、帰りの集まりの際は、幼児たちが好きな音楽を流し、支度が終わった子から一緒に歌を歌った。Ａ児も張り切って帰りの支度をして、みんなと一緒に歌っていた。

また、踊ったり歌ったりすることをする姿を他の人に見てもらえることは、Ａ児の大きな喜びにつながるのではないかと捉え、もっとたくさんの人にこのＡ児の姿を見てもらうことができれば、Ａ児の喜びや楽しみが増えることにつながるのではないかと考えた。そこで５月中旬、副担任と相談をして、テラスにステージとなる場を設置することにした。すのこを敷き、テラスのマットの位置を移動させて、上履きのままでも気軽にすのこのステージへ行けるようにした。また、体を十分に動かすことができるような広いスペースを確保した。そして、テラスでもＣＤデッキが操作できるように、すのこの近くにＣＤデッキを置くためのテーブルを用意した。

５月 22 日

Ａ児：「ここにビールケース、持って来ようよ」
Ｅ児：「いいよ、運ぼう」
Ａ児：「歌、どうする？」
Ｅ児：「これにする？」
Ａ児：「いいよ、これにしよう」
　Ｃ児とＦ児が加わり、４人で曲に合わせて歌う。担任が観客となり、歌に合わせて手拍子をしていると、３歳クラス児が近くに来る。
担任：「４歳クラス児さんたち、素敵な歌を歌ってるね」
　Ｆ児が足を踏み外す。
担任：「大丈夫だった？これからどうしたらいいかな？」
Ｅ児：「じゃあさ、落ちないように、こうやって１段にする？」
Ａ児：「いいかも。広くした方がいいんじゃない？」
　２段になっていたビールケースを下ろして、１段の広いステージをつくる。
Ｅ児：「これ、いいねえ」
Ａ児：「広くなった！靴、脱ごうかなあ」
　Ａ児は、靴を脱いで広いスペースを歩く。
Ａ児：「次、何の歌にする？」

すのこのステージを設定した次の日、Ａ児は登園すると母親と離れる時に少し不安そうな表情を見せていたが、泣かずに部屋へ入り、朝の支度を始めた。そして、Ｅ児がビールケースを運んでつくり始めたステージを、Ａ児も一緒につくっていた。前日の他の幼児たちの楽しそうな様子から「自分も一緒にやりたい」というＡ児の気持ちを高めたのだろうと感じた。ステージができあがると、ＣＤデッキを操作して、歌いたい曲を相談しながら選んだ。そして、二段に重ねたビールケースの上に立ち、他の幼児たちと一緒に大きな声で歌を歌った。その歌声が園庭に響きわたり、他の幼児たちが集まって来た。保育室で歌っていた時は、そこにいる幼児とのかかわりしかなかったが、テラスのステージではたくさんの人に見てもらうことができ、歌ったり踊ったりすることが好きなＡ児にとって、新たな楽しさを得たように捉えた。

副担任との振り返りタイムでは、ステージを設定することで、歌ったり踊ったりすることを、楽しんでいる様子が見られたことが話題になった。音楽や歌声に耳を傾けながら、ステージの近くを通りかかる幼児や職員が観客となり、見てもらえることへの喜びが、さらに遠くまで声を響かせようとして歌うなど、表現を豊かにしているように見えた。ビールケースを自分たちで運んで重ね、段をつくるステージにすることまで、初めは予想していなかったが、それだけこの場に幼児が興味をもっているのだと捉えた。そして、安全のために１段にすることを思いつき、自分たちで新たなステージの形をつくり、Ａ児がそのステージを歩く姿から、自分たちのステージをとても気に入っているように捉えた。また、Ａ児が思いっきり自分を表現する姿を見て、それがＡ児にとって夢中になれる遊びの一つであると捉え、この遊びが継続するように援助していくことを共有した。

そこで、Ａ児がいつでもすぐに遊び出すことができるようにするため、普段は保育室から少し離れた場所

に置いてあるビールケースを、幼児が目に入る位置であるテラスのステージ近くに、数個置いておくことにした。

５月 24 日

A児：「ここにも置く？」
担任：「もうステージができてるの？すごい！今日は何の歌かな？」
G児：「これから、ここで踊るから！」
担任：「わあ、楽しみにしてるよ」
　ステージが完成する。
H児：「どの歌にする？これ？」
A児：「それじゃなくて、これにしようよ」
G児：「いいね」
担任：「素敵！今日はダンスなんだね」
A児：「そう、アナ雪だよ」
教育補佐員：「わあ、とっても楽しそうだね」

　その日の午後、A児はB児を誘って、ステージに上がった。
A児：「Bちゃん、一緒にやろう。こっち乗って」
B児：「何の音楽？」
A児：「さっきのやつがいいな」
　音楽をかけて、二人で踊り始める。
担任：「二人とも、ダンスが上手だね。」

　この日、A児は登園するとすぐに、G児、H児と一緒にビールケースを運んで組み合わせ、ステージをつくっていた。前日にステージをつくる経験をしていることにより、昨日ステージに立った幼児とは異なる友達と一緒につくっていた。曲を選ぶ時、A児は自分の思いを相手に伝え、大好きなアナと雪の女王のテーマソングに決まると、主人公になりきって生き生きと踊っていた。特にサビの部分は盛り上がり、隣の幼児とぶつかりそうになるくらい腕を広げて踊っていた。担任は、ステージに立っているA児、G児、H児の動きに合わせて、一緒に体を動かした。また、通りかかった教育補佐員も、ステージの幼児に声をかけ、観客となって一緒に楽しんだ。この日A児は、午後もB児を誘ってステージで踊った。初めは二人で踊り始めたのだが、途中からC児とＩ児が近くに来て、担任と一緒に観客となった。
　ビールケースをすぐに見える場所に置いておくことにより、A児が登園後にスムーズに遊びに入り、さらに楽しく遊べるようになるきっかけになったのではないかと考えた。また、A児が登園する時に表情が曇り、母親となかなか離れることができないこと、今後はA児の楽しみを見つけながら安心して園生活を送れるように見守っていきたいということについて、のびのび保育シートで全職員に共有していた。教育補佐員もその状況を把握しており、ステージで楽しそうに踊っているA児の姿を見て、声をかけて一緒にそのステージを盛り上げた。好きな音楽をかけてステージで歌ったり踊ったりしている姿を、他の人に見てもらえることは、A児にとって魅力的な遊びであると捉えた。
　５月の半ば頃まで、登園の時に母親との別れ際に泣くことがあったが、その後は日が経つにつれて泣かずに登園できるようになってきた。笑顔で一日をスタートさせることができる日もある。A児が大好きな歌や踊りで自分を表現し、その姿をたくさんの人に見てもらえるという喜びを見つけたことが、A児の安心にもつながったのではないかと捉えた。

考察

　４歳クラスのこの時期は「新しい環境になじむ時期」であり、A児もこれまでと違った環境に対して、不安や戸惑いがあったのだと考えられる。一人一人の好きな遊びをよく読み取り、それを十分に楽しめるように環境構成を行うことの大切さを実感した。そのために、幼児が「何をして遊んでいるか」だけではなく「どのように遊んでいるか」ということを探ることが大切なのだと感じた。遊んでいる時の表情や発言、何に夢中になっているのか、これから何をしたいのか、何をしようとしているのか、などを読み取って、環境構成を行うことができれば、幼児の遊びがさらに充実して、安心感にもつながるのだと思う。
　A児が、音楽に合わせて思い切り踊ったり歌ったりする姿は、本当に生き生きとして楽しそうであった。その姿を大切にしたいと思い、副担任と相談しながら環境構成を少しずつ変化させてきた。自由に曲を選んで音楽を流したり、ステージをつくったりすることを通して、A児は友達とアイデアを出し合い「こうしたい」という思いを伝え合い、好きな遊びに夢中になっていた。また、室内からテラスへ遊びの場を移したことにより、他の幼児や職員に披露する機会ができ、それがA児の喜びとなって安心して遊ぶことへつながったのだと感じる。

幼児一人一人がどんなことに興味をもっているのか、日々の遊びの中でよく読み取ることや、それに合わせた環境構成をしていくことが大切であることを強く感じた。A児は、５月下旬頃から登園後に泣くことが少なくなってきて、笑顔で母親と別れることができる日が増えてきたが、今後も引き続き様子をみながら、好きな遊びを十分に楽しむことができるように支えていきたい。

＜４歳クラス　Ⅵ期　５～７月＞　繰り返し試すことを大切に、「やりたい」を支える

これまでの保育の様子

Ⅴ期はこれまでの遊びを思い起こして、それぞれの幼児が好きな遊びに夢中になっていた。友達と一緒に好きな生き物を捕まえようと毎日飼育ケースを持って園舎裏へ行ったり、雨どいを何度も組み直して自分の納得いくまで試したり、水の量を調節してちょうどよい固さの泥にして料理づくりを楽しんだりしていた。生活面でも朝の支度や当番の活動などが少しずつスムーズにできるようになってきており、新しい環境にもずいぶん慣れてきた様子である。

５月下旬、園庭にある「みどりちゃん」の銅像をきれいにしようと、５歳クラスから石けんを借りてブラシで洗う遊びをしている幼児がいた。泡の量が増えると、手の平に泡を乗せて息を吹きかけ、小さなシャボン玉を飛ばしていた。同じ頃、部屋にあったハンドソープの泡を、容器に入れてテラスに持ち出し、泡をわたあめに見立てたり、料理づくりに使ったりする幼児の姿があった。担任は、その遊び方の発想に驚いたが、手を洗うために置いてあるハンドソープを、このまま遊びに使い続けていてよいのかという迷いもあった。Ｌ児は友達が遊んでいる姿に興味をもち、水を入れたグラスの上に泡を乗せた飲み物などをつくっていた。以前Ｌ児は、土をカップに入れてひっくり返してケーキをつくったことがあった。水の加え方やカップに入れる土の量などを変えながら、形が整うまで何度も試していた。また、ケーキの上に色とりどりの草花を乗せることを思い付くと、それぞれのケーキに全て違う種類の飾りを乗せるなど、興味をもった遊びに夢中になってとことん遊ぶ姿が印象的であった。

Ⅵ期は、自分のしたい遊びに新しい工夫を加えて繰り返し楽しんだり、困ったことから問題に気付き、解決に向けて感じたことや考えたことを試したりすることを大切にする時期である。Ｌ児がこれまで好きな遊びに夢中になってとことん遊ぶ姿から、泡を使った遊びはその可能性があるのではないかと考えた。幼児の姿を肯定的に捉え、一人一人の遊びに共感することや、困ったことがあった時に自分で問題に気付き、願う遊びが思い切り試せるような環境構成や援助を大切にしようと、副担任と保育の方向性を確認した。

その後もしばらく、ハンドソープの泡を使う遊びや、５歳クラスから石けんを借りてきて「みどりちゃん」の銅像を洗う遊びが続いた。副担任と幼児の姿を共有し、これらの幼児の様子から、泡を使った遊びは幼児にとって興味深く、様々な遊び方を試すことにつながるだろうと考え、固形石けんを半分に切ってケースに入れ、いくつかのボウルと一緒にテラスに置いて環境構成を行った。

６月 24 日

テラスにあった石けんと、ボウルを見付けて手に取る。
Ｌ児：「Mちゃん、一緒にこれやろう」
M児：「いいよ、水入れてこようよ」
Ｌ児：「石けん入れると、だんだん水の色変わるね」
M児：「あわあわ、気持ちいい」
Ｌ児：「私、シャボン玉できるよ」
担任：「えっ、そうなの？どうやってやるの？」
Ｌ児：「あのね、指でできるんだよ。こうやってやると･･･あ、できない。待って、もう一回」
担任：「へえ、指でシャボン玉できるなんておもしろいね」
Ｌ児：「あ、今もうちょっとでできそうだった」
担任：「本当だ、少しできそうだったね。惜しい」
M児：「それ、どうやってやるの？」
Ｌ児：「こうやって、ゆっくりやさしく開いて、ふうってやるとできるんだよ」
M児：「ええ、できない」
Ｌ児：「ここはくっつけて、そうっと開くんだよ。ほら、できそう」
M児：「やっぱりできないよ」
担任：「なかなか難しそうだね。どうすればできるんだろうね」
Ｌ児：「ストローがあれば、もっとできるんだけどなあ」
担任：「ストロー？それがあるとできるの？」
Ｌ児：「そうだよ、前やったことあるからできるよ。ストローある？」
担任がストローを２人に１本ずつ渡すと、Ｌ児がストローの先端をボウルの中に入れて息を吹き込む。
Ｌ児：「見て見て、すごい。泡がいっぱいになった」
M児：「わあ、すごい。泡だ！」
担任：「わあ、こんなに泡がいっぱい。おもしろいね」
Ｌ児：「こんなにいっぱいになった！」

M児：「ここから出そう。泡、さわると気持ちいい！」
Ｌ児：「ほんとだ、ふわふわで気持ちいい！」
　３歳クラス児が通りかかる。
３歳クラスａ児：「わあ、これなあに？」
３歳クラスｂ児：「すごい、さわりたーい」
Ｌ児：「これねえ、私たちが石けんでつくったんだよ」
M児：「こうやってぶくぶくってやるとできたよ」
Ｌ児：「これ、さわってもいいよ」

　Ｌ児は、この日初めてテラスに置いてある石けんを手にした。石けん水が少しずつ泡立ち始めると、Ｌ児は握った左手の親指と人差し指で円をつくるように指をそっと開き、石けんの膜ができたことを確認して、そこへ息を吹きかけた。シャボン玉をつくりたいようだったが、石けん液の濃度が低いためか、息を吹きかけると膜が揺れて割れてしまい、なかなかうまくできなかった。しかし、Ｌ児は慎重に指を動かし、何度も試していた。

　指をゆっくり開いて息を吹きかけることを繰り返して試している姿、M児に対して実演しながら説明をする姿から、これまでの経験を生かして自分でシャボン玉をつくりたいというＬ児の熱意を感じ取った。担任は「惜しい」「どうしたらいいかな」等、Ｌ児に共感する声かけをしながら、Ｌ児がチャレンジする姿を見守った。しばらくすると、Ｌ児はストローが欲しいと言った。なかなかシャボン玉ができないのは「手でつくっているから」であり「ストローがあればシャボン玉はできる」とＬ児は考えたのではないかと捉えた。しかし担任は、ここですぐにストローを渡すことに迷いがあった。これまでも、新しい道具を出す時は、その道具の必要性や使い方を幼児に問いかけ、どんな遊びのイメージなのかを読み取ってから提供するようにしてきた。この時のＬ児は、指の間に膜が張るところまではできている。繰り返し試していたら、ストローを使わずに、指でつくるシャボン玉ができたかもしれない。ストローを渡すのはこのタイミングがよいのかどうか迷ったが、Ｌ児の「こうすればできるのではないか」という新たな視点と「やってみたい」という前向きな気持ちを大切にしたいと考え、Ｌ児とM児に一本ずつストローを渡した。

　その日の副担任との振り返りでは、Ｌ児とM児がストローをボウルの中の石けん液の中に入れて息を吹き込み、どんどん出てくる泡に驚きながらも、夢中になって息を吹き込み続ける姿や、ストローを提供するタイミングについて話題となった。担任は、Ｌ児がストローを使いたかったのは、シャボン玉をつくるためだと思っていたため、ボウルの中でブクブクと泡をつくり始めたのは、予想外のことだった。しかし、出てきた泡を手に取り「さわっていいよ」と、興味深く見ていた３歳クラス児に笑顔で差し出す姿から、自分でたくさんの泡をつくったことを、とても満足しているのだと読み取った。もしかしたら、Ｌ児も予想していないくらいの泡ができ、驚く気持ちもあったかもしれない。

　ボウルの中の石けん液に息を吹き込み、泡をつくるという新たな遊びを思いついたＬ児の姿から、石けんを使った遊びはさらにＬ児の興味をひき、遊びの幅が広がるのではないかと考えた。そこで、繰り返し試すきっかけとなることを願って「みんなの時間」に読み聞かせを行った後、石けんとボウルの他にシャボン玉の本をテラスの机の上に置いておくことにした。

６月 28 日

　たらいに石けん水をつくり、クッキー型を使ってシャボン玉をつくっている。
Ｌ児：「見て見て、大きいシャボン玉ができた」
Ｊ児：「すごーい！私もできるよ。見て」
担任：「わあ、本当だ。大きなシャボン玉ができるようになったんだね」
Ｌ児：「うーん、でも私、本みたいなストローでフーって吹くシャボン玉がつくりたいんだ」
Ｊ児：「あ！それ、つくりたい」
Ｌ児：「この本につくり方が書いてあるね」
担任：「何がいるんだろうね」
Ｌ児：「石けんと水かな。あと、ボウルが汚れてるから洗わないといけない」
Ｊ児：「洗いに行こう」
　ボウルについている土をきれいに洗い、テラスの机に戻ってくる。
Ｌ児：「石けんは細かくなってる。スプーンでけずる？」
担任：「なるほどね、でもこんなスプーンあるかなあ？」
Ｌ児：「うーん、あったかなあ」
　道具を探しに行く。
担任：「同じスプーンはなさそうだけど･･･」
　Ｌ児は、近くにあるプリンカップを手に取る。

Ｌ児：「うーん･･･あ、こうやったらできるかも」
担任：「すごい、できてるよ。石けん、細かくなってるね」
Ｌ児：「うん。これ、水の中に入れて混ぜるんだよ」
担任：「なるほどね」
　夢中になって石けんを削り、細かくなった石けんの量が増える。
Ｌ児：「そろそろ、ストローでやってみようかなあ」
Ｊ児：「やってみたい！」
Ｌ児：「あ！今できた！」
担任：「本当だ、今結構大きかったよね？すごい」
Ｌ児：「やったあ」

　シャボン玉のつくり方が本に載っていたことを思い出したＬ児は、そのページを探した。その中で、固形石けんをスプーンで削る工程があるのだが、スプーンは近くに見当たらず、Ｌ児はどうしようかと考えている様子だった。担任がスプーンを取りに行くこともできたのだが、他の道具であっても削ることが可能であり、Ｌ児が自分なりに工夫して考えるきっかけとなるだろうと考え、担任はその様子を見守ることにした。そのうち、近くにあったプリンカップに目を向け、手に取った。そのふちを石けんに押し当てて動かすと、小さな石けんの破片が一つ落ちた。プリンカップで石けんが細かくなることが分かると、Ｌ児は夢中になって石けんを削った。細かくなった石けんは水によく溶け、Ｌ児はその石けん水でシャボン玉をつくることができ、とても満足そうな表情を浮かべていた。

　この時、本につくり方が載っていたことを思い出し、写真を見ながら石けん液をつくろうとしたＬ児の姿に、担任は感心しながらも、この本を見て同じようにつくることは、Ｌ児が試行錯誤をする機会を減らしてしまうのではないかという迷いもあった。しかし、Ｌ児が「ストローでやってみたい」という思いをもっており、それに向けて自ら動き始めた姿を大切にしたいと思い、様子を見守ることにした。また。写真と同じ物ではなくても、身近な物を代用して使うＬ児に感心した。Ｌ児が根気よく石けんを削る姿と、その熱意に担任は心が動かされた。自分の石けん液を使ってシャボン玉をつくることができ、Ｌ児の自信につながったのだろうと捉えた。

　この日の午後、Ｌ児は一人で黙々とテラスでシャボン玉づくりを続けた。何度も繰り返していると、息の強さを調節して、サイズの大きなシャボン玉ができるようになっていった。また、１つだけではなく複数のシャボン玉ができるようになっていき、Ｌ児自身が思い描くシャボン玉づくりに少しずつ近付いているのだろうと読み取った。初めにストローを渡した時、ボウルの中での泡づくりに夢中になっていたＬ児だったが、「ストローでシャボン玉をつくりたい」という強い思いがあったのだと感じた。泡づくりはいわゆる「遊びの寄り道」のようなものであったのかもしれないと捉えた。

　副担任との振り返りでは、代用品で根気強く石けんを削るＬ児の姿、息の強さを工夫してだんだんシャボン玉がうまくできるようになってきたＬ児の姿が話題になった。「やりたい」という気持ちが、こんなにも遊びを発展させていくことに驚き、Ｌ児のシャボン玉づくりに対する思いを大切にしていくことを共有した。また、遊びの中での発見や感動が生まれるように、必要な道具の種類や数を副担任と見直し、精選した。仕切りのあるケースに半分に切った固形石けんを入れ、クッキー型を５つ、ボウルを３つ、ストローを５本程度、テラスの棚に用意した。新しい道具は少しずつ出し、初めて道具を使った時の感動を大切にしたいと考えた。代用品でよいものはあえて出さず、テラスの棚を整理して環境を整えた。

７月１日

　Ｌ児とＪ児が、テラスでストローを使ってシャボン玉づくりをしている。
Ｌ児：「見て見て。大きいシャボン玉できるよ」
Ｊ児：「私もできるかなあ」
Ｌ児：「遠くまで飛んだよ」
担任：「すごいねえ。まだ飛んでるよ」
Ｊ児：「本当だ」
Ｌ児：「今度さ、料理で使うやつでシャボン玉つくってみたいな」
担任：「どんなの？」
Ｌ児：「本に載ってたやつ。これ」
　道具の入っているコンテナの所へ行き、フライ返しを探す。
Ｌ児：「あった。やってみよう」
担任：「できるかなあ」
Ｌ児：「え？全然できない。もう一回･･･やっぱりできない」
担任：「どうしてだろう？」
Ｌ児：「うーん、できないなあ」

Ｊ児：「それ、やってみたい。うーん、できないなあ」
担任：「できないね」
Ｌ児：「うーん、なんでかなあ。全然できない」
Ｊ児：「できそうだけど･･･」
　何度か繰り返した後、本に載っているフライ返しと見比べる。
Ｌ児：「でもさあ、本はここが星じゃなくて、線みたいになってるから、できないのかなあ」
担任：「あ、この穴の部分？穴が違うとできるのかなあ」
Ｌ児：「うん、多分線のやつならできるんじゃない？」
　担任は保育室に保管してあるフライ返しを取りに行く。
担任：「これかなあ？」
Ｌ児：「これこれ！これならできるかも。やってみよう･･･あ、今できた」
担任：「わあ、本当だ。すごいね。もう一回見たいなあ」
Ｌ児：「ほら、こうやって振ったら･･･できた！」
担任：「あ、すごい！２つもできてたよ」
Ｌ児：「やったあ」
Ｊ児：「すごい！」

　フライ返しでシャボン玉をつくりたいという思いをもったＬ児は、フライ返しの穴の開いている部分に膜ができているかを確かめて振ってみるが、何度試しても液が垂れるだけでシャボン玉はなかなかできなかった。しばらくして、Ｌ児はフライ返しを見つめていた。Ｌ児の持っているフライ返しは、１センチ程度の星型の穴が３つあるものだったが、本に載っているフライ返しは柵のように空間があるものであった。そのことに気付いたＬ児は、シャボン玉ができない原因は、穴の違いによるものだと考えているのではないかと捉えた。同じフライ返しであるが、Ｌ児が細かい所までよく見ていたことに担任は驚いた。そして、違う形のフライ返しを使って、すぐにでもシャボン玉づくりをやってみたいという気持ちがあふれている様子であった。
　担任は、シャボン玉ができなくても諦めずに何度も試し「フライ返しの穴に原因がある」と自ら原因を追究しようとしているＬ児の姿に心が動かされた。このシャボン玉づくりに夢中になっているＬ児の楽しみがもっと続いてほしいと願い、保育室に保管していた柵のように空間のあるフライ返しをＬ児に渡すことにした。Ｌ児は受け取ったフライ返しを石けん液に付けて、左右に大きく振ってみると、数個のシャボン玉ができた。Ｌ児の表情がぱっと明るくなり、フライ返しを使ったシャボン玉づくりに繰り返し挑戦していた。２つ以上がくっついたものや、大きなサイズのものなど、様々な種類のシャボン玉ができた。新しい形ができるたびに声を上げて喜ぶＬ児の姿を見て、このタイミングでフライ返しを渡してよかったのではないかと感じた。
　この後、約２週間石けんを使った遊びは続き、興味をもって一緒に石けん遊びをする幼児が増えた。Ｌ児は、両手で大きなシャボン玉をつくったり、友達と一緒に大きなたらいを使ってたくさんの泡をつくったり、できた泡を皿やカップに入れて料理に使ったりしていた。また、Ｌ児は何度も石けん液づくりを行う中で、「水が多いとだめだよ」と友達に教える姿もあった。自ら編み出した石けんの削り方のこつを覚え、水に溶かす石けんの量が増えるほど、濃度が高くなってシャボン玉がつくりやすくなる経験が、このように友達にアドバイスできるほどになったのだと捉えた。副担任との振り返りでは、毎日更新される石けんの遊び方を話題にした。これからどんな「やりたい」が出てくるのかが楽しみであり、やりたい遊びを思い切り試すことができるようにしていきたい。そのために、まずは幼児の気持ちを肯定的に受け止め、必要な道具がある時は相談したり、幼児の育ちをよく考えてから提供するなどの援助をしていこうと方向性を確認した。

７月 16 日

Ｌ児：「先生、段ボールください」
担任：「段ボール？何に使うの？」
Ｌ児：「段ボール使って、シャボン玉ができるんだよ」
担任：「え？シャボン玉ができるの？」
Ｌ児：「そう」
担任：「そうなの？段ボールで？Ｌちゃん、やったことある？」
Ｌ児：「やったことはないけど、できるんだよ」
担任：「段ボールは、どのくらいの大きさ？」
Ｌ児：「うーん、このくらいかな」
　保育室にダンボールを探しに行く。
担任：「こんな段ボールあったけど、どう？」
Ｌ児：「いいね、でも、これだと大きいから、切らなきゃいけない」
担任：「こんなのがあるけど、どうかなあ？」

Ｌ児：「それなら切れそう」
　段ボールカッターを使って、縦 10 センチ、横 20 センチ程の大きさに切る。
Ｌ児：段ボールは穴が開いてるから。ここに石けん付けて、吹くの。ほら、できた！」
担任：「わあ、びっくりした。いっぱいできるんだね」
Ｌ児：「やったあ」
M児：「すごい、それやってみたい。どうやってやるの？」
Ｌ児：「あそこにある段ボールをこのくらいに切って、こういうのをつくると
　　できるよ」
M児：「やりたーい」

この日は朝の支度が終わるとすぐに、Ｌ児からシャボン玉づくりに使うための段ボールが欲しいという要望があった。これまで、段ボールを使ったシャボン玉遊びは見たことがない。しかし、Ｌ児はフライ返しなどでシャボン玉をつくった経験から、穴があればシャボン玉ができるのではないかと気付いたのだと捉えた。あまりに突然のことだったので担任は驚き、Ｌ児がどんなイメージをもっているかを確かめたいと考え、必要な段ボールの大きさやシャボン玉のつくり方を尋ねた。Ｌ児はそれがしっかりとイメージできているようだった。これまでの遊びを発展させた新たな遊びを「やってみたい」という、Ｌ児の気持ちが高まっていると読み取った担任は、すぐにＬ児と一緒に段ボールを探しに行った。

Ｌ児が段ボールカッターを使うのは初めてだったが、担任と使い方を確認しながら少しずつ切り進めた。まっすぐに切ることは難しくて時間がかかり、途中で斜めになってしまったが、最初から最後まで自分で切ったＬ児は達成感があったようだ。Ｌ児は、切り取ったダンボールに、すぐ石けん液に付けた。空気の通り道ができるように、石けん液を付ける場所を考えていることに驚いた。一方から息を吹き込むと、いくつものシャボン玉ができ、ふわふわと飛んでいった。これまでにないくらい、たくさんのシャボン玉ができており、うれしそうなＬ児の笑顔が印象的だった。Ｌ児が何度も繰り返してシャボン玉をつくる様子を見て、M児も興味をもった。Ｌ児が得意になってダンボールの切り方を説明する様子から、自分のイメージ通りにシャボン玉づくりができたことに自信をもち、夢中になれる遊びの一つになったのだろうと感じた。

この後、何人もの幼児が段ボールのシャボン玉づくりに挑戦した。段ボールが思い通りの大きさにならなくて、やり直すこともあったが、自分でつくった用具は愛着があるようで、シャボン玉づくりに夢中になっていた。副担任とは、Ｌ児の「やってみたい」という思いを支えることで、Ｌ児の遊びの幅が広がり、周りの幼児も興味をもって一緒に遊ぶようになった姿から、この時に段ボールを提供してよかったのだと振り返った。それと同時に、幼児が欲しいという道具を、いつどのように提供するかは、保育中に相談することも大切だと感じた。幼児が「これがやりたい」という気持ちをいつでも伝えられるように教師が聞く姿勢を忘れないようにすること、その「やりたいこと」への実現に向けて、教師が思いをしっかり受け止めて共感し、同じ目線に立って援助を考えていくことが大切だと感じている。

考察

石けんとボウルだけ用意をしたところから始まった遊びが、泡づくりに変わったり、様々な道具を使ったシャボン玉遊びに発展したりした。「やりたい」という気持ちを大切にしながら、担任は、その時の幼児の思いに合わせて道具を出すことや、「自分でできた」という達成感が得られるように、一緒に考える姿勢を大切にして見守りながら援助することを意識した。石けん液をつくる時にスプーンが見当たらなかった時は他の物で代用したり、フライ返しを使っても思ったようにできなかった時はその原因を探ったりして、Ｌ児は自分で工夫をしたり解決に向けて考えたりしていた。また、石けん液をつくる時の「水の量と濃度の関係」や、シャボン玉をつくるための「ちょうどよい息の強さ」が分かるようになったのは、繰り返し試したことによるものである。そしてＬ児は、繰り返し試して遊びに没頭することにより、友達とのかかわりが少しずつ広がっていった。一人一人が好きな遊びは何であるかを教師が読み取り、遊びに没頭する姿を支えていくことが大切であると考える。

遊びの中で、本来の思いであったはずの遊びから離れ、異なる遊びに夢中になる、いわゆる「遊びの寄り道」は、よくあることではないかと思う。教師が効率のよい方法やうまくいく方法を教えることは簡単であり、つい声をかけたくなってしまうことも多々ある。しかし、その寄り道が思わぬ遊びのヒントとなることもあるため、無理に止めたり引き戻したりするのではなく、幼児が「やりたい」と思う気持ちを大切にしていきたい。今回、Ｌ児本人が「シャボン玉をつくりたい」という思いをもって繰り返し試したことは、Ｌ児の自信や喜び、達成感につながっている。教師は主役である幼児の思いに共感し、繰り返し試す様子を見守りつつ「自分でできた」という喜びが得られるように、環境構成をしていくことが必要だと感じた。

＜４歳クラス　Ⅶ期　９～12 月＞　自信をもってかかわり、遊ぶ姿を支える

これまでの保育の様子

10 月下旬頃までは外遊びが中心であり、土に水を加えてこねた粘土で型抜きをして皿に盛り付けたり、友達と一緒に声を掛け合って砂場で水路をつくったりしていた。また、園庭を隅々まで歩き回ってカナヘビやカマキリなどの生き物を捕まえて世話をしたり、栗拾いをしてみんなで試食をしたり、どんぐりを削って粉にしたりするなど、季節の変化に応じた遊びをしていた。

N児は遊び始める時「一緒に行こうよ」と言って保育者を誘うことが多い。朝の登園時に母親と分かれることを時々渋り、何をしようか迷っているときは、保育者のそばに来て過ごしていることもあった。しかし、遊びを近くで見守っていると、できたものを見せたり、自分が疑問に思ったことを保育者に話したりして、安心して過ごせるようになってきた。保育者と一緒に出掛けることを楽しみにしており、大きな葉を見つけて喜んだり、カマキリを捕まえたりした。また、小さなカラスノエンドウをたくさん採って来てままごとに使ったり、丈の長い草を採って土山に差してネギに見立てたりするなど、豊かな発想で遊びを楽しんでいた。

Ⅶ期は「友達とのかかわりを深める時期」である。保育者と一緒にいることで、安心して遊ぶN児の気持ちを大切にしつつ、N児の目の付け所のよさや、楽しみの見つけ方を周りの友達に伝えることができれば、N児の自信にもつながり、全体の遊びの幅が広がることにもつながるだろうと考えた。N児に寄り添って遊びの楽しさを共有し、その中で少しずつ周りの友達とのかかわりが増えることを願った。

９月 17 日

ヨウシュヤマゴボウの実を１人で採りに行き、色水をつくるN児
N児：「これでジュースができるんだよ」
担任：「どうやってつくるの？」
N児：「これでつぶすんだよ」
担任：「色が出てきたね」
N児：「すごい色だー！」

N児：「泡がつくりたいんだよなー」
担任：「泡をつくってどうするの？」
N児：「この色水入れたら紫の泡になるんだよ」
担任：「そうなんだ」
N児：「石けんはあるんだけど…どうやってつくるのかなあ」
担任：「泡かあ…うーん、どうやってつくるんだろうねえ」
N児：「うーん、分かんないなあ」
しばらく石けんを色水の中に入れて混ぜる。
N児：「できないなあ」
担任：「Oちゃん、知ってるかなあ。聞いてみたら？」
N児：「えー、先生言ってよー」
担任：「N君聞いてみたら、教えてくれるんじゃない？」
N児：「えー、聞いてー」
担任：「Oちゃん」
O児：「どうしたの？」
担任：「N君、困ってるみたいなんだよね。どうしたいんだっけ？」
N児：「泡つくりたいんだけど、できないの」
O児：「つくってあげる？」
N児：「うん、つくってー」
担任：「よかったね。」

担任：「Oちゃん、泡づくり上手だね」
N児：「見て、混ぜたらきれいな色になった」
担任：「きれいだねえ」
N児：「ジュースの上に泡が乗った」
担任：「わあ、おいしそう！」

ヨウシュヤマゴボウの実を採って、色水遊びをしようと、N児はこの日１人で実を探しに行った。採りやすいところについていたものは、すでに採られており、N児は葉をかき分けて数粒の実が付いている房を採ることができた。実を一粒ずつ採って小さなカップに入れ、すりこぎですりつぶしていた。水を加えると、美

しい紫色の色水ができた。N児はこの色水をふわふわの泡に混ぜたいという思いがあったようで、石けんを持って来たのだが、泡のつくり方がよく分からず戸惑っていた。担任が「誰か知っている人いるかな…」と声を出すと、近くにいたO児が様子を尋ね、石けんをおろし金で削って色水の中に入れ、泡だて器をぐるぐる回してふわふわの泡をつくった。

石けんを使うと泡ができることは、これまで友達の様子を見て知っていたN児だったが、実際にふわふわの泡を自分でつくった経験はなかった。担任がそのつくり方を示すことも頭をよぎったが、自分で挑戦したり友達に聞いたりするかもしれないと思い、しばらく様子をみていた。しかしN児は「できないなあ」と何度かつぶやき、ボウルの中に入れた石けんを手で混ぜていた。担任は、泡づくりが得意で、これまでも何度も経験があるO児が近くにいることをN児に伝えた。しかし、N児はO児につくり方を聞くのではなく、担任に聞いてほしいと要望した。

石けんを水の入ったボウルを持っているものの、その後どうすればよいのか分からず、自信がなかったため、O児に聞くことができなかったのかもしれない。もしくは「泡をつくりたい」という思いが、十分に高まっていなかったのかもしれない。この時、泡をつくってどうしたいのか、何をして遊びたいのか等と問いかけ、N児の気持ちを十分に受け止めることができれば、自らO児に聞くきっかけとなったかもしれない。担任は、遊びの中で「できた」という体験が、N児にとっての自信につながるであろうと考え、担任からO児に声をかけ、N児と話すきっかけをつくった。N児は、O児のつくった泡と色水をグラスに注いで、ジュースをつくったり、紙の上にのせて筆で絵を描いたりする遊びに発展した。

N児は自分からO児に声をかけることはしなかったが、困っていることを担任に話し、少しのきっかけがあれば、N児のしたいことがどんどん広がっていくことが副担任との振り返りで話題となった。また、保育者が見守りながらN児の思い高めることが、周りの友達とのかかわりを自ら求め、育ちにつながっていくのではないかと考えた。

11 月上旬から中旬にかけて、室内での遊びを充実させようと、副担任と相談して環境構成を徐々に行った。保育室では空き箱や段ボール、ペットボトルキャップなどの廃材、スズランテープ、ガムテープ、ペンなどを自由に使えるように用意した。それらを使った製作活動が楽しめるように、テーブルを保育室の真ん中に設置した。また、保育室の角はままごとコーナーとしてコンロや鍋、食器などを設置した。遊戯室では、大型積み木やフラフープ、大縄などで自由に遊べるようになり、幼児は屋外へ出る時間より、徐々に各保育室と遊戯室の行き来をする時間が多くなり、廃材で好きなものをつくったり、大縄にチャレンジしたりするようになった。N児は、朝の支度が終わると担任や副担任のそばに来て、もたれかかるような仕草をすることがよくあり、何をしようかと戸惑っている様子があった。それでも、周りの友達の様子を見て、様々な廃材の中から好きな材料を選び、製作をするようになってきた。

11 月 25 日

副担任：「えっ、この釣り竿N君がつくったの？」
N児：「うん、そうだよ」
副担任：「そうなの?この糸は？糸なんてなかったのに、どうしたの？」
N児：「ここの、ガムテープの所から出てたやつ使ったの」
副担任：「ええ!すごい、びっくりした。あれ？この棒は?」
N児：「これも、ガムテープでつくったんだよ」
副担任：「棒、なかったのに自分でつくったの？すごい、天才！どうやって遊ぶの？」
N児：「ここに餌付けて、魚釣るの」
副担任：「わあ、すごい。よく考えたね、」
O児：「それなあに？」
N児：「魚釣り」
O児：「どうやってやるの？」
N児：「こうやって、釣るの」
O児：「すごい、やってみたい」
P児：「なにそれ？」
N児：「魚釣り」
P児：「やらせて、やらせて」
N児：「いいよ」

この日、N児は廃材を使って釣りの道具をつくっていた。釣り糸の部分をつくり始めたのだが、保育室には糸は置いていない。代用できるものが見つかればよいと考えていたが、まさかガムテープから出ている細い繊維を見つけるとは思いもよらなかった。副担任は、自分が試行錯誤しながら釣り竿をつくり出した姿に心を動かされ、その感動をN児に伝えた。その「糸」を発見したことで魚釣り遊びの用具が揃い、N児は得意になって魚を釣る様子を披露した。すると、周りにいた幼児がその様子を見て興味をもち、釣竿を持って魚

釣り遊びをしていた。５歳児も数名一緒に遊んでおり、N児はその姿を見てとても満足そうな表情を浮かべていた。
　この日の振り返りでは、ガムテープから出た糸を使おうという発想、それを使うことによってうまく釣り竿をつくった感動を、副担任がN児と共有したことが、N児の自信につながったのではないかと話し合った。N児が自信をもつためには、教師は時に、一人の遊びの仲間としてかかわるスタンスも大切であると考えた。だからこそ、同じクラスの友達だけではなく、クラスの枠を超えてN児の周りに幼児が集まって釣りで遊び始めた時、よい表情でかかわっており、その姿をうれしく感じた。
　この日は魚釣り遊びの用具を全て持ち帰り、家族にもその遊び方を披露したことを母親から聞いた。翌日、魚釣りの用具を登園の時に持って来て、担任に遊び方を見せた。魚の種類が増え、糸の先に付けるための予備のガムテープも増えており、まとめて持ち運びができるように、片付け方まで考えられていたことに驚いた。また、折り紙でつくった魚には、何度も遊ぶことができるように表も裏もテープが貼ってあった。その考えに感心し、自ら工夫してつくるN児の思いを大切にしていきたいと考えた。そして、N児が自信を高めることで、自然と他の人にも見せたいという思いが生まれてくるのではないかと考えた。そこで、副担任と相談して、新聞紙を遊びに用いることにした。新聞紙は、簡単に形を変えることができ、幼児自身が感じたことを自由に表現することができる。また、イメージ通りの製作も可能であり、何かに見立てて遊ぶことができるため、遊びの幅が広がって創造性を育むことができる。
　そこで「みんなの時間」に新聞紙を使う機会を設定した。季節の製作として、新聞紙とカラーガムテープを使ったクリスマスリースをつくり、翌日は来年の干支であるヘビをつくった。ガムテープを使うことで、新聞紙を思い通りの形に整え、カラフルに仕上げることができるよさがある。幼児は、楽しみながら自分の思い思いの製作物をつくっていた。

12 月 11 日

N児：「今日は忙しいんだ」
担任：「どうしたの」
N児：「頼まれたやつをつくらなくちゃいけないからさあ」
担任：「何を頼まれたの？」
N児：「Q君。ピクミンつくってって注文があるから」
担任：「そうなんだ、注文があったんだね。昨日つくったやつ、かわいかったね」
　１人で集中して注文があったマスコットをつくる。
担任：「Q君、何つくってるの？」
Q児：「ご飯入れるところ。」
担任：「誰のご飯？」
Q児：「このピクミン。N君につくってもらったの」
担任：「そうなんだ。かわいいねえ。Q君、注文したの？」
Q児：「そう」
担任：「そうか、Q君よかったね」
Q児：「そう、だからご飯がいるでしょ？この中に入れて、蓋も付けるの」
担任：「いいアイデアだね。N君、Q君がピクミンのご飯つくってるんだって。」
N児：「うん」

　新聞紙とガムテープを使ったマスコットづくりは続いていた。初めはボールのような形だけだったものが、他の色のガムテープを使って目や鼻を付けたり、耳を付けたりするようになり、次は体をつくるようになっていた。体には手足や羽が付き、頭部の形も丸ではなくて、先がとがったような形をつくるようになり、少しずつ形が難しくなっていた。両手で抱えるほどの大きさのマスコットをつくっていた。それを見ていたQ児はN児にマスコットをつくってもらうことをお願いしていた。
　この日の登園の受け入れの際、母親からN児が園に早く行きたいと言っていたことを聞いた。Q児からマスコットづくりを頼まれたことを家で話していた。期待に応えたいという気持ちが表れている様子だった。自分の好きなことが友達に認められたことが、喜びにつながったのだと感じた。朝の支度を終えると、すぐにマスコットづくりに取り組むN児の姿があった。
　マスコットが完成してQ児に渡すと、Q児は待っていましたと言わんばかりの様子で、N児から受け取った。そして、次にQ児が始めたことは、そのマスコットのご飯づくりであった。マスコットと同じ色のガムテープを廃材に貼り、ガムテープでつくったご飯を入れ、蓋を付けた。その隣でじっと様子を見ているN児。多くの言葉を交わしているわけではないが、Q児がマスコットを大切にしていることは、ご飯をつくる様子から伝わったのではないかと思う。N児は、Q児の隣でまた新たなマスコットづくりに夢中になった。自分の得意なことをとことん突き詰め、友達からも頼られるようになったN児は自信に満ち溢れていた。
　この日の振り返りでは、これまであまりかかわりのなかったQ児とのやりとりが話題となった。N児のつ

くっているマスコットが魅力的であることに気付いたQ児。なんといっても、N児が夢中になって楽しい雰囲気でマスコットづくりをしていたからこそ、Q児の依頼へとつながったのだろう。そしてN児にお願いしたことで２人の関係がぐっと近くなったようだった。かかわりは、遊びの時間だけではなく、くらし全体で捉えていくことが大切だと感じた。毎日、N児はマスコットづくりをするようになり、作品も増えてきた。そしてこの頃から、N児がつくっているように新聞紙とカラーガムテープを使って、マスコットをつくる子どもたちが増えてきた。そこで、ガムテープの色を何色か用意し、新聞紙やポリ袋、空き箱、トイレットペーパーの芯などをすぐ手に取ることができる場所に置いて環境を整えた。

12 月 18 日

R児：「今日はN君とＳ君と遊ぶんだー」
担任：「なんだか楽しそうだね、何するの？」
R児：「一緒にこの子（マスコット）の家つくるの。N君、Ｓ君一緒にやろうよー」
N児：「いいよー」
Ｓ児：「最初何から始める？」
R児：「じゃあさあ、これ（新聞紙）が家ってことね」
N児：「ここはどうする？」
R児：「えー、どうする？お風呂とかかなあ」
Ｓ児：「あと、ここにベッドつくったら？」
R児：「いいねー、じゃあ私ベッドつくろう」
N児：「いいよー」
R児：「こうやって寝るのはどう？」
N児：「いいね」

R児は、N児のマスコットづくりを真似して、自分でマスコットをつくる遊びをするようになっていた。自分でつくったマスコットを大切にして、担任にもよく見せてくれた。この日の前日、N児が新聞紙を広げてその上に空き箱などを置いて、家をイメージするような遊びを始めた。その様子を見たR児が、マスコットを持って、その家の中でマスコットを動かしながら一緒に遊ぶようになった。このように、マスコットを使って共通したイメージをもって遊ぶことは、これまで見られなかった。その遊びが楽しかったようで、この日は朝からR児が張り切っていた。Ｓ児を含めた３人で新聞紙を広げ、空き箱を組み合わせて風呂やベッドなどをつくり、それらをガムテープで新聞紙に貼り付けて「家」をつくっていた。

振り返りタイムでは、N児にとって「かかわり」とは何かについて話題になった。遊びはR児が中心となって声をかけていたが、Ｓ児とN児もそのイメージを共有して一緒に家具をつくり、マスコットをその場で動かしながら３人が同じ空間で遊んでいた。互いにつくっているものを確認したり、友達がつくったものを使ったりして遊んでおり、３人での会話は決して多くはないが、かかわっている姿であると捉えた。遊びに夢中になれるような援助や環境構成を続けてきたことで、N児は自分の遊びに自信をもつことができ、それがかかわりにつながったのだと考えた。

考察

保育者の近くにいて遊ぶことが多かったN児が、自分のしたい遊びを見付けて夢中になって遊び、その遊びを通して周りの友達からも頼られるようになったことは、大きな成長だと感じた。「早く幼稚園に行きたい」という言葉にN児が遊びに夢中になり、自信をもっている姿が表れているのではないだろうか。自信をもつことが、友達にも見てほしい、友達と一緒にやってみたいという思いにつながり、自然とかかわりが生まれてくるのではないかと考えた。

また「かかわる」とはどういうことなのか、自分自身の捉えも広がった。N児のように言葉は交わしていなくても、ものを通してかかわること、自分のつくったもので友達が楽しく遊んでいる場面をみることも、N児にとっては育ちというべき「かかわり」なのではないだろうか。

N児の発想やアイデアは、担任や副担任の思いを超えることが多く、作品ができると担任や副担任に披露していた。その都度、担任や副担任は、作品の出来栄えだけではなく、つくり方や遊び方、工夫したところなど尋ねながら発見や感動を共にした。幼児の発見や感動を共有することで、教師も楽しくなる。その楽しい雰囲気は、周りの幼児たちにも伝わり、遊びの様子を見て興味をもったり、一緒にやってみようとしたりするきっかけとなったのだと思う。教師が幼児同士のかかわりをつなぐことは時に大切であるが、教師が幼児と共に心を動かすようなスタンスでいることによって、子どもたちのかかわりたいという思いを高めていくことが大切なのではないだろうか。

＜４歳クラス　Ⅷ期　１～３月＞　幼児のしたい遊びから自信につなげる援助

これまでの保育の様子

１月になり、気温が下がったので、子どもたちの遊びの場が、屋外から室内に移行してきた。そのため、保育室はロッカーの位置を替え、製作の際に使う道具類が手に取りやすいようにしたり、製作したものをみんなが鑑賞できるように、窓際に作品を置くスペースを設けたりして環境を整えた。また、段ボールや空き箱などの廃材の他、かるたやこま、あやとり、折り紙などを自由に使えるようにした。遊戯室では一輪車や大縄、大型積木などで遊ぶ幼児が多くいた。

そのような環境の中で、Ｔ児は、友達の遊びの様子を見ながらついていき、自然と一緒にその場に入って遊ぶ姿が見られた。しかし、突然「ママがいい」と言って、しくしくと泣き出すことがあった。そこで担任は、Ｔ児と会話をしながら、好きな遊びを一緒に探すことにした。遊戯室では、５歳クラス児たちが段ボールでつくった「自動販売機」で遊んでいた。５歳クラスａ児は、ボタンを押すと、好きな飲み物が出てくるところをＴ児に見せてくれた。Ｔ児はじっとその様子を見て、つくり方や仕組みをその場で覚え、家へ帰ってからすぐにつくった。次の日の朝、Ｔ児がつくった自動販売機を母親と一緒に持って来て、担任に見せた。担任は、他の友達にも見せようと声をかけたが「先生だけでいい」と、Ｔ児は断った。自動販売機は丁寧につくってあり、５歳クラス児がつくったものをそのまま再現していたことに担任は驚いた。Ⅷ期に入ってからも、友達が廃材やカラーテープを使ってつくった鉄砲を真似してつくり、自動販売機の時と同じように、母親と一緒に担任にそっと見せてくれたことがあった。

この姿を見たとき、Ｔ児が、遊びに夢中になり、自信がついてくると、友達にも見せたいという思いが生まれてくるのではないかと考えた。Ⅷ期は「友達とのかかわりを深める時期」である。Ｔ児が、好きなことや得意なことに自信をもつことで、Ｔ児のよさを友達同士で認め合うことを願い、援助をしたり、環境を整えたりしていこうと、副担任と共有した。

１月２８日

担任：「わあ、すごいね。折り方覚えてるの？」
Ｔ児：「うん」
Ｕ児：「何してるの？」
Ｔ児：「紙飛行機つくってる」
Ｕ児：「私もやりたい。先生Ｔ君のと同じ紙くーださい」
　折り紙を始める。
Ｕ児：「えー、最初ってどうやって折るの」
Ｔ児：「最初は、ここ折って」
Ｕ児：「次は？」
Ｔ児：「今度、ここ折って」
Ｕ児：「できた。飛ばしに行こうよ」
Ｔ児：「うん」
Ｕ児：「せえの、で飛ばそうよ」
Ｔ児：「いいよ、せえの…」
担任：「すごい、Ｔ君のよく飛ぶね」
Ｕ児：「私ももっと飛ばないかなあ」
担任：「どうすればいいのかなあ」
Ｔ児：「うーん、ここを折る？」
Ｕ児：「やってみよう」
Ｔ児：「うん」
Ｕ児：「あ、すごい。さっきより飛んだかも」
担任：「本当だ、さすがＴ君」
Ｔ児：「先生、これ付けたー」
担任：「紙テープ付けたんだ。こんな飛行機初めて見たよ」
Ｕ児：「すごーい。じゃあさ、この中（フラフープ）に入れる？」
Ｔ児：「いいよ」

この日は、Ｔ児が担任に飛行機を折るために紙が欲しいと要望した。折り紙ではなく、長方形の紙が欲しいとのことだったので、Ａ４のコピー用紙を渡した。Ｔ児は、家で何度もつくっているようで、慣れた手つきで紙飛行機を折り進め、すぐに完成させた。その様子を見て、Ｕ児が興味をもち、Ｔ児に折り方を聞いて紙飛行機をつくった。

Ｔ児は、紙飛行機を１人でつくっていたのだが、担任は、Ｔ児がどんどん折り進めていく速さや、紙の端ま

で丁寧に折っている様子に驚いていた。きっと、この紙飛行機はこれまでに何度もつくっており、自信をもっているのだろうと読み取った。飛行機が完成する頃、U児がT児の姿を見て一緒に飛行機をつくることになった。U児は、紙飛行機をつくった経験があまりなかったようで、その折り方をT児に聞いた。T児は、初め１人で紙飛行機をつくろうとしていたのだろうが、U児につくり方を尋ねられると、その工程を１つずつ見せながら、丁寧に教えていた。その姿は、まさに自信にあふれている姿であると読み取った。U児は完成した紙飛行機に名前を書いており、大切にしたいという気持ちが読み取れた。紙飛行機が完成して、２人で遊戯室に行って何度か飛ばしてみたが、U児の紙飛行機はなかなか遠くまで飛ばなかったので、T児は、U児の紙飛行機の先端の部分を折ってみるとよいことを提案した。少し先端を折ってみると、初めの時よりも少し遠くまで飛ぶようになり、U児もうれしそうな表情を浮かべた。また、T児が自分の紙飛行機の後ろ側に紙テープをいくつか付けて、飛ばしている姿からは、さらに工夫して楽しく遊びたいという気持ちがあると読み取った。また、U児はフラフープを持って来て、その中に紙飛行機を通そうという遊びを思いついた。

T児だけで紙飛行機をつくっていたのであれば、きっとこのような遊びは思い浮かばなかっただろう。T児は、U児に紙飛行機のつくり方を教え、うまく飛ばなかった原因を考えて紙飛行機の調整をしたことで、きっと自信をもったのだと考える。また、T児の保護者から、家でも折り紙遊びを楽しみ、新しい作品を次々につくっていることを聞いた。副担任との振り返りでは、T児がいきいきと紙飛行機遊びを楽しんでいる姿について話題となった。この日のように、T児が遊びに夢中になれるような環境を整えることが、T児の自信を高め、友達と生き生きとかかわる姿につながるのではないかと考えた。そこで、A４サイズのコピー用紙の他、折り紙を何色か用意し、すぐに折ることができるように、低いテーブルを保育室に置いて、環境を整えた。

１月３１日

折り紙を２枚組み合わせて、こまをつくるT児
担任：「何つくってるの？」
T児：「こま」
担任：「それ、こまなの？回るの？」
T児：「うん、こうやって…」
担任：「本当だ、回ってる。すごーい」
V児：「何？それ。私もほしい」
W児：「え、何それ、何それ。ぼくもつくってほしい」
担任：「本当、すごいよね。T君がつくり方を知ってるみたいですよ」
V児：「私つくりたーい。どうやってやるの？」
W児：「ぼくもやりたい。いい？」
T児：「いいよ」
V児：「最初、どうするの？」
T児：「じゃあ、好きな色を２枚取って」
W児：「２枚？これとこれでもいい？」
T児：「いいよ」
V児：「私、これにする」
X児：「なに？それ、すごい」
V児：「今ねえ、T君が教えてくれてるの」
X児：「いいなー、それほしい」
T児：「やる？」
X児：「うん」
T児：「じゃあ、２枚取って」
V児：「それで、どうやって折るの？」
T児：「こうやって折って」
X児：「え、分かんない」
T児：「最初、折る？」
X児：「うん」

この日、折り紙コーナーではT児が折り紙を２枚使った「こま」をつくっていた。１枚目と２枚目で異なる折り方をしたものを、慣れた手つきで組み合わせたこまは、片手で回すとくるくるとよく回った。それを見たV児、W児が興味をもち、こまがほしいと言った。

T児がその２人の分をつくって渡すことは簡単かもしれない。しかし、T児がつくり方を教えることで、T児にとってはかかわりの中で遊ぶことにつながり、つくり方を教えてもらう２人にとっては、自分でつくった喜びにつながると考え「T児がつくり方を知っている」ことを伝えた。T児は、２人に折り紙を２枚選ぶ

ように伝え、折り方を説明していると、X児がそのこまに興味をもった。その後も１人増え、みんなに折り方を順番に教えていた。それぞれのペースが異なるので、T児は１人ずつの進み具合を見ながら次の折り方を教え、分からないところは、代わりに折ってあげるなど、忙しそうにしていたのだが、穏やかに教えていた。きっと、自分しかできない折り方をたくさんの友達に教えている背景には、遊びに夢中になることで自信を高め、友達にも教えたいという思いが生まれたのだろうと読み取った。

この日から、T児は毎日のように折り紙コーナーで遊ぶようになった。初めは１人で折っていても、T児の作品を見て、つくってほしいという友達が集まってきた。T児は、こまだけではなく、鶴や飛行機、３枚の折り紙を組み合わせる立体などをつくっており、その都度「どうやってやるの」と周りに友達が集まってきて、折り紙教室のようになった。普段、T児はあまり口数が多い方ではないのだが、折り方を教えている時は、声のボリュームが大きくなり、表情から自信に満ち溢れていると感じた。折り紙の作品がつくれると、幼児たち友達や職員のとこへ「見て見て。T君に教えてもらった」と嬉しそうに作品を持って見せに来る姿から、周りの幼児たちも、T児は折り紙が得意であると感じていたようである。折り方が分からず、担任のところへ聞きに来ることがあるが「誰か知ってる人いるかなあ」と返すと「あ、T君に聞けばいいんだ」と、すぐにT児の名前が挙がるようになった。

副担任との振り返りでは、折り紙で新しい作品をつくって披露するT児の遊びの幅の広げ方について話題となった。同じサイズの折り紙だけではなく、サイズの異なる折り紙を出してみると、さらにT児が遊びに夢中になり、自信を高める姿が生まれるのではないかと考えた。そこで、これまで使っている大きさの４分の１のサイズの折り紙、そしてさらに小さいサイズの折り紙、これまでよりもさらに大きいサイズの折り紙を使えるように環境を整えた。

２月５日

Y児：「先生、これ見て！」
担任：「なに、なに？」
Y児：「これ、すごくない？T君がつくったんだよ」
担任：「こんなに小さいやつ？どうやってつくったの？」
Y児：「ねー、すごいよね」
T児：「ぼく、その折り方教えるよ」
V児：「私も小さいやつで折りたい」
担任：「どうやったらそんなに小さな折り紙でできるの？」
T児：「えー？普通に折ったらできるよ」
Y児：「私もこれからやるんだ」
　折り紙を始める。
Y児：「これって、ここからどうするの？」
T児：「これ、今までとおんなじだから…ここに入れて」
Y児：「え？ここ？」
T児：「うん」
Y児：「えー、小さくて難しい」
担任：「ほんと、小さいね。できそう？」
T児：「できるよ！」
Y児：「すごーい、できてる」
V児：「本当だ、すごい。かわいい」

T児は、小さい折り紙を使っての作品づくりに夢中になり、これまでと同じように、こまや鶴などを、つくっており、T児と同じように周りの幼児たちも小さい折り紙を使った作品づくりをするようになっていた。しかし、やはり大きさが変わると、なかなかうまく折れなくなるため、途中であきらめてしまう幼児もいた。その中で、T児の手の器用さは一段と素晴らしく、どの作品を見ても、驚くばかりであった。紙が小さいから、簡単な作品にするのではなく、折り紙を２枚組み合わせたこまや、３枚組み合わせた立体作品も仕上げていた。T児の作品を見て、Y児は担任にその素晴らしさを伝えた。T児は、Y児が担任に作品を紹介しているやりとりを、にこにこしながら見ており、担任にもその作品の１つを手の平に載せて、そっと見せた。その語、小さい折り紙での折り方を教えるとY児に話した。自ら教えたいというT児は、得意げな表情をしており、すぐに折り紙のある場へ戻って折り始めた。途中で、折り方が難しいと感じられる場面でも「できるよ！」ときっぱりと話すT児からは、今までには見られなかった力強さが感じられた。

これほどまで折り紙遊びに夢中になっているT児は、まさに自信を高めていると感じた。以前のように、友達の遊ぶ様子を見て追うのではなく、自分のしたいことを十分に楽しんでおり、友達にも自信をもって教えている。保育室のみんなの目の届く場所に机と折り紙を毎日用意したことで、折り紙を折っているT児の姿が、多くの幼児の目にふれる機会ができたのだと思う。

副担任との振り返りでは、Ｔ児の自信は言葉だけでは読み取れないのではないかということが話題になった。遊びに夢中になっている時の表情、作品をそっと持って来る姿などから、Ｔ児が自信をもっているだろうことが読み取れた。

この頃、お楽しみ発表会で何をしたいかをクラスの幼児に尋ねた。大縄、一輪車、ダンス、マジックなど、幼児たちがそれぞれ好きな遊びを挙げていたのだが、Ｔ児は「折り紙を見せたい」と担任に話した。やはり、自信を高めているＴ児の姿ではないかと感じた。そこで、Ｔ児と話し合いながら、黒い画用紙に作品を１つずつ貼って紹介することにした。これまでの作品のすべてがよく見えるように、向きや場所を考えながら、四つ切の黒い画用紙に、１つずつ貼っているＴ児は、とてもうれしそうな表情をしていた。

Ｔ児の折り紙遊びは、この後も継続していた。新しい紙飛行機の折り方に挑戦したり、折り紙を蛇腹のように折ったものをいくつも組み合わせた作品をつくったりしており、新しい作品が次々にできた。担任だけではなく、友達からも認められたことで、Ｔ児の大きな自信につながったのだと感じる。

考察

周りの友達の様子を見ながら遊んでいたＴ児が、折り紙遊びに夢中になり、友達に折り方を教えたり、さらに高度な折り方に挑戦したりするようになった。これまで、自分の作品をそっと担任に見せに来ることがあったが、友達にその作品のよさを認められ、称賛されたことで、Ｔ児にとっての大きな自信につながったと考えられる。お楽しみ発表会で、折り紙の作品を１人で堂々と披露したことは、Ｔ児にとっての大きな成長だったのではないだろうか。

Ｔ児が、好きなことや得意なことに自信をもつことで、Ｔ児のよさを友達同士で認め合うことを願い、援助や環境構成を考えてきた。Ｔ児が折り紙で作品をつくると、担任や副担任の近くに来て、ほほえみながらそっと見せたり、完成した紙飛行機を持って遊戯室に行き、職員の前で飛ばしたりする姿から、「見て！」という言葉はなくとも、自分の作品に自信をもち、たくさんの人に見てほしいという気持ちがあるのだと読み取った。自信の高まりを捉えるためには、その時の表情や、行動、しぐさ、目線など、幼児の姿全体から読み取ることが大切であり、言葉だけにとどまらないのだと感じている。だからこそ、幼児が何をしようとしているのかをあらゆる面から読み取り、その子なりの自信の高まりを感じる目を養うことを大切にしていきたい。

＜５歳クラス　Ⅸ期　４・５月＞　遊びの充実が、５歳クラスになった喜びの実感へ

これまでの保育の様子

４月、５歳クラスとしてのくらしがスタートした。進級し、期待に満ちた表情をしていた幼児たち。昨年度までに自分が好きだった遊びを思い出しながら、生き物探しや泥遊び、料理づくりの遊びを思い切り楽しんでいる様子が見られた。Ⅸ期は、「５歳児になった喜びを感じる時期」である。教師は、５歳クラスならではの遊びの環境を整えることで、進級した喜びを感じられるのではないかと願い、テラスの環境を大きく更新することにした。具体的には、テラスに置いてある遊びに使わないものはすべて撤去し、５歳クラスにしかない道具を手に取りやすいように整理したことである。また、テラスの前にロッカーを設置し、個々の名前シールを貼って、自然物でつくった料理や作品を「自分の場所」にとっておけるようにした。４歳クラスの時には使ったことがなかった道具を使えるようにしたり、自分だけの保存場所をつくったりすることによって、５歳クラスとしての特別感のような思いが生まれてくることを願いながら、幼児の遊びを日々見守っていた。

その一方で、幼稚園のリーダーとしてがんばりたいという思いも支えていきたいとも願っていた。５歳クラスでは、例年、片付けの後に園庭全体の見回りを行い、残っている道具を片付けるという「うみ組パトロール」をしていた。この「うみ組パトロール」も、５歳クラスとしての喜びにつながるのではないかと捉え、パトロールでのがんばりを支えていこうと、援助の方向性を副担任と共有していた。

４月２３日　片付けの時間

B児：「ねえAくん、もう片付けだよ。『３』（11 時 15 分）になったら、うみの楽しいことが始まるよ」
A児：「分かってるよ、これだけつくったら行くから」
B児：「でもさ、私たちはうみ（５歳クラス）だから、もうパトロールに行かないといけないよ」
A児：「はいはい、『２』になったらやめるよ」
B児：「それだと、もうパトロール終わっているかもよ」
A児：「大丈夫だよ」
B児：「じゃあ、もう私行くね。パトロールに行ってきます」
教師：「Aくん、まだやりたかったんだね」
A児：「うん」
教師：「この後、うみの楽しいことがあるけど、『２』（11 時 10 分）なら間に合いそうだね」
A児：「うん」
『３』（11 時 15 分）になり、A児以外の全員が保育室に集まる。
B児：「Aくん、遅かったね。もう始まるよ」
A児：「ねえ、見て。すごいのつくったよ」
B児：「わあ、すごい。まん丸でかわいい」
A児：「これさ、すごいんだよ。ほら、こんなに転がるの」
教師：「わあ、本当だ。おもしろいのつくったね」
A児：「これさ、みんなにも見せたいんだけどいい？」

この日A児は、片付けの時間に一人で５歳クラスの畑で、自分の育てている野菜に水やりをしていた。その様子を見ていたB児がパトロールを促すような声をかけるが、A児は丁寧に水やりを続けていた。教師はこのやりとりを見守りながら、B児とのかかわりの中で、A児が自分の気持ちに折り合いをつけ、パトロールに目を向ける姿を願っていた。『２』で遊びをやめるのであれば、パトロールをして保育室に戻ってくる時間も十分にあると捉え、A児のまだ水やりを続けたい思いに共感しながら、「『２』なら間に合いそうだね」と言葉かけをすることにした。

しかし、保育室に戻ってきたのは『３』を過ぎた頃であった。A児の手には、整った形の泥団子が見えた。畑の水やりの最中に土にふれ、泥団子をつくることを思いついたのではないかと捉えた。B児は泥団子に心が動き、その感動をA児に伝えていた。願っていた「うみ組パトロール」とは少し違う姿ではあったが、教師もその泥団子の出来映えに心が動き、その感動を伝えた。B児と「うみ組パトロール」のやり取りをしているときは、A児はどこか表情が曇っているように感じたのだが、この時は一転して、晴れやかな表情であった。

教師は、A児をこれからどう支えていこうか迷っていた。そのようなとき、研究交流の一環でT園を参観に行く機会があった。T園の幼児は、友達と会話をしながら夢中になって料理づくりをしていた。T園５歳クラス担任は、料理を食べる客になり、まるで幼児の遊びの仲間であるかのように感動を共有していた。片付けの時間になると、料理づくりをしていた幼児は、料理が入ったボウルを４人で持ち、「わっしょいわっしょい」と言いながら、まるでおみこしを運ぶかのように、生き生きと片付けをしていた。片付けが終わった後の達成感のある表情には、心を動かされた。まさに、教師が思い描いていた５歳クラスになった喜びを実感する姿であった。

T園の参観を通して、教師は２つのことに気付いた。一つは、「うみ組パトロール」への願いが先行し過ぎ

て、焦っていたことである。教師が焦っていると、何となくその焦りが幼児にも伝わり、幼児も不安な思いになってしまうことがある。もっと長期的な視野をもち、A児の育ちを支えていこうと捉え直した。もう一つは、遊びの充実が、「うみ組パトロール」へのモチベーションの源になるのではないか、ということである。これまでにも、遊びで自分の思いが実現しにくかった日は、何となく片付けも停滞しているような感覚があった。遊びの中で十分楽しんだ充実感や達成感が、気持ちの折り合いにつながるのではないかと捉え直した。

A児はこれまでも、楽しそうに遊んでいるように見えた。しかし、A児の遊びが本当に充実しているのかを、もう一度しっかりと読み取っていこうと、今後の方向性を副担任とともに確認した。

５月２日　遊びの時間

A児：「Cちゃん、袋の準備はいい？」
C児：「うん、入れたよ。」
A児：「それは、味付けだからね。柔らかくしてね」
C児：「うん」
A児：「じゃあ焼くから、ここに載せて。油もちゃんとかけてね」
C児：「これ？」
A児：「そうそう、それ。焼いたらさ、この葉っぱに入れるから。
　　ねえ、先生もほしい？」
教師：「え、いいの？じゃあ一つもらおうかな。何ができるんだろう」
A児：「これはハンバーガーだよ」
教師：「わあ、これはすごい。Aくんは料理の天才だね！」
A児：「お会計はスマホでいいですか？」
　教師は、A児からもらったハンバーガーを持ったまま園庭を歩く。
４歳クラス副担任：「５歳クラスの先生、それは何？すごいですね」
教師：「これですか？Aくんがつくったんですよ、すごいですよね。
　　しかも、料理の工程にちゃんとこだわってつくっているんです」
４歳クラス副担任：「わあ、素敵。私もAくんのところに行ってみますね」
教師：「ぜひ、行ってください！びっくりしますよ！」
　４歳クラス副担任がA児のところへ行く。４歳クラス児・５歳クラス児もA児のところへ集まってくる。
４歳クラス副担任：「Aくん、ハンバーガーがおいしそうだったから、私も来ちゃった」
A児：「４歳クラスの先生もほしいの？今つくるから。待ってて。」
４歳クラスａ児：「ねえ、僕もつくってほしい」
D児：「私も食べたいな」
A児：「はい分かったよ。順番につくるから、待っててくださいねー」

この日、A児は、テラスで料理づくりをしていた。A児は、肉に見立てた赤土を袋に入れ、ちょうどよい固さになるまで、手で揉んでほしいとC児に頼んでいた。これは肉に下味をつける工程であると捉えた。バーベキューの網の上に油に見立てたボトルの水をかける、網の上の肉をしゃもじで裏返すといった工程も、遊びの中で表現しているように読み取った。教師は、この様子を少し離れたところから見守りながら、心が動いた。A児がこんなにも料理の工程にこだわってつくっていたことを初めて知ったからである。A児は教師が近くにいることに気付き、「ねえ、先生もほしい？」と言葉をかけた。そして、ハンバーガーをつくって教師に渡した。その時の表情は、何にも代えがたいほどの笑顔であった。

教師はこのとき、もしかしたら、このハンバーガーを他の幼児や職員が目にするきっかけがあれば、A児の遊びの充実につながっていくのではないかと考え、ハンバーガーを持ったまま、園庭を歩いてみることにした。園庭を歩いていると、最初に心を動かしたのは、４歳クラス副担任であった。４歳クラス副担任は、近くにいた４歳クラス児と一緒に、A児のところへ行き、その感動を伝えた。後から４歳クラス副担任と話し、A児は光輝くような表情でハンバーガーをつくっていたと聞いた。

副担任との振り返りでは、この日のA児の遊びは、充実していたのではないかと話し合った。A児のところに、自然と多くの幼児や職員が集まり、A児がしていることにみんなで心を動かしたこと、みんなで楽しさを共有したことを「充実」と捉えた。やはり楽しい雰囲気のところやおもしろいことをしている場には、自然と人が集まり、自然とかかわりが生まれ、自然と認め合いが生まれる。また、教師が料理の工程にこだわる遊びの「楽しさ」を読み取ることができたのは、T園を参観し、自身の保育を捉え直したからではないかと共有した。改めて他の園の保育や、見方・考え方にふれることの大切さを実感した。

４歳クラス担任が、A児のところから離れた後は、５歳クラスの副担任が、A児のハンバーガー屋さんの看板づくりを支えたことを聞いた。やはり、その時にも、笑顔で看板をつくっていたそうだ。今後も、A児の料理遊びがさらに充実していくためにはどうすればよいかを、副担任とともに考えた。A児は多様な料理や、料理の工程について知識がある。そこで、多様に料理づくりを楽しむ姿を思い描き、ふるい、計量カップ、プ

ラスチックのグラスなど、調理や食事に使う道具の種類を増やしてみることにした。

５月９日　遊びの時間～片付けの時間

A児：「今日はカレー屋さんをしよう」
E児：「じゃあ私は、ご飯を取ってくるね」
A児：「僕はカレーをつくるから。今日は外国のカレーと日本のカレー
　　をつくって、レストランにしたいな」
B児：「外国のカレーって、何？」
A児：「ほら、緑色のだよ。待ってて、葉っぱを採ってくるから」
　A児が戻ってくると、補佐員と３歳クラス児が椅子に座る。
補佐員：「わあ、おいしそうなお料理。ここはレストランかしら」
A児：「そうだよ。補佐員の先生とそらさんも食べていく？」
３歳クラスａ児：「うん食べたい」
A児：「それでは、まずはお水をどうぞ」
補佐員：「ありがとう。本当のレストランみたい」
A児：「カレーができるまで、少々お待ちください」
　カレーが出来上がる。
補佐員：「わあ美味しそう。いただきます。おいしいね」
３歳クラスａ児：「おいしい」
教師：「わあ、今日もレストランが大繁盛だね」
A児：「まあ、うみ組は料理上手だからさ」
教師：「さすが、料理の天才！」
　片付けの時間になる。
A児：「Eちゃん、片付けてパトロールに行こう。うちらはうみ組なんだから」
E児：「うん、早く片付けよう」
A児：「じゃあ、これを僕が運ぶから、Eちゃんは洗ってくれる？」
E児：「分かったよ」

　ハンバーガーづくりをしていた日から、この日までの１週間、A児の料理づくりは、つくるものや場所を変えながら続いていた。この日は、カレー屋さんをしていた。教師は少し離れたところからその様子を見守っていた。A児とB児E児の会話を聞きながら、A児のつくった料理は、日本のカレーは、普段よく目にするカレーライス、外国のカレーは、グリーンカレーなのではないかと読み取った。やはりA児の料理の知識の多さに感心しながら、遊びを見守っていた。そこへ補佐員が３歳クラス児数名とともに、やって来た。A児は、補佐員と３歳クラス児がレストランのお客さんであると分かると、プラスチックのグラスに入れた水を提供した。教師は、お店での飲食の流れも表現していることに、また心を動かした。教師は、A児の自信につながるよう、A児を称賛する言葉をかけた。この日もA児のお店には多くの幼児や職員が集まり、A児は満足感があったのではないかと読み取った。

　片付けの時間になると、A児はE児に「片付けてパトロールに行こう。うちらはうみ組なんだから」と話した。これを近くで聞いていた教師と５歳クラス副担任は、思わず目を見合わせた。このとき、言葉は交わさなかったのだが、心を動かしたことが互いに感じられた。この日の振り返りでは、A児の遊びの充実が、「うみ組パトロール」をがんばりたいという思いの源になり、５歳クラスとしての自覚や、喜びの実感につながっているのではないかと共有した。また、A児の遊びの充実には、他クラスの職員との連携が欠かせなかったのではないかと話し合った。A児のこれまでの遊びの履歴を大まかに知り、打ち合わせがなくても同じような方向性で保育ができていることに喜びを感じた。週１回のカンファレンスを繰り返すことで、保育の方向性が揃ってきているのではないかと捉えた。

　その後もA児は、違う遊びにも興味をもちながら、料理づくりを続ける姿が見られた。笑顔で片付けや「うみ組パトロール」をする姿も増え、５歳クラスになった喜びを実感しているのではないかと思う日が増えてきた。

考察

長期的に幼児の育ちを支えていきたいというスタンスは大切であると考える。そのような考えが大切だと頭の中では理解している反面、実際に保育をしている中で、本当に育ちが見られるのだろうか、これで間違っていないのだろうかと焦ってしまうことがある。願いが先行し過ぎている自分の姿に気付くことができたのは、参観に行ったＴ園の先生方のおかげであると思っている。時々、他の園の幼児の姿、保育者の援助、環境構成、他の園の保育観にふれることは、自分の今の保育の捉え直しにつながると考える。このような交流を続けていくことの価値を改めて感じている。

また、A児の姿を見ていると、自分で遊びを充実させ、自分で気持ちに折り合いをつけ、自分のくらしを豊かにしているのではないかと捉えた。今年度のカンファレンスの中で何度も「幼児は有能な存在」であるという言葉を聞いたが、まさにその通りであると実感した。幼児の自分で育とうとする力を信じながら、育ちの「きっかけ」をつくれるような教師でありたいと、改めて捉え直した。

＜５歳クラス　Ｘ期　６月　＞　幼児を「信じる」ことを大切に、主体的な遊びを支える

これまでの保育の様子

５歳クラスの幼児は、料理づくりや生き物捕まえなど、自分たちが好きな遊びに、日々夢中になっていた。また、５歳クラスでのくらしにも慣れ始めたのか、ペットボトルロケットや木の実のジャムづくりなど、これまでにやったことがない遊びを始める幼児もいた。遊びの中で、幼児同士が会話をしてイメージを共有したり、役割分担をしたりする姿が、これまでよりも多く見られるようになっていた。

担任は、昨年度のＡ園との交流で１年間にわたって語り合って行き着いた「かかわりは、遊びに夢中になる中で自然と生まれてくるもの」という認識を大切に、幼児一人一人が今夢中になれる遊びがあるのか、夢中になって遊べる環境は整っているのかを、副担任と毎日のように語り合っていた。協同して遊ぶことへの芽が育ってほしいと願う一方で、やはり、個々の遊びの楽しみはよく読み取っていこうと、副担任と援助の方向性を確認していた。

そのような中、Ｆ児は朝の受け入れの際に担任の隣に座り、担任が受け入れを終わるのを待って一緒に園庭に遊びに出るということが数日間続いていた。これまでとは少し違う様子が続いたので、Ｆ児と会話をしてみると、友達とトラブルがあったり、環境の変化があったりしたわけではなく、今夢中になれる遊びが見付からずにいるのではないかということが読み取れた。Ｆ児の思いに寄り添いながらも、まずは、夢中になれる遊びが見付かるように支えていこうと考えた。そこで、Ｆ児の好きな遊びが見付かることを願って、多様なジャンルの本を集め、保育室の本棚の本を毎週 20 冊ずつ入れ替えて、環境構成を行った。

５月 30 日

朝の支度を終えたＦ児とＧ児が、保育室の本棚から、「土の色って、どんな色？」の本を手に取る。
Ｆ児：「ねえ、Ｇちゃん。これ、おもしろそう！」
Ｇ児：「さらさらだね」
Ｆ児：「ねえ、今日はこれをしない？」
Ｇ児：「いいね、やろう。じゃあさ、チョコ山でやろうよ」
Ｆ児：「うん、そうしよう。早く外行こうよ」
Ｇ児：「まって、先生も見て！ここにね、こんな本があったんだよ。今日はこれをするんだ！」
担任：「へえ、おもしろいの見付けたね。これで、何をしたいの？」
Ｇ児：「私たち２人で、土を集めるんだよ」
Ｆ児：「そうだよ、私はね、全種類集めたいんだ」
担任：「ここに出てる土を全種類集めたいってこと？」
Ｆ児：「そうそう。Ｇちゃん、早く行こうよ！」
Ｆ児とＧ児がチョコ山に行き、粉ふるいを使って、赤土をふるっている。
Ｆ児：「いっぱい集まったね」
Ｇ児：「これ、どうする？」
Ｆ児：「何かに入れてとっておこう。先生、ケースください」
担任：「オッケー。どんなケースがいい？」
Ｆ児：「前に、石を入れてたみたいなのがいいな。お部屋に分かれているやつ」
担任：「ああ、あのケースね。確か、『うみ』の棚にあったような」
Ｆ児：「ああ、あそこね。じゃあ私とってくるね！」
Ｇ児：「私も行く！」

Ｆ児は、朝の支度を終え、新しい本が本棚に並んでいることに気付いた。「土の色って、どんな色？」という本を手に取り、近くにいたＧ児に声をかけた。この本には、数十種類の目の細かな土の写真が載っている。Ｆ児は、園庭にも同じ色の土があるのではないかと期待に胸を膨らませ、Ｇ児を誘って園庭に行こうと声をかけたのではないかと読み取った。

担任は、朝の受け入れをしながら、二人の様子を見守っていた。この本を使って何をしたいのかを聞くと、Ｆ児は「土を全種類集めたい」という思いを話した。これまで、石を集める遊びは、園では毎年のように見られていたが、土を集める遊びは担任の想定を大きく超えていた。その発想に心を動かしながら、２人を見守っていた。Ｆ児とＧ児は、赤土の山（チョコ山）に行き、粉ふるいを使って赤土をふるって、目の細かな土を集めていた。すると、Ｆ児から「ケースください」という要望があった。担任は、どのようなケースがＦ児のイメージに合うのかを知りたいと願い、Ｆ児に問い返すことにした。仕切りがあり、「お部屋」ごとに違う土が入れられるようなケースの場所をＦ児に伝えると、うれしそうな表情で取りに行く姿が見られた。この姿を見ながら、担任もこれから始める土集めの遊びがどうなっていくのか、期待で胸がいっぱいになった。

この日の副担任との振り返りでは、「幼児は遊びをつくる天才」であると話題になった。Ｆ児が「土の色って、どんな色？」の本から、土を集めるという遊びを生みだしていくことは、担任は全く想定していなかっ

た。しかし、このような想定外の遊びが生まれたことを副担任と共に喜んだ。幼児の無限の可能性を感じられたからである。今年度のカンファレンスの中でも「子どもは有能な存在である」とよく話題になったが、まさにＦ児の姿から、この言葉が実感のある言葉になったことを共有した。担任が意図的にＦ児を遊びに誘ったり、他の幼児とつないだりするのではなく、Ｆ児は、自分で遊びを見付けていけると信じて支えることが大切であると改めて考えた。そして、保育室の本を 20 冊入れ替えておいたことは、教師の想定外の遊びが生まれるような環境、つまり、幼児の新たな遊びをつくり出すきっかけとなるような環境になっていたのではないかということも話し合った。

さらに、この遊びの中には、幼児にとってはもちろん、教師にとっても大きな発見や感動があるのではないかということも共有した。遊びを見守るスタンスを基本としながらも、幼児とともに心を動かしながら、一緒に遊びを楽しんでいこうと、今後の方向性を確認した。

この日、Ｆ児とＧ児の遊びの様子を、H児がじっと見つめる様子があった。もしかしたら、Ｆ児やＧ児の楽しそうな姿を見て、H児もこの遊びに入りたくなったのではないかと読み取った。これまでの幼児の遊びを見ていると、楽しい雰囲気があると、自然とそこには幼児が集まり、かかわりが生まれたり、遊びが広がったりする様子があった。もし、H児をはじめ、他の幼児がこの遊びを一緒にやりたいと思ったとき、すぐに遊び出せるようにしたいと願い、環境構成として、粉ふるいとケースを新たに２セット、テラスの棚に入れておいた。

６月７日

H児：「Ｆちゃん、すごいね。こんなに集めたの？」
Ｆ児：「そうだよ、私とＧちゃんで集めたんだよ」
H児：「うわあ、すごい。ぼくも入ーれーて」
Ｉ児：「私も、入―れーて」
Ｆ児：「いーいーよ」
H児：「ぼくもこのケースほしい」
Ｆ児：「あそこの棚にあるよ」
　Ｆ児、Ｇ児、H児、Ｉ児は、園庭に土を取りに行き、土を粉ふるいでふるうことを繰り返している。
H児：「あれ？この土、レアだね。どこにあったの？」
Ｆ児：「これは、お花の土だよ。で、こっちがあの木の下のやつ」
担任：「え、Ｈくんのケースにも、同じのあるんじゃない？何か違うの？」
H児：「よーく見て。色がちょっと違うでしょ」
Ｆ児：「そうだよ、それに触ってみて」
担任：「本当だ！なんか違うね！」
Ｇ児：「そうだよ、こっちの方がさらさらなの。すごいでしょ？」
担任：「すごい、これは大発見！」
H児：「あ、いいこと考えた！じゃがいもの土は、これとはまた違うんじゃない？」
Ｆ児：「そうかも！Ｈくん、一緒に畑に行ってみよう」
Ｉ児：「私も一緒に行く！」
Ｆ児：「じゃあ、Ｇちゃんは、ここで土を守ってて。すぐにとってくるから！」
Ｇ児：「はーい」

この日、Ｆ児が始めた土集めの遊びに、H児とＩ児が加わった。Ｆ児が毎日夢中になって土集めをしていたため、その楽しそうな雰囲気を感じ取ったのだろうと捉えた。やはり、かかわりは、遊びに夢中になる中で自然に生まれてくるものであると改めて実感しながら、遊びを見守っていた。

Ｆ児、Ｇ児、H児、Ｉ児の４人は、園庭の様々なところの土を取りに行っては、粉ふるいを使って目の細かな土を集めることを何度も繰り返していた。途中、H児は、Ｆ児のケースに入っていた灰色の土を見て、「レアだね」と言った。しかし、担任には、H児のケースの中にも、同じ灰色の土が入っているように見えた。そのため、何が違って「レアだね」と言ったのか気になり、H児に聞いてみることにした。担任は、H児に言われた通りに２つの灰色の土を「よーく」見た。すると、遠くで見ていた時には気付かなかった色の違いがあることに気付き、心が動いた。さらに、Ｆ児に言われた通りに灰色の土に触ってみると、粒の大きさが微妙に違うことに気付き、また心を動かされた。担任は精一杯の言葉でその感動を２人に伝えた。

次の瞬間、H児が「いいこと考えた！」と大きな声で言った。場所による土の違いに気付き、「じゃがいもの土」も集めてみたくなったのではないかと捉えた。それを聞いたＦ児も、じゃがいも畑の土はまだ集めていなかったようで、H児と一緒に嬉しそうな表情で集めに行く姿が見られた。

この日の副担任との振り返りでは、幼児はかかわりの中で、自分たちで遊びを広げていけることが話題になった。Ｆ児とH児のように、かかわりの中で土の質の違いに気付き、新たな土を求めて取りに行く姿は、まさに、自分たちで遊びを広げている姿である。担任は、このような気付きが生まれ、遊びが広がる瞬間に立ち

会えたことをうれしく思い、その心の動きを副担任と共有した。幼児にとって、かかわりの中での育ちが、いかに大きいかを改めて感じた。そして、教師が幼児のかかわりに入るときは、幼児同士で気付きを生みだしていく姿を信じ、答えになるようなことを暗示したり、教師の思う方向に誘導したりしないことに配慮していこうと、今後の方向性を確認した。また、粉ふるいとケースを追加で準備しておいたことで、H児、Ｉ児が自然と遊びに加わり、かかわりの中で遊びを広げていくことにつながった。かかわりが自然と生まれるような環境を整えていくことの大切さも、改めて話し合った。

この日からさらに１週間近く、Ｆ児を中心として、土集めの遊びは続いていた。ある雨の日、Ｆ児はいつものように園庭の土を集めるために友達と園庭を散策していた。そして、モミジバフウの木の下にぬかるんだ粘土質の土があることに気付いた。この土を手に取ってみると、まるで粘土のような感触があったようである。Ｆ児は「粘土みたい、おもしろいね」と、友達と会話をしながら粘土質の土を手の中で転がし、丸めていた。そのうちに「あ、いいこと考えた！これでお皿がつくれるかもしれない！」と大きな声で話した。Ｆ児のお皿をつくりたいという思いを読み取り、もしかしたらＦ児は、翌日以降、粘土質の土を使ったお皿づくりをして遊ぶかもしれないと考えた。そこで、保育室に、陶芸の絵本を置いたり、モミジバフウの木の下に木製のテーブルを動かしたりして、粘土の遊びができる環境を整えておいた。

６月 19 日

Ｆ児：「先生、見て。お皿ができたよ！」
担任：「すごいねえ、本当に使えそうだねえ」
Ｆ児：「うん、私、これを焼きたいんだけど」
Ｊ児：「そうだよ、焼くと、本当のお皿になるんだよ」
担任：「そうなんだね、でも、どうやって焼こうか？」
Ｆ児：「まずはさ、かまどをつくって、そこに火をつけるの」
H児：「いいねえ、おもしろそう！やろうよ」
担任：「かまどって、なあに？」
Ｊ児：「かまどは、お皿を焼くところだよ」
H児：「ブロックとかが必要だよ」
Ｊ児：「そうそう、ブロックを積んで、火が広がらないようにするんだよね」
Ｆ児：「今からつくろうよ！」
Ｊ児：「いいねえ、みんなで一緒にやろうよ」
Ｆ児：「うん、そうしよう！」

ぬかるんだ粘土質の土を見つけた翌日、Ｆ児とＪ児はモミジバフウの木の下のテーブルを使って、粘土遊びを始めた。二人で粘土をお皿の形に成型していると、楽しそうな雰囲気を感じて、多くの友達が遊びに参加した。Ｆ児とＪ児は、お皿ができるとそれを担任のところに見せに来た。会話の中で、Ｆ児は、かまどをつくってお皿を焼きたいという思いをもっていることが読み取れた。４歳クラスのときに、親子行事で陶板づくりをした経験からか、保育室に置いてあった陶芸の本からか、焼くと固くなるという知識があったものと捉えた。担任は、Ｆ児とＪ児のイメージの共有を願い、どうやって焼くのか、かまどはどんなものかを問いかけた。担任は、二人の「焼く」という発想に驚かされ、心が動いていた。

しかしながら、幼児がかまどをつくり、そこでお皿を焼くことは本当に実現可能なのか、担任自身も思い描けていなかった。この日の振り返りでは、副担任と二人で時間をかけて実現の可能性について話し合った。幼児が自分たちで実現させていく姿を信じたいと願う反面、安全面には最善を尽くす必要があるため、主体は教師になってしまうのではないかと、話し合いながら葛藤していた。結局、２人で話し合ってもなかなか方向性が見い出せずにいた。そこで、他のクラスの職員に、この迷いを話してみることにした。

他クラスの職員から、初めに出てきた感想は、「おもしろそう！」「いいですね！」であった。担任はこの瞬間、Ｆ児の「やりたい」を職員全員が肯定的に支えたいと願ったこと、他クラスの幼児でも職員全員が全面的に支えたいと願ったことを、心からうれしく思った。その上で、幼児の安全面への配慮や、段取り、時期について一緒に考えた。「年下の幼児が火に近づかない工夫」「水の準備」などの安全面の配慮については、園長を介してＦ児に伝わるようにすることも、この時共有された。

担任・副担任だけでは、幼児が自分たちで実現させていく姿は信じきれなかったが、全職員で共有することにより、実現の可能性が見えてきた。幼児の自ら育とうとする姿を信じる職員集団の中で保育をしていることをうれしく思いながら、Ｆ児の今後の遊びへの期待感が、さらに高まったように思えた。

6月27日

H児：「次はＦちゃんの番だよ」
Ｆ児：「私、こわい」
H児：「大丈夫だよ、一緒にやろう」
担任：「Ｆちゃん、こわいよね。どうしようか？」
Ｆ児：「Hくん、火つけるのお願いしてもいい？こわいから、私は見ていてもいい？」
H児：「うん、分かった。じゃあ、ぼくがするね。みんな、いくよ！」
　マッチを擦って、かまどの中に入れる
H児：「ついたー！」
担任：「やったね！」
Ｆ児：「ついたね！私、お皿持ってくるね！」
Ｊ児：「Ｆちゃん、熱いから、これを使って置くんだよ」
Ｆ児：「分かった、ありがとう」
担任：「Ｆちゃん、よかったね」
Ｆ児：「うん！私、今日これ、持って帰ってお家で使いたいんだ！」

いよいよかまどに火をつける日がやってきた。Ｆ児を中心に、幼児が１週間かけて準備を行ったかまどであるため、幼児の期待感や高揚感がとても高いように感じた。Ｆ児は、自分でマッチに火をつけるのがこわかったため、H児に自分からお願いする姿が見られた。担任はその様子を見て、安全面に細心の注意を払って見守りながらも、Ｆ児がかかわりの中で自分の思いを実現させていく姿に育ちを感じ、心が動いていた。

Ｆ児はついに、かかわりの中でお皿を焼くことを実現した。この日の降園時、Ｆ児は、迎えに来ていた保護者にお皿が焼けたことを、一番に話していた。その時の表情は、何にも代えがたいほどの笑顔であった。Ｆ児の顔を見たとき、担任は、迷いながらもＦ児の自分で実現していく姿を最後まで信じ、支えてくることができたことをとてもうれしく思った。

今後も、今回のかまどのように、実現が可能か否か、迷う場面が出てくると考える。この日の副担任との振り返りの中で、例え実現できなかったとしても、幼児が実現していく姿を思い描きながら、教師も一緒にできるだけのことはやっていきたいということを共有した。そして、迷った時には、同じ方向性の中で保育をしている仲間に相談しようと、今後の方向性も確認した。幼児の思いを肯定的に捉え、幼児の可能性の大きさを信じることによって、主体的な遊びを支えていきたいと、思いを新たにしている。

考察

Ｆ児の土を使った遊びは、土集めに始まり、かかわりの中で、土のお皿づくりにまで広がっていった。周りの幼児とかかわりながら、自分のやりたいことを実現させていくＦ児の姿に、大きな育ちを感じた。やはり、Ａ園との交流から学んだように、「かかわり」は教師が意図的につくるものではなく、遊びの中で多様な「ひと、もの、こと」に出会う中で自然と生まれてくるものである。そのために教師は、まず、多様な「ひと、もの、こと」に出会える環境、そして、遊びに夢中になれる環境を整えていくことが大切であると捉え直した。

そして、何より大切にしたいのは、幼児の自ら育とうとする姿勢や、幼児のもつ可能性の大きさを「信じる」ということである。教師の想定外のことを幼児とともに楽しめるか、実現が難しいと思うことも、幼児を信じることで肯定的に捉えられるか、幼児は有能な存在であると信じられるか…。

しかしながら、頭の中で「信じる」ことを大切にしたいと思えるのだが、いざ幼児を目の前にしたときには、時間や場所の制約、安全管理などの面から、難しい場合がある。そんなとき、保育の迷いや悩みを共有できる職員の存在の大きさに気付く。教師一人では難しいことも、全職員で考えれば実現できることも多いのではないかと考える。今年度、研究の一環で、他園の職員と、継続的に、双方向に交流を行っている。園の垣根を越えて、保育の悩みや迷い、喜びを共有する仲間、保育において大切なことを確認し合うような仲間を、一人でも多くつくっていけたらと、思いを新たにしている。

＜５歳クラスⅩ期　11・12 月　＞「かかわりが深まる」姿を考え続け、援助する

これまでの保育の様子

11 月、５歳クラスの子どもたちは、落葉樹の葉っぱを集めて「忍法雲隠れの術」をしたり、松の木の枝で「弓矢」をつくって飛ばしたり、泥に葉っぱの「スタンプ」をしたりと、秋ならではの遊びを楽しんでいた。どの遊びにおいても、一人で遊ぶというよりは４、５名で集まって遊びが展開されるようになってきており、役割分担をしながら、みんなで一つのものをつくったり、一つのイメージや目的を共有したりするような遊び方であった。

Ⅺ期は「友達関係を深めながら遊びを充実させていく時期」である。一見すると、このように遊んでいる子どもたちの姿は、友達とのかかわりが深まり、遊びが充実している姿とも捉えられる。しかし、教師は本当に目の前の子どもたちの姿は、かかわりが深まっている姿なのか、分からなくなっていた。本園の研究「つながる保育」で、他園の多様な保育や価値観に継続してふれてきたことによって、教師がよく自身の保育を問い直すようになったためではないかと思っている。研究の手応えを実感しながらも、かかわりが深まっている姿とはどのような姿なのか、教師はどう支えることでかかわりが深まるのか、そして、かかわりが深まった先にはどんな育ちがあるのかなど、目の前の子どもの姿と照らして、問い直し続けていた。

そのような中、ある日の遊びの時間に、K児がＬ児、M児と一緒に園庭で花を集めている姿を見つけた。これまでの遊びの中でK児は「いいこと考えた！」と言いながら、自分の考えたことを試す姿がしばしばあった。そのため、K児の発想で遊びが始まり、この遊びによってK児のかかわりが深まる姿が何か見られるのではないかと思い、遊びの様子を見守ることにした。

11 月 15 日

K児：「いっぱい集まったね」
Ｌ児：「あ、先生。ねえ見てよ。こんなに集まったよ」
担任：「わあ、本当だ。よくこんなに集めたね。１・２・３…」
Ｌ児：「全部で６種類だよ」
K児：「ねえ、早く探しに行こう！」
M児：「私、いっぽんぬーけた」
担任：「え、やめちゃうの？」
M児：「うん、だってさ、もうお花はないから。飽きちゃったし」
Ｌ児：「やめちゃうの？じゃあ、ぼくも違うことする」
　K児が一人でその場に残る。
担任：「Kちゃんは、どうしたいの？」
K児：「園庭のお花を全種類集めて、花束をつくりたいんだけど、でも一人じゃ無理だから、じゃあ私も違うことする」
担任：「本当にいいの？」
K児：「うん、ブランコもやりたいから、ブランコに行ってくるね」

K児、Ｌ児、M児は、「園庭の花を全部集める」という目的を共有し、保育室前のテラスに花を集めていた。テラスは６種類の花で彩られ、教師も心が動くような美しさであった。しかしながら、急にM児が遊びをやめるとみんなに話した。担任はやめたいと思ったM児の考えの背景が知りたくなり、M児にその理由を聞くことにした。結局、一人で残ったK児。会話の中で、K児は遊びを続けたいという思いはあったが、一緒に遊んでいたM児、Ｌ児がやめてしまったことで、気持ちが花集めに向かなくかってしまったのではないかと読み取った。「本当にいいの？」と念押しはしてみたが、やはり、M児は花集めの遊びをやめてしまった。

この日の副担任との振り返りでは、３人で遊んでいても、やはり一人一人に目を向けることが大切であると共有した。この遊びを思い返すと、３人が感じている楽しみがそれぞれ違っていたのではないか。M児は花を集めること自体に楽しみを見い出していたのではないかと振り返った。そのため、M児とどこに花がもっとありそうかを会話することができたら、もっと遊びに夢中になっていったかもしれない。Ｌ児は、K児の発想がおもしろそうだが、集めてどうしたいのか、その先のイメージが何となくもちにくかったのではないかと振り返った。そのため、K児がこの後どうしたかったのかを知る機会があれば、もっと遊びに夢中になっていたかもしれない。K児のかかわりを深めることを願うとき、教師がつなぐのではなく、やはり一人一人が遊びに夢中になることを支えることで、自然とかかわりが深まってくるのではないかと考えた。

この振り返りを通して、かかわりが深まるということの大前提には、一人一人が遊びに夢中になるということがあるのだと捉え直した。そして、そこにいる教師は、子ども同士を無理につなごう、かかわらせようとするのではなく、一人一人が遊びの中で何をしたいのかをよく見たり、適宜遊びの仲間に入ったりしながら、イメージや目的が共有できるようにして支えていこうと、今後の援助の方向性を再確認した。

11 月 26 日

K児：「あ、いいこと考えた！クレーンゲームをつくって、ゲームセンターにしたい」
N児：「え、何かおもしろそうだから。おれも手伝うよ。何したらいい？」
M児：「じゃあ私もいーれーて」
O児：「私もいーれーて」
K児：「うん、いいよ。じゃあ、MちゃんとOちゃんは、段ボールを切って。Nくんは、クレーンのつめを手伝って」
　O児がM児と一緒にダンボールを組み立て、切ろうとしている。
O児：「Kちゃん、どうやって切ったらいい？」
K児：「真ん中を切るんだよ。こんな感じて窓にするんだよ」
M児：「え、どういうこと？」
K児：「こうだよ、こう」
M児：「え？どこ？」
担任：「Kちゃん、これ、使う？」　マジックペンを渡す
K児：「うん、使う。ここだよ」
M児：「ああ、そういうことね。分かったよ、まかせて」
N児：「Kちゃん、つめって何？」
K児：「つめはさ、おもちゃをつかむところだよ」
N児：「え？」
担任：「これだとどこのことだろう？」
K児：「Nくん、ここだよ、ここ」
N児：「ああ、ここか。分かった。やってみる！」
　K児とN児が一緒につめをつくっている。
K児：「ねえ、本当につかめるようにしたいんだけど、
　　どうしたらいいと思う？」
N児：「このストローのつめがふにゃふにゃだから、
　　もっと固くしたらいいかな」
K児：「でもどうしようか？」
担任：「うーん、どうしようかねえ」
N児：「あ、割り箸とかあればいいんじゃない？」　割り箸を取りに行く
K児：「割り箸だと、今度は曲がらないね…。何かいい方法ないかなあ」

　ある日K児が保育室の本棚から、クレーンゲームの絵が描いてある本を手に取り、「いいこと考えた」と大きな声で言った。教師は、K児がやりたいことが見つかり、心を動かしたのではないかと捉え、K児の様子をしばらく見守ることにした。K児の楽しそうな雰囲気を感じ取ったN児、M児、O児が遊びの仲間に入り、K児を中心に自然と役割分担ができていった。やはり楽しい雰囲気のところにかかわりが生まれるのだなと感じながら、教師はその様子を見守っていた。

　しばらくすると、段ボールを切り取る場所をめぐって、K児がM児にイメージを伝えている姿が見られた。K児が真剣に伝えようとしている様子から、イメージが共有されることを願って、担任は近くにあったペンを使うかどうかを聞いてみることにした。切るところが視覚化されたことで、M児は夢中になって段ボールを切る姿につながったのではないかと捉えた。

　N児は、K児のいう「つめ」というのが何か分からず、戸惑っている様子であった。担任は、N児とK児のイメージの共有を願い、K児が見ていた本だとどこの部分なのかを聞いてみた。すると、K児のいう「つめ」がクレーンのアームの先の部分であることがN児に視覚的に伝わり、２人はつめづくりに取りかかった。

　教師は、K児とN児のつめづくりを見守る中で、一つ心配していたことがあった。それは、クレーンのように何かをつかむようなしかけをつくるのは、今の２人の知識の範囲を超えているのではないかということであった。しかしながら、２人の様子を見ていると、ストローや割り箸など、保育室にある材を試しながら、何度も相談してつくりかえていた。教師が入って一緒に考えることよりも、この２人が何度も試していく中でこそ、かかわりが深まっていくきっかけが生まれるのではないかと捉えた。そのため、あえて２人の様子を見守ることにした。

　この日の副担任との振り返りでは、K児の友達とのかかわりが話題の中心となった。イメージを共有できるように願い、ペンや本を使って視覚的な援助をしたこと、そして、迷いながら試す姿を見守ったことは、K児のかかわりの深まりにつながっているのではないかと共有した。この日のK児の姿から、自分のイメージの具現に向けて何度も試す中で、迷ったり悩んだりして心を動かしている時、自然とかかわりが深まっていくのではないかと考えた。

　K児とN児のつめづくりは、翌日以降も続いた。つくりはじめて３日後、３本のストローにモールを通し、

それを紙コップにつけて上下させることで、つめが開いたり閉じたりするようなしかけを完成させた。今後も、K児がゲームセンターをつくるのに使えそうな段ボールや廃材を準備して環境を整えながら、K児の心の動きを今後も見逃さず読み取りながら支えていこうと、援助の方向性を副担任と共有した。

11 月 29 日

K児がやま組（４歳クラス）に行く。
K児：「やま（４歳クラス）さん、うみ（５歳クラス）に来ると
クレーンゲームができますよー」
４歳クラスａ児：「え？私、行きたい」
４歳クラスｂ児：「おれも。楽しそう」
４歳クラス副担任：「えー私もそれ見たい。Ｋちゃん、行ってもいい？」
K児：「うん、先生もいいよ。じゃあ準備するから、すぐ来て」
K児がうみ組（５歳クラス）に戻ってくる。
４歳クラス副担任：「え、これすごいんだけど。誰がつくったの？」
K児：「私！あとはNくんとかMちゃんも手伝ってくれた」
４歳クラス副担任：「え、Ｋちゃんが？すごいんだけど！本物みたい！」
K児：「こうすると本当につかめるんだよ」
４歳クラス副担任：「これを思いつくなんて、小学生かと思っちゃった」
K児：「もう小学生だからさー」
担任：「やま（４歳クラス）さんたち、うみ（５歳クラス）さんになると、すごいのつくるんだね。これ、どうやって遊ぶんだろうね？」
K児：「待って、順番にお話するから。まずは、このレバーを倒すと、これがこっちに動くの。このボタンを押したらね、本当におもちゃをつかむんだよ」
４歳クラスａ児：「これおもしろい！」
４歳クラスｂ児：「ねえ、つぎは僕の番！早く早く！」
K児：「大丈夫、すぐ順番が回ってくるから」
４歳クラス副担任：「ねえ（５歳クラス担任）先生、本当にすごいですね」
担任：「本当にすごいですよね。ねえ、Ｋちゃん」
K児：「うん、私って天才かもしれない！」

この日、担任が朝の受け入れを終えると、K児がやま組（４歳クラス）に楽しそうに向かう姿が見られた。K児について行き、様子を見ていると、K児はクレーンゲームをしたい年下の幼児を募っていた。遊びに夢中になっていると、自分のつくったものを見てほしいという思いが高まり、自然とかかわりが生まれるのだと改めて感じながらK児を見守っていた。

K児の呼びかけに応じて、４歳クラスａ児、ｂ児、そして４歳クラス副担任の３人がうみ組５歳クラスに遊びに来た。担任はこの時、K児の「年下の幼児に見せたい」という思いの背景にあるこれまでの遊びの中での頑張りや育ちが、多くの人に伝わってほしいと願っていた。４歳クラス副担任には、日々の語り合いや「のびのび保育シート」での共有によって、その願いが伝わっていたため、K児の頑張りを称賛する言葉がけをしてくれたのではないかと捉えている。特に事前に打ち合わせをしたわけではないが、クラスの枠を超えて援助の方向性が揃っていることを嬉しく感じた。

４歳クラスの２人の幼児に、意気揚々とやり方を説明する姿、「私って天才かもしれない！」と誇らしげに言った姿に、担任は心を揺り動かされた。そして、副担任のところにすぐにこの感動を伝えに行き、喜びを共有した。K児の自分から年下の幼児にもかかわろうとする姿や、自己肯定感を高めている姿は、かかわりを深めながら遊びに夢中になっていったことから見られた姿であると捉えた。かかわりを深めることが、自信につながり、自分からもっとかかわってみようとする姿にもつながるのではないかと、K児の姿から気付かされたように感じた。

K児はこの日の降園時、「うみ組（５歳クラス）みんなでゲームセンターをつくりたいなあ」とつぶやいていた。そこで、K児が自分の言葉で５歳クラスの幼児に自分のイメージを伝える姿を願い、「みんなの時間」に遊びの紹介をする時間を設定して、K児が話せる環境を整えた。

12月４日　みんなの時間

K児：「私さ、ゲームセンターをつくりたいんだ」
Ｐ児：「あ、知ってるよ！昨日やってやつ。あれでしょ？ねえ、僕もそれやりたい」
K児：「うんいいけど、ゲームセンターができてからね。でもさ、一人じゃできないんだよね。だから手伝ってほしいんだ」
Q児：「ゲームセンターをつくったら、Kちゃんはどうしたいの？」
K児：「みんなで遊びたいの。やま（４歳クラス）さんとかそら（３歳クラス）さんも呼びたい」
M児：「いいね、おもしろそう」
N児：「でもさ、ゲームがこれしかないよ」
K児：「これからつくればいいんだよ。あとはさ、ゲームセンターには自動販売機があるから、それも」
Q児：「じゃあ、私、たいこのゲームつくるね」
Ｐ児：「ぼくは、ガチャガチャ」
担任：「わあ、おもしろそう。どこをゲームセンターにするの？」
K児：「うーん、うみ組（５歳クラス）のお部屋かな」
N児：「でもさ、それだとみんなが分からないから、遊戯室がいいんじゃない？」
R児：「僕はみんなが使えるようにお金をつくるよ」

みんなの時間での遊びの共有は、これまでに何度か経験がある。担任が「何かお話したいことがある人はいますか」と聞くと、K児が真剣なまなざしで手を挙げた。K児は、「手伝ってほしい」ということを自分からみんなに伝えた。担任はこの姿を見た時、K児のかかわりが深まっている姿であると捉えた。友達に自分がしたいこと、困っていること、協力してほしいことを本音で伝えているのではないかと読み取ったからである。これまでK児は自分が友達のしたいことを手伝う姿はしばしば見られたのだが、自分が手伝ってほしいと言ったことはあまりなかったように思い返した。友達を信頼しての言葉だったのではないかと思うと、大きな育ちであると感じながら話し合いを聞いていた。また、この話し合いでは、子どもたちが提案したり質問したりして進んでいったため、担任のコーディネートは場所をどこにするか考えるきっかけになる言葉がけをしただけであった。これもかかわりが深まっている姿と捉えた。

この話し合いの翌日には、K児を中心に数名が自動販売機づくり、Q児を中心に数名がたいこのゲームづくり、P児がガチャガチャづくり、R児を中心に数名でお金づくりを始めた。これまでにあまりかかわることがなかった友達同士で自然と集まっている様子も見られた。ゲームセンターができると、３歳クラス児と担任、４歳クラス児がたくさん訪れ、楽しむ様子が見られた。K児は、その様子を見ながら担任に「やっぱり私、天才かも」と満面の笑みで伝えた。かかわりが深まることが、こんなにもK児の自信を高めるのだと、思いを新たにした。

考察

K児の遊びを支える中で、かかわりが深まっている姿とはどのような姿なのか、教師はどう支えることでかかわりが深まるのか、そして、かかわりが深まった先にはどんな育ちがあるのか、K児の姿をもとに自分なりに考え、少しずつ言語化していくことができたのではないかと思う。やはり、一人一人が遊びに夢中になることなしには、かかわりは深まらないのではないか。夢中になる中で、つくったものを見てほしいという喜び、うまくいかない葛藤など、多様に心を動かすことが、かかわりが深まるきっかけとなるのではないか。そしてかかわりを深めた先には、もっとかかわりたいという意欲や、自己肯定感の高まりが見られるのではないか…。

逆に、幼児同士のかかわりが深まる姿は、定義づけることは難しいことも見えてきた。幼児同士の個性やかかわり、かかわる状況や経験、文脈が一人一人違うからである。だからこそ、目の前の子どもの姿に照らしながら、語り合い、考え続けることが大切だと考える。たとえ確かな答えは出なくても、そのプロセスにこそ意味があるのだと捉えている。保育者が目の前の子どもを考え続けるプロセスは、きっと保育の質の向上に大きくつながっていると信じている。

＜５歳クラス　Ⅻ期　１・２月　＞　「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」を支える

これまでの保育の様子

Ⅻ期は、共通の目標に向かって活動し、共に生活する楽しさを味わう時期である。Ⅻ期に入ってから、遊びの時間に、友達と協力して一つの遊びをつくっていこうとする姿が随所で見られるようになった。例えば、スイーツやさんごっこでは、お店を出すという目的を共有しながら、看板を書く人や商品をつくり足す人などを子どもたち同士で話し合って決めていく姿が見られた。また、新聞紙を使った人形づくりでは、話し合いながら役割分担を決め、顔をつくる子、足をつくる子などで分かれて作業し、みんなで一つの大きな人形を完成させていくような姿も見られた。

教師は、幼児が自分たちの遊びを自分たちでつくっていく姿に育ちを感じながらも、集団生活の中でもそのような姿が見られることを願っていた。つまり、「自分たちのくらしを自分たちでつくっていく姿」である。副担任との日々の振り返りの中で、「自分たちのくらしを自分たちでつくっていく姿」を支える教師は、日々環境を整えることはもちろんであるが、子どもたちの自ら伸びようする姿を信じ、援助は必要最低限にとどめていこうと共有していた。教師の指示通り、思い通りになるように遊びや活動をつくるのではなく、幼児自身が話合いを繰り返し、心を動かしながらつくれるように支えることを思い描いたのである。

本園のカリキュラムには「みんなの時間」がある。遊びの時間での育ちが、この時間にも生きてくるのではないかと考えた。そこで、この時間を核として「自分たちのくらしを自分たちでつくっていく姿」を捉え、支えていこうと、援助の方向性を確認した。

１月 31 日　みんなの時間

クラス全員で、だるまさんがころんだをしている。
Ｐ児：「ねえ、みんな、それだめだよ。やめて」
Ｑ児：「え、だってさ、鬼にばれてないじゃん」
Ｐ児：「でもさ、そんなのずるいから、だめだよ！」
担任：「Ｐちゃん、Ｑくん。何か、みんなにお話したいことある？」
Ｐ児：「うん、私、みんなに話したい」
担任：「うん、分かった。うみ組（５歳クラス）さん、
Ｐちゃんの周りに集まるよ」　うみ組の幼児がＰ児の周りに集まる。
担任：「みんな、Ｐちゃんからお話があるみたいですよ」
Ｐ児：「あのさ、みんな。Ｒちゃんがだるまさんがころんだって言った後に、動いちゃだめなんだよ」
Ｓ児：「え、どういう意味？」
Ｔ児：「ああ。俺分かった。こういうことでしょ？ちょっと来て。Ｒちゃんが鬼でさ、だるまさんがころんだって言った後に、Ｐちゃんがこうやって、鬼にばれないように動いて近づくってことでしょ？」
Ｐ児：「そうそう、そういうこと。それだとさ、楽しくないから、やめてほしいの」
Ｑ児：「え、だって別によくない？鬼が見てないのが悪いんだから」
Ｐ児：「でもさ、それはよくないよ」
Ｒ児：「そうだよ、ばれないように動くのは、なしにしよう」
Ｓ児：「そうだよ、そうしよう」
Ｑ児：「えー、じゃあいいよ、それで」
担任：「Ｑくんは、本当にそれでいいの？楽しい？」
Ｑ児：「うーん、僕はさ、鬼にばれないようにした方が絶対楽しいと思う」
Ｔ児：「Ｑくんの気持ちは分かるけどさ、何かずるいことしてるみたいだと思うな、俺は」
Ｑ児：「いや、ずるくないでしょ」
Ｕ児：「いいこと考えた！じゃあ、こうしたらどう？あのさ、動くのはなしでやってみて、それからよかった方で決めるっていうのはどう？」
Ｑ児：「ああ、それならいい」
担任：「Ｐちゃんはどう？」
Ｐ児：「うん。いいよ」

みんなの時間に、だるまさんがころんだをしていると、Ｐ児の意見をきっかけとして、鬼に気付かれないように動くことはルールとしてよいかどうかの議論になった。担任は、鬼に気付かれないように動くことは作戦の一つであると捉えていたが、幼児自身がルールをつくるプロセスが「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」につながるのではないかと考え、遊びの途中ではあるが、「Ｐちゃんの周りに集まって」と声をかけ、みんなで話し合う機会をつくった。

Ｐ児が話し始めると、ほとんどの幼児が真剣なまなざしでＰ児を見つめながら話を聞いていた。Ｐ児は、遊びを楽しくしたいという思いをもち、Ｑ児に対して主張をしていることが読み取れた。また、Ｐ児とは対

立する意見をもつQ児からも、この遊びを楽しくしたいという思いが伝わってきた。しかしながら、P児と同様の考えをもっている子が多く、Q児があきらめざるを得ないような雰囲気になっていた。Q児は、そのような雰囲気を感じ取ったのか、半ば自分の主張をあきらめたように「えー、じゃあいいよ、それで」と言った。そこで、担任は「本当にそれでいい？」とQ児に確認をした。Q児が納得できないまま進んでいってほしくないと思ったからである。Q児は、担任の言葉を受けて、自分なりに楽しくしたいという思いをさらに主張した。最後は、U児の考えを全員で実践することになり、P児もQ児も納得しながら遊びを再開した。

副担任との振り返りでは、幼児にとって遊びのルールを考えることが、自分ごとになっていたのではないかということが話題になった。言い合いをしていたP児、Q児はもちろんであるが、周りの幼児もである。S児の「どういう意味？」という言葉の背景には、S児がP児の言ったことを理解したいという思いがあったのではないか、また、T児の「こういうことでしょ？」という言葉からも、自分の言葉で言い換えながらP児の主張を理解したいという思いがあったのではないかと話し合った。このように、仲間を受け入れながら、遊びのルールを自分ごととして考える姿は、まさに「自分たちのくらしを自分たちでつくっていく姿」なのではないかと共有した。

だるまさんがころんだには、いわゆる一般的なルールがある。しかしながら、それにとらわれず、この集団でつくられたルールが大切なのである。教師がトラブルにならないことを考えてレールを敷き、一般的なルールを教えるよりも、一般的なルールとは違っても、自分たちでルールを決めた方が、納得感がある。教師の役割は、ルールをつくっていこうとする幼児の言葉に耳を傾け、互いの思いをよく理解できるように橋渡しをすることであると考えた。そこで今後も、幼児の思いの橋渡しをすることを意識しながら、みんなの時間での育ちを支えていこうと、今後の方向性を確認した。

２月４日　みんなの時間

クラス全員で、こおり鬼の遊びをしている。
V児：「先生、みんなにお話したいことがあるの」
担任：「うん、分かったよ。うみ組（５歳クラス）さん、集まるよ」
全員がV児の周りに集まる。
V児：「私、鬼にはさみうちをされていやだった」
S児：「私たちだってさ、捕まえたいから。それはありにしようよ」
V児：「でもさ、それだと楽しくない」
S児：「じゃあVちゃんはどうしたいの？」
V児：「はさみうちをなしにした方がいいと思う」
S児：「でもさ、鬼だって、頑張っているんだよ」
P児：「気持ちは分かるんだけど、はさみうちはやめた方が楽しいよ」
U児：「私も、はさみうちはなしがいい」
W児：「待って、そんなに言ったらSちゃんがかわいそうだよ。あのさ、僕は鬼に捕まらないようにする方法があるんだよ。僕は、こっちに逃げようとして、こっちに逃げると捕まらないんだよ」
Q児：「え、どういうこと？もう一回言って」
W児：「だから、あっちから鬼がきたら、1回こっちに逃げようとするの」
Q児：「よく分からない、Wくんはどうしたいんだろう？」
T児：「うーん、俺もよく分からないなあ」
担任：「うーん、もしかして、本当は左に逃げるんだけど、その前に右ににげるふりをするってこと？」
W児：「うん！そういうこと！」
Q児：「なるほど、分かった、こういうことね」　実際に動いてみる
W児：「そうそう。鬼だって作戦なんだから、逃げる人だって、作戦を考えればいいんだよ」
担任：「Vちゃんは、それでいい？」
V児：「私も、Wくんみたいにしてみようかな」

みんなの時間にこおり鬼をしているとき、はさみうちをされて捕まったことに納得のいかなかったV児は、全員の前で話したいと申し出た。担任は、鬼が、逃げる人を捕まえるためのよい作戦だと思いながら見ていたのだが、みんなが納得できるようなルールをつくってほしいと願い、全員で集まる機会を設定した。

V児、P児、U児がはさみうちはしない方がよいという考えを話した。それに対して、W児は、自分が考えた逃げ方をみんなに話したのだが、聞いている幼児にはあまり伝わっていないように感じられた。そこで担任は、W児の思いがみんなに伝わってほしいと願い、W児の考えを別の言葉で言い換えることにした。すると、逃げる人も作戦を考えればよいというW児の考えが全員に伝わり、V児もその内容に納得をしたのではないかと読み取った。

副担任との振り返りでは、まず子どもたちが自分たちでルールをつくっている姿への感動を共有した。「気持ちは分かるけど…」と自分とは違う考えをもつ子を受け入れようとする姿、「どうしたいの？」と相手の言

葉の裏にある思いを子どもたちなりに読み取ろうとする姿には、担任も副担任も心を動かされた。やはり異なる他者を受け入れようとすることが、「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」につながるのではないかと話し合った。また、普段から担任や副担任が使っている言葉が、子どもたちの言葉になっているのではないかということも話題になった。担任も副担任も、子どもたちの思いを受け止めたり、言葉の裏にある思いや願いを聞いたりすることを大切にしている。子どもたちは、教師のかかわりをいわゆるモデルのようにしているのではないかと共有した。

２月に入り、この日のような話合いが、遊びの中でも自然発生的に見られるようになっていた。担任は、副担任と相談しながら、２週間後に控えた遊びの発表会「お楽しみ発表会」をつくるプロセスにおいても、「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」が見られるのではないかと考えた。お楽しみ発表会の最後には、全員で歌を歌うことが決まっていた。そこで、お楽しみ発表会で歌う歌は、子どもたちが決めたいと思ったタイミングで、自分たちで決められるように環境を整えた。具体的には、何を歌うかは事前に教師が決めないこと、教師が歌ってほしいと願っていた曲は、普段の保育の中で歌い、幼児の歌のレパートリーを増やしておくことをした。

２月８日　帰りの集まり

２月 14 日のお楽しみ発表会で、何の歌を歌うかを話し合っている。
「にじのむこう」にと「きみいろ」で意見が分かれて、言い合っている。
W児：「僕は絶対、『にじのむこうに』がいい」
Ｐ児：「いや、『にじのむこうに』はもう歌ったから、違うのにしよう。」
W児：「でもさ、上手に歌えるのは『にじのむこうに』だよ。
ママたちもそっちがいいって言ってた。Ｐちゃんは、何がいいの？」
Ｐ児：「私は『きみいろ』がいい」
W児：「僕は『にじのむこうに』がいい」
教師：「うーん、このままだと決まらないねえ。どうしようか？」
W児：「ねえ、先生はどっちがいいの？」
教師：「先生は、『きみいろ』と『にじのむこうに』で今悩んでいるんだ。どっちも素敵だからねえ…」
W児：「先生も、はっきり決めてよ」
教師：「分かった、先生も決まったら言うね」
X児：「あ、僕いいこと思いついた。それなら、両方やめて、違う曲にすれば？」
Ｓ児：「気持ちは分かるけど、今は、どっちかだよ」
Ｔ児：「じゃあさ、多数決にしようよ」
Q児：「えー、やだ。それだと、決まらなかった方がかわいそうじゃん」
Y児：「いいこと考えた。混ぜて歌えばいいんじゃない。『♪に一じ色、とりどりの色』って感じ」
Ｓ児：「だめだよ、それだと、どっちの曲か分からなくなっちゃう」
教師：「おもしろいけどねえ、どうしようか」
Ｚ児：「私はさ、両方歌えばいいと思う。半分ずつ」
Ｔ児：「ああ、それなら両方歌えるね」
Q児：「いいじゃん、それ」
教師：「今Ｚちゃんが両方歌うって言ったけど、どう？」
Ｓ児：「いいと思う」
W児：「僕は反対。『にじのむこうに』がいい」
Ｚ児：「気持ちは分かるよ。Wくんの好きなのも歌えるから、いいんじゃない？」
W児：「うん、そうだね。両方でもいいよ」

この日、Ｐ児は担任のところに行き、お楽しみ発表会で歌う歌を決めたいと話した。担任はその思いを受け、帰りの集まりの際に話し合いの機会を設定した。

話合いでは、『にじのむこうに』と『きみいろ』の２曲が候補に挙がった。担任は、一緒に考えるというスタンスで子どもたちの話し合いに参加していた。X児に、どちらがよいのかを聞かれた時は、どちらかには決めがたく、迷っていることを本音で話すことにした。子どもたちが、多数決で決める、混ぜて歌う、両方半分ずつ歌うなど、次々に案を出していく姿には、担任は心を動かされていた。これこそが「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」だと感じたからである。

この話合いの際に、他県からの参観者がいた。その方々と、この話合いについて語り合う機会をもつことができた。そこでは、子どもとともにくらしをつくっていく教師がどうあるべきかについて話題になった。担任は、この話合いでは一緒に考え、悩んでいくようなスタンスでいたが、一人の仲間としてはっきりと自分の考えを言うこともできた。どちらのスタンスもそれぞれのよさがある。大切なのは、教師も、子どもとともに幸せなくらし（ウェルビーイング）をつくっていくような在り方である。そのような意味で、話合いの際

に、担任がどう考えているかを聞いたW児にとって、担任はくらしをともにつくっていく存在であったのではないかと共有した。担任もしっかりクラスの仲間として受け入れられていると思うと、とてもうれしい気持ちになった。

考察

　みんなの時間を核に「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」を捉えてきた。まずは、子どもたちが自分ごととして考えていけるように、環境を整えていく大切であると考える。今回のように、みんなで行う遊びを楽しくしたいという思いに寄り添い、話合いをする場をタイミングよく設定したり、教師が決めすぎないようにしたりすることで、子どもたちの「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」につながるのだと実感した。そして、そこにかかわる教師は、子どもたちとくらしを共にしていく一員であると考える。

　子どもたちは、何かを教えないとできない存在ではない。本事例で示してきたように、話したいという思いがあると、話型やスキルを教えなくても自分たちで話し合って解決していくことができるのである。子どもたちが自分で育とうとする存在であることを信じ、環境を整えることが大切であると考える。

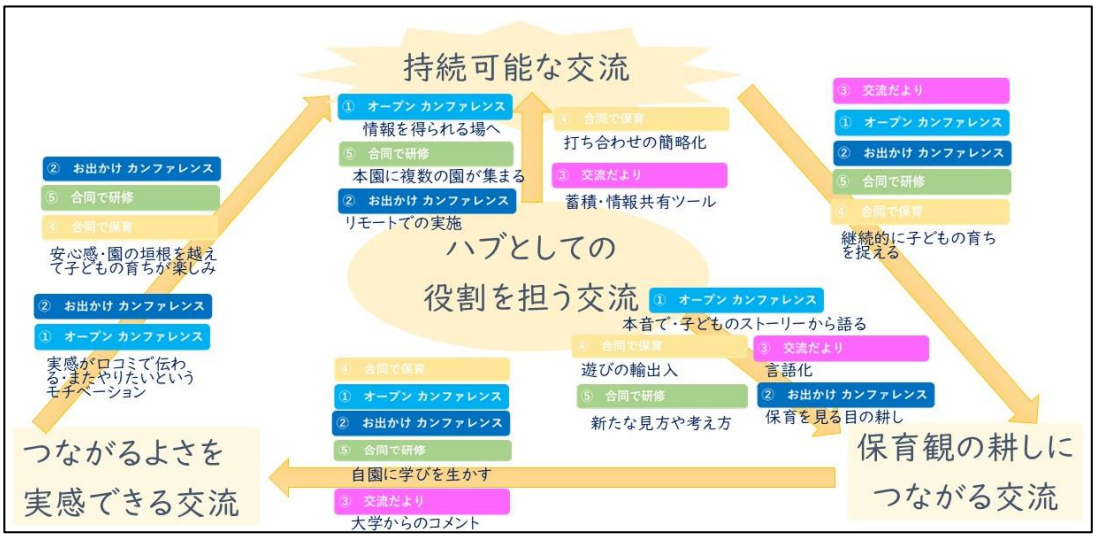
　このような「自分たちのくらしを自分たちでつくる姿」が、小学校でも見られることを願っている。

３　今年度の研究を振り返って

（１）成果と課題

交流の継続的な実践と検討を行ってきたことによって、より多くの園の保育や、その背景にある考えにふれることができた。本園の保育について、他園の保育やその背景にある考えと照らしながら語り合い、保育実践に生かし、また交流する…、このプロセスでは、前項のエピソードで示したように、各保育者が保育の本質にふれるような捉え直しがあり、「つながり」が広がり、深まっている実感を得た。

本園が目指している「つながる保育」のしくみは、「ハブのような役割を担う交流」「保育の捉え直しにつながる交流」「つながるよさを実感できる交流」「持続可能な交流」の４つの要素が連関し合ってこそ、真のしくみとして機能するのではないかと考えた（図１）。その全ての視点をもちながら、交流の場をよりよくつくりかえ続けていく、交流での学びを広く共有し続けていくことが、「つながる保育」を行う上で大切なのではないかと捉えた。



（図１）４つの視点の連関

「つながる保育」で多様な保育にふれることによって、私たちが保育を語る中でうまれた言葉、使ってきた言葉の意味を子どもの姿に照らして考え続けてきた。その問い直しは、保育の中で、数えきれないほど生かされている。子どもを目の前にしたとき、頭の中で、これらの言葉をもとに子どもの楽しみを捉えたり、援助を考えたりしているからである。交流した園でも、同じような問い直しをしてきた手応えや、保育を前向きに更新している実感があったことを、交流後の感想から知ることができた。地域の多くの園が交流をすることによって、地域全体で保育の質にかかわる認識を共有していくことにつながると考える。そこに「つながる保育」の一つの意義があると捉えた。

２年間の交流の中で「つながる保育」をしていくためのしくみが整ってきたといえる。今後、私たちが継続して行ってきた「つながる保育」が、地域に広がっていくことを願っている。「つながる保育」にはどのような価値があり、幼児の育ちにどうつながっていくのか、そして、そのしくみが汎用性の高い、確かなしくみとして機能するためには何が必要なのかを考え続けていきたいと思いを新たにしている。

（２）職員の振り返り

「つながる保育」２年目の今年、昨年度からの継続的なつながりによって、自分の中の保育観、子ども観が更新されている実感があった。様々な園に訪問し、保育を参観させていただく中で、初めて会う目の前の子どもをどうみるか、そしてその子どもの姿をどう意味づけるかは、私にとって、とても難しいことだった。この子は何を思っているのだろう、何が楽しいのだろう、どうしたいのだろう…。考え続けることが、自分の保育観を耕すことにつながっていることは明らかだった。これを繰り返すうち、「こどものせかいをみる」ことの大切さ、難しさを感じるようになった。「こどものせかいをみる」この言葉も交流の中で他園の先生からお聞きした言葉である。この言葉の意味を考え続けた１年だった。多様な方との交流によって、これまで考えが及ばなかったことを考えるきっかけになったり、これまで当たり前だと思っていたことを問い直すきっかけになったりした。交流を通して、気付いたこと、学んだことを今後の保育に生かしていきたい。【３歳クラス担任】

オープンカンファレンスでは、参観によって保育場面を共有した上で様々な視点からの対話ができ、自分の実践に還元される価値があった。他園からの来園者から意見を得る機会があることは、他者性が活きた振り返りとして機能した。カンファレンスが自園の保育の質にどのように影響したのかは慎重に見ていく必要があるだろう。より高次元な保育実践を目指すためにはカンファレンスのアプローチになんらかの工夫が必要だと考える。他園でのお出かけカンファレンスでは、各職員の関心や捉え方、独自の知的資源が表出する場面があり、より開かれたカンファレンスによって得られるものは、新しい風を自園に入れる上で有効に働いたと感じた。

「ハブ」という概念はトップダウンと異なり、地域の教育資源同士を対等な関係でつなげていくことだと考えている。教育資源をつなぐ際に自園を経由することで付加価値をつけられるとすれば、自園はまさに地域のセンター的な位置づけになる。「保育の質を超えた言説」や、OECD（加えて文部科学省）が注目する Co-Agency などの観点からも、現時点でそのような取り組み（関係作り）ができると、先進的な園として自園は地域の教育のより重要な位置づけになると考えている。【3 歳クラス副担任】

園での勤務経験が初めてで、保育について迷うことばかりだったが、多くの園の先生方と、子どもたちの見方、環境構成、援助の仕方やタイミングなど、保育について様々な方向から語り合うことで、少しずつ自分の中で保育に対する視野が広がってきたと感じている。目の前の子どもたちは、どんな思いをもち、何を楽しみとして、何をしようとしているのか、その先にはどのような育ちがみられるだろうか･･･正解のない保育の世界だからこそ、それぞれ異なる園の文化をもった職員が、子どもたちの姿について語り合うことは、価値のあるこ

となのだと思う。
　語り合いを通して、自分の中の迷いが少しずつ整理されていく実感があり、本園の保育が大切にしていることについて改めて見つめ直す機会にもなった。これからもたくさんの方々との出会いを大切にして、「できる、できない」ではない、子どもの思いを大切にした保育を追求していきたい。【4歳クラス担任】

　保育に「これで良い」という正解はなく、常に思い悩む。だから常にアップデートして語り合うことで、子どもたちのため、子どもたちにかかわる全ての保育者の大切な学びと気付きになっていく。この語り合うこと、学び合うことこそが、一人の子どもも取り残さない、一人の保育者も取り残さない保育につながっていくと思う。さらに、校種を越えてこの取組が行われていくことで、子どもたちの生涯を通した「ウェルビーイング」にもつながっていくだろう。【4歳クラス副担任】

　つながる保育の研究を始めてから、自分の保育はこれでよいのだろうか、と常に考え続けてきた。この答えの出ない問いを前向きに考え続けてこられたのは、園の垣根を越えて語り合える仲間がいたからではないかと振り返っている。保育での迷いを語り合い、明日からの実践に生かし、また語り合う…。そのプロセスは、私の保育をつくる大切な営みの一つになっている。自分の悩みや迷いを語ること、つまり、自分をひらくことは簡単ではないと考える。自分自身もすぐにできたわけではない。しかし、今こうして自分をひらき、悩みや迷いを語れているのは、同じ地平で保育を考えていける仲間と継続的に語り合うことができているからではないかと思っている。この1年間、つながる保育を継続できたことは、私にとって大きな価値があったと振り返っている。
　今後、これまでにつくってきたつながる保育のしくみ、そのしくみの中で紡いできた私たちと子どもたちのストーリーを広く発信していきたい。そして、地域の中で、みんなで保育の質を高め合っていけるようなコミュニティがつくられていくことを願っている。そのためのハブになるような本園でありたい。子どもたちを取り巻く、全ての人が幸せになることを願って。【5歳クラス担任】

　日々の保育はいつもめまぐるしく、子どもへの私の援助が良かったのか悪かったのか考える間もなく過ぎてしまう。交流で様々な先生方とゆっくり語り合う時間が新しい考え方や接し方との出会いの場になった。また、今の私のままでできることをやろうという気持ちがもてるようになった。そう思う心の中に一滴、二滴と様々な先生方の考えや援助の良いところや、その思いを少しずつ染みこませていくことで、違う援助ができる自分になれたのでは、と思う。【5歳クラス副担任】

今年度は他園と多くつながってきた。他園の先生方と交流をもつ中で、互いに保育の悩みや迷いが同じであることの安心感をもったり、新たな視点に気付いたりすることができたのではないかと思う。同時にオープンカンファレンスは、自分たちの園のよさや強みに改めて気付くことができた場でもあった。合同保育ができれば、保育で大切なことがより明確になるのではないかと思う。【教育補佐員】

「つながり」の仕組みについては、続けていくことができそうなことと、負荷がかかりそうだということが分かってきた。職員が代わっても、できる形で継続していきたい。

関心が高まっているのは「カンファレンスの質」と「交流が子どもたちにどう影響しているかを、どう考えるか」ということ。よりよい語り合いを探っていきたい。また、研究協力者の先生からアドバイスをいただいた生態学的システム論について、先日、偶然他の場でも学ぶ機会があった。VUCA 時代、子どもたちの健康問題は多様で複層化しており、見えるところだけ見ていてはダメということなのだと捉えた。私たちの園の子どもを中心に置き、そのすぐ周りにいる私も、交流においていろいろなことを見たり聞いたり考えたりしてきた。目の前の子どもに直接保育支援を行う人、直接保育支援を行う人が交流した相手、その交流の相手の方はどんな文化や背景をもっているのか、外側から中心に向けた影響について考えるという視点は、「つながる保育」にも当てはまると思う。【養護教諭】